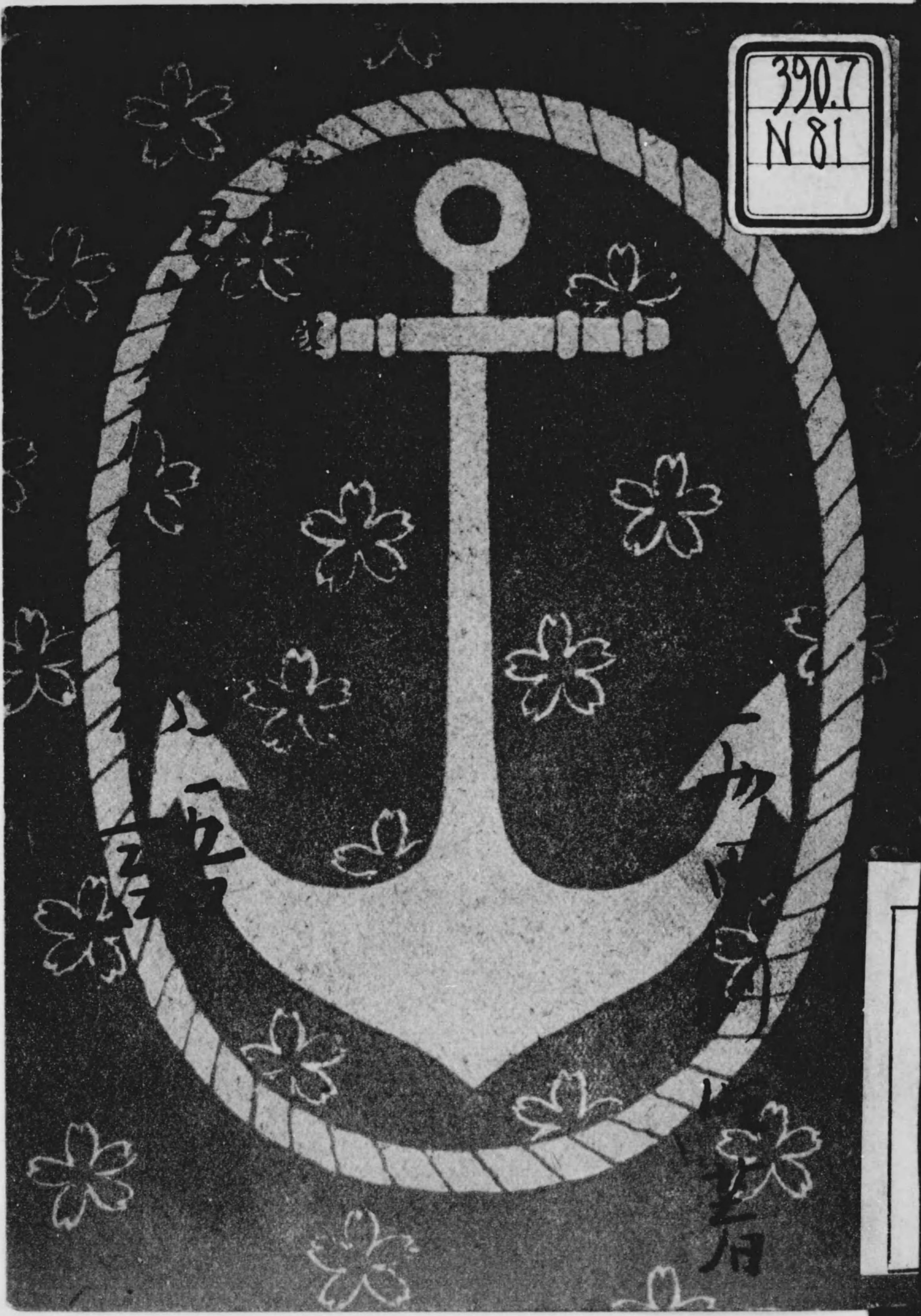


390.7
N 81



* 0055698000 *

1

0055698-000

390.7-N81ウ

予科練物語

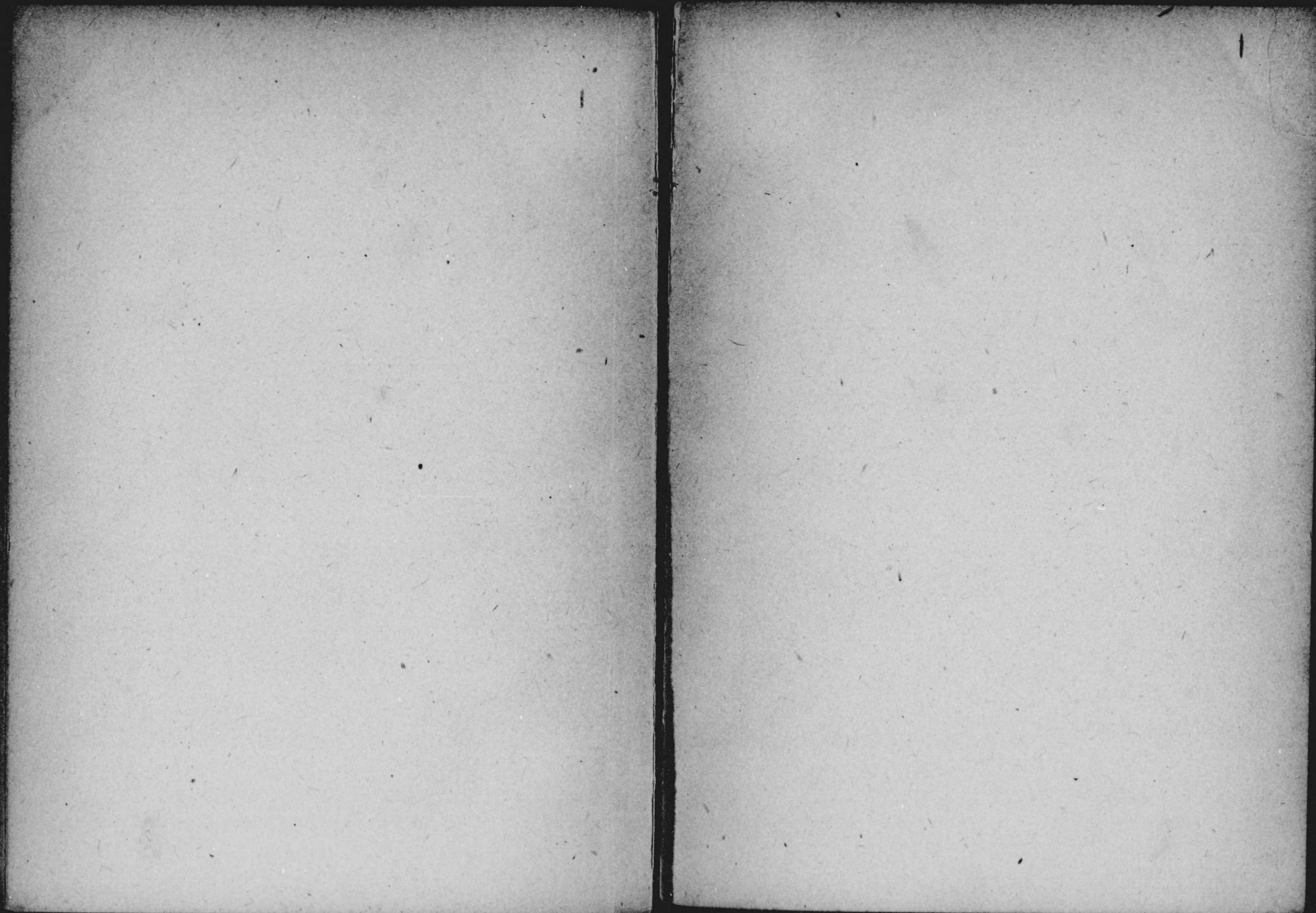
西田利明・著

鶴書房

昭和19

AJA

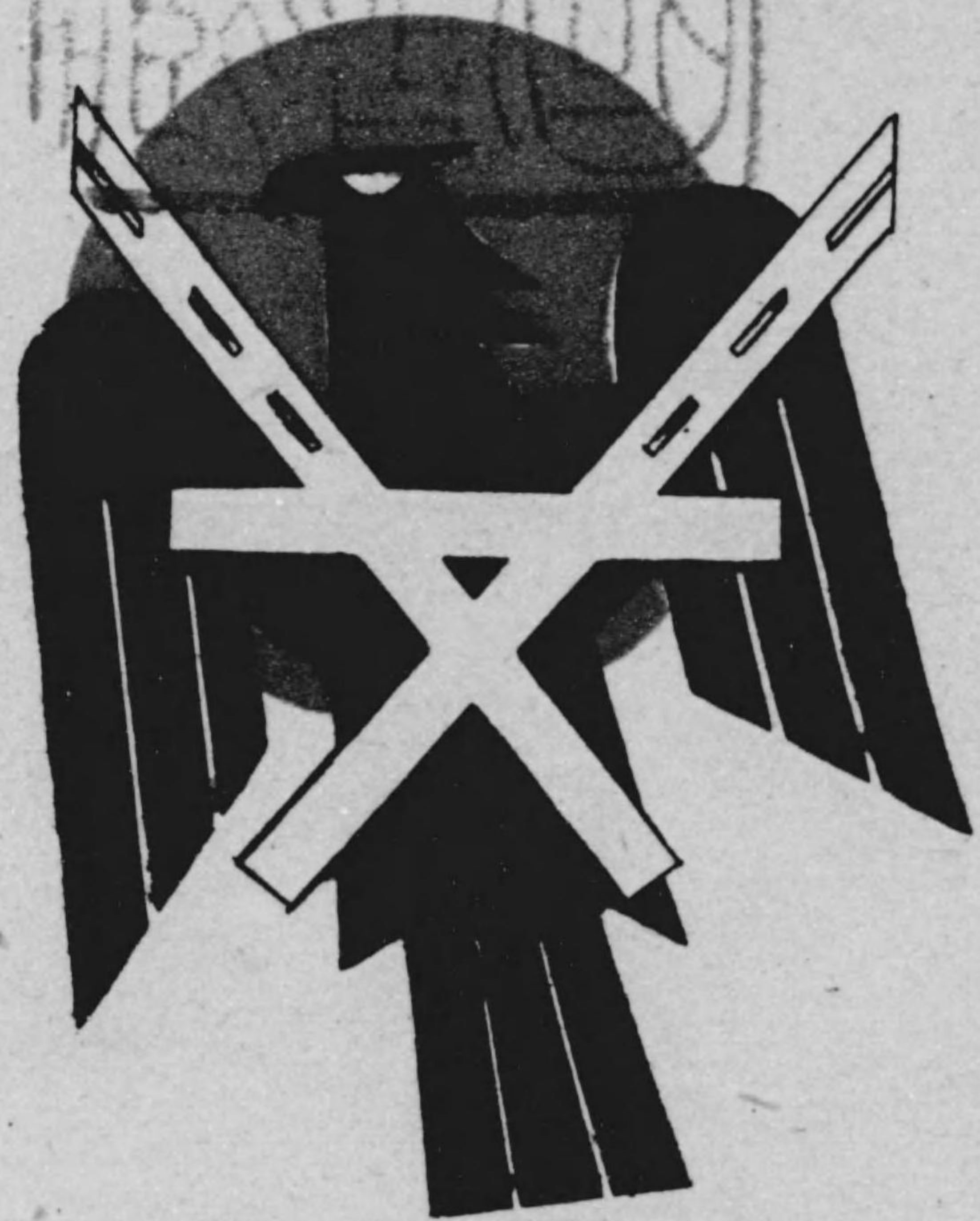
この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第67条の規定に基づき、平成12年3月2日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。



390.7
別N81

言 給 物 科 録

著 明 利 田 西





序

現代の戦争において制空権を失つては如何なる艦船、陸上兵力を以てしても勝目がな
いことは今や説明の要なき嚴たる事實である。

この制空権を獲得せんためには、素より優秀なる飛行機を一機でも多く造ることを必
要とするが、これにも増して大切なことは、最も優秀なる飛行機搭乗員を得ることであ
る。

即ち、今日國家最大の急務は、身體強健にして、盡忠報國の念に燃え立つ青少年が、
敢然として搭乗員を志願し、優秀なる腕を磨き上げ、縦横無盡、その翼下に敵國の青少
年を蹂躪し盡すことである。

本書はこれ等誠忠なる青少年の指導書として好適のもの信じ、敢て推薦する次第で
ある。

昭和十九年二月

海軍航空本部教育部長海軍少將 有馬正文

序

昭和十六年十二月八日、あのハワイ海戦においても、また十日のマレー沖海戦においても、航空戦が、いかに威力を發揮したかは、今さら言を新にするまでもないと思ひます。

その大東亞戰の劈頭の戦において、まだ年二十一歳を越えるか、越えざるかの、海の若鷺、飛行豫科練習生出身の飛行兵が、いかによく戦つたかは、諸君も御存知のことでありませう。

航空戦は、日を追ひ、月を加ふるに従つてますますはげしくつづけられるやうになつてをります。正に大東亞戰は、太平洋上の空においてその勝敗をつけられるといつても過言ではないでありませう。

それ故にこそ、敵米英においてすら、必死の對策を講じ、その量をたのんで、我をうたんとさへしてをるのであります。すなはち、飛行將校の八〇パーセントを學生によつて増強し、また、その航空機の生産量をさらに大にせんとするが如きは、その好き一例であります。

敵でさへかくの如くでありますならば、我はまた、それ以上であらねばなりません。現下航空機増産戦においても、將又、海軍飛行兵の養成においても、さらに一段の飛躍をせねばならないことは、今日ほど急なる時はないと考へる次第であります。

諸君、さあ我々は上空の決戦場に行かうではありませんか。今こそ、空の戦場で、日米兩國の青少年學徒が相見えん時、今日に備へんがために、我々の苛烈な鍛錬をして來た、この智力と體力を見せる時が來たのだ——といへるのであります。

南の空は、北の戦場は、海軍飛行兵の勇士が飛び立つて來る日が一日も早からんことを待ち望んでゐるのであります。

この時にあたつて、三重海軍航空隊を取材した、西田利明君の本書が世に送り出されることは、その意味において尠からず貢獻するであらうと信じ、本書により飛行豫科練習生の眞の姿が日本の青少年に傳はるならば喜びに堪へないところであります。

昭和十九年二月

海軍航空本部
教育部海軍中佐

清 水 洋

目次

序文

海軍少將 有馬正文閣下

序文

海軍中佐 清水洋殿

珊瑚海の華と散る……

一

ポルト・モレスビーで自決した若鷲……

四

軍神と佐久間魂……

七

日記にみなぎる潜水艦魂……

三

十二月八日の感激……

一六

聞け帝國海軍の榮光……

一九

お父さんお母さん有難うございました……

二二

入隊手續はかうすればよい……

二七

誰でもなれる少年飛行兵……

三三

豫科練の進級の話……

三七

心も楽し晴れて入隊……

四二

見違へたぞ雛鷺二人……

四四

健康についての親心……

五二

手紙で知らせる三重空の日課……

六〇

三重空の教育を聞く……

六七

三重空の剣道について……

六八

敢闘精神を養ふ柔道……

六五

體操と闘球の話……

六七

實戦にそなへる水泳訓練……

九一

待ちに待つた適性飛行とは……

一〇三

副長が話す唐統の話……

一二

感激にうるむ教官への母親の手紙……………一五

これこそ……………二六

征け決勝の大空へ……………二七

豫科練の試験問題……………一三

あとがき……………一五

装 幀 鈴 木 朱 雀

本書掲載海軍関係寫眞の複寫、複製は海軍省許可濟(第一二六七號)

珊瑚海の華と散る

珊瑚海海戦の時である。相手方の艦隊を、敵味方の航空部隊が、同時に発見したことがあつた。この時、攻めることにかけては、世界無比の日本の航空部隊は、ただちに敵の航空部隊の本據である航空母艦をみつけてしまひ、あの十七年の五月七日、八日における大戦果となつた。

わが航空部隊は赫々たる戦果を舉げて歸つてきた後、飛行機は航空母艦の中に收容されるのであるが、時も時、敵の飛行機が味方の艦隊をみつめて、雲霞のやうな勢でやつてくるのがわかつた。

どうしてこのやうな事になつたかといふと、これは味方の飛行機が逸早く敵艦隊を発見し、大戦果を舉げて歸つてきたのであるが、敵の飛行機は母艦を飛びだしてから、長い時間がかかり、今やつとわが艦隊をみつけたといふわけなのである。

しかし、このままではすまされぬ。こちらの艦隊の上空には、味方の飛行機が一機もゐないといふ状態で、敵機の襲撃を受けたら全滅よりほかはない。收容した飛行機を、もう一度直ぐに飛びださせるといふやうなことは簡単にはいかない。わが艦隊の人々は、誰

も彼も『はつ』と、思はず顔を見合はせた。

——この時、もうそろそろ南海の空のはてに沈んで行きさうな陽の光りを、銀翼にきらきら反射させながら、たつた一機、それも燃料槽をやられてゐるらしく、ふらふらとしたかつかうで敵機の反対側から、わが艦隊めざして飛んでくる飛行機があつた。

敵機か味方か。

司令官以下艦隊の人々は眼をこらした。まさしく日の丸のしるしが翼についてゐる。日本機だ。日本機に違ひない。

下では艦上の司令官以下全員が直ぐさま敵機にたいして應戦準備を進めてゐる。はるか向かふからは敵機が數十機翼をならべて猛然とやつてくる、その反対側に傷ついた味方の機がたつた一機飛んでくる——まつたく息づまる瞬間であつた。

敵機とわが艦隊の距離は刻一刻近づいてくる。味方の一機は、もうわが艦隊の上に来てぐるぐる何かいひたさうに飛んでゐる。

敵機はたちまち眼の前にやつてきた。プロペラの音が無氣味に艦上の人々の耳を打ち、わが艦も今まさに高角砲を打ちあげようとした瞬間、今までちよつと雲間にみえなくなつてゐた、傷ついたわが機が、敵の一番先頭に飛ぶ指揮官機をめぐらして、がつとばかりに正

面からぶつかつて行つたのである。

『やつた』と、艦上の人々は思はず息を呑みこんだ。

雷撃する場合には、飛行機は編隊をつくつて行くのが普通である。さうして、この編隊の先頭にある指揮官機の命令で、魚雷を一齊に發射するのであるが、雷撃する直前に指揮官機がやられると、もうこの編隊は雷撃する時機を瞬間失ふとみる間に、支離滅裂になつてしまふものである。この場合もさうであつた。わが傷つける一機の必殺の體當りによつて支離滅裂になつた敵の虚をついて、猛然と火を吐く高角砲、そのうちには收容された味方の機も飛びだすやうになつたのである。

『よくやつてくれた。よくやつて……』

艦上の人々はその武勳をたたへる感謝の眼で、敵機に自らぶつかつて華と散つたわが機はいづこと南海の一隅をみつめるのであつた。

後でわかつたのであるが、この搭乗員は、豫科練習生出身で、〇〇海軍航空隊の第〇期生の時一番で卒業した優秀な、しかも非常におとなしい人であつたといふことである。

燃料槽をやられて、他の僚機より一時間も二時間も遅れて歸つてきて、この壯烈な戦闘をやつてのけたわけである。——

この話をして下さつた三重海軍航空隊の分隊長T大尉は、語り終つて、かつてはわが手で教へ、〇〇海軍航空隊から巣立つて行つた、その豫科練習生を思ひうかべるやうであつたが、最後にかう結んだ。

『私たちでも、亂戦の最中でしたら自爆でも體當りでも、それはできないことはありません。しかし、一度空中戦をやつて歸つてき、それも傷ついた飛行機をやつと操縦してきたのが、また敵に突つこんで行くなどといふことはちよつとできにくいものです。これこそほんたうに自己の一身を鴻毛より軽く考へ、己れを殺して全軍を勝利に導く、眞の軍人精神をつかんだ、さらに彈丸のごとき突撃肉薄精神をもつた人でなければできないことです』最近戦地から歸つてきたばかりであるといふT大尉の言葉には、何か戦場の匂ひでもするやうであつた。

ポート・モレスビーで自決した若鷲

豫科練出身飛行兵の奮戦記はたくさんあるが、これも三重海軍航空隊のT大尉から聞いた話である。――

ポート・モレスビーを爆撃に行つた時、甲種豫科練習生出身の飛行兵であつたが、不幸にもその一機だけポート・モレスビーの上空で敵弾をうけて、その近くのニューギニアの海岸に不時着してしまつた。

指揮官機は、それを救助するわけにいかないのです、上空で最期を見届けるつもりで飛び續けてゐた。他の味方は引揚げてしまつて、指揮官機が一機残つてゐたのである。

その飛行兵はT大尉もよく知つてゐたさうであるが、その時の最期が、實に立派であつたことを後で知らされて、胸をしめつけられるやうな氣持になつたさうである。

指揮官機が三百米位の低空まで降りてみると、その飛行兵は不時着した飛行機から降りて、おもむろに書類をだして、海岸でマッチをつけて焼いてゐるのである。

それから飛行機に火をつけて焼き、焼きをはると手をふつて、上を飛んでゐる指揮官機にたいして手旗信號をするのであつた。

『オセワニナリマシタ。タダイマヨリジケツシマス』

このやうな信號を送つてゐる。

指揮官はその飛行兵が何をやるかといふことはよくわかつてゐるから、悲壯な氣持で上空からみまもつてゐると、この指揮官機に最後の挨拶の手旗信號をすませた飛行兵は、拳銃を額にあてて、見事に自決して果てたのであつた。二十歳前後の若い、まだ子供つ氣の

抜けない飛行兵なのである。それがさういふ敵地で、死ぬほかはないといふ時には少しもあわてず、騒がず、自若として、書類をちやんと処理し、飛行機も処理して、その上指揮官機にたいして挨拶の信號を送つて、さうして立派な最期を遂げたといふ事實——。

『私などは、よくやつてくれたと思つて、その話を聞いて非常に嬉しく思ひました。ほんたうに、この髭むじやな顔に涙をぼろぼろ流して、立派な最期をたたへて、「えらかつたぞ」と心の中でいつてやりました』

と、T大尉はその時の感激を思ひ出すやうに語るのであつた。

このやうな話は、他にも數限りなくあるが、いかに海軍少年飛行兵が勇猛果敢であるかを、かうした一つ、二つの例でも十分知ることができるのである。

私はこの話を、かつて海軍航空隊で聞いた時、息づまるやうな感激に胸を打ちふるはせたものであつた。

偉大なるかな、海軍少年飛行兵。身はたとへ南海の藻屑と消えようと、とこしへにかをるその勳は、深く一億國民の伏し仰ぐものである。

どうして、海軍少年飛行兵はこのやうに立派なのであらう、どうして、かくも立派な攻撃精神と犠牲的精神を持つてゐるのであらう。——生まれながらの優れた素質を持つた人々

なのであらうかと、一時は疑問をはさんだこともあつた。皆さんも、きつとさう思ひはしないだらうか。——しかし、事實は普通の青少年と少しも變らないのである。體力も知識の程度も中程度の青少年たちなのである。それがどうしてあのやうな一人前の立派な荒鷲になるのかと思はれるかも知れないが、それはとりも直さず、海軍航空隊の輝かしい傳統の中に育てられ、適切なる教育をうける結果から、さうなつて行くのである。

私は土浦、三重の兩海軍航空隊を度々見學し、更に航空本部から資料を頂くなどして、その眞の精神の一端にふれるに及んで『素晴らしいなあ』と、心から感動を叫んだのである。世の人から海軍少年飛行兵よと敬愛される輝かしい希望をもつ、飛行豫科練習生たちの生活を——三重海軍航空隊を通じて、これからそれを語りたと思ふのである。

軍神と佐久間魂

三重海軍航空隊の話をする前に、私の隣組の、ある家に下宿してゐる、佐々木少年のことについて先づのべたいと思ふ。

なぜ佐々木少年のことを書いておきたいかといふと、その佐々木少年がやがて、輝かしい少年飛行兵をめざして三重海軍航空隊に入隊するやうになるからである。

私が初めて佐々木少年に會つたのは三年前である。當時はまだあの眞珠灣の攻撃に赫々たる武勳を樹てた九軍神のことは發表されてゐなかつたが、やがて特殊潜航艇の奮戦状況などが發表されるに及んで、その九軍神の一人、佐々木直吉少尉が、奇しくも私の隣組の家を下宿してゐる佐々木少年の親類にあたるといふことがわかつた。

その佐々木少年がやがて第二の軍神佐々木少尉にならんとする熱烈な希望に燃えて、海軍少年飛行兵をころざすにおよんで、佐々木少年と私との往來ははげしくなつた。

ある日私は佐々木少年にこんな話をしたのであつた。

『佐々木君、僕は君が軍神佐々木少尉の親類だからといつて、こんなことをいふのぢやないけれども、このごろ九軍神と佐久間魂といふやうなことにいつて、僕はしみじみと考へてゐるのだよ。君もやがて海軍少年飛行兵となつて、立派な帝國海軍軍人として、御上の股肱となられる日も遠くはないと思ふが、日ごろ考へてゐる九軍神と佐久間魂のことについて、僕の話を開かないか』

かう前置きして私は語りだしたのである。

『佐々木君、もう二年ほど前にもなるか知れないが、元海軍潜水學校長をしてをられた海

軍中將の和波豊一閣下を玉川のお宅にお訪ねしたことがある。この時、いろいろのお話を伺つてゐるうちに、いつか話は三十四年前の昔、佐久間艇長が山口縣の新湊沖で部下十三名の方と殉職された時の話に移つて行つたのだ。もう夜も餘程遅くなるころであつたが、かへりの電車がなくなるのも忘れて、私は和波閣下のお話にひきずりこまれて行つた。

もつとも私は以前にも佐久間艇長のお話をやはり和波閣下から伺つたことがあつた。どうして和波閣下が佐久間艇長の話を度々なされるのかと、はじめは不審に思つてゐたのだが、それには次のやうなわけがあつたのだね。

それは單に和波閣下が前に海軍潜水學校長をなされてゐたといふだけではないのだ。不思議な廻り合はせといはうか、思ひ出といはうか、そんなものが和波閣下が度々佐久間艇長の殉職のお話をなされたのだ。

——話は三十四年前の昔にさかのぼる。和波閣下は當時第六潜水艇の先任將校として、佐久間艇長以下十三名の方たちと一緒に毎日艇内で起居をともししてをられて、艇長の部下として、和波閣下は非常な指導と訓育をうけられたと、今でも私たちに話されるが、この間こそ閣下のもつとも感銘深い期間であつたに違ひない。

明治四十三年三月廿八日、命令によつて和波閣下は長谷川芳太郎中尉と代つて他に移ら

れたといふことであるが、それから十九日目の、明治四十三年四月十五日のこと、あの佐久間艇長の第六潜水艇は新湊沖で潜航訓練中沈没したのだ。和波閣下は當時を思ひうかべて、あの手帳の端に書いてあつた佐久間艇長の有名な遺書、

小官ノ不注意ニヨリ 陛下ノ艦ヲ沈メ部下ヲ殺ス、誠ニ申譯無シ、サレド艇員一同死ニ至ルマデ皆ヨクソノ職ヲ守リ沈著ニ事ヲ處セリ

とあるのを自ら讀んだ時の感激をかう語られたのだ。

『あの佐久間艇長の遺書を一句々々、ふるふるほどの感激で讀んだ瞬間、それから各自が自らの配置について立派な最期を遂げてゐるのをみた時、また私と代つた長谷川中尉の遺骸をはじめ十四柱の遺骸に合掌したあの時、私はひしひしと潜水艦魂、佐久間魂の偉大さに打たれずにはゐられなかつた』

『僕は和波閣下からこの話を聞いた時は、自分も目をうるましてしまつたよ。佐々木君』冷たくなつたお茶をごくりと飲んで、私はつづけた。

『和波閣下にこの三十四年前の佐久間艇長の殉職の話を知り、それがやがて佐久間魂となり、さらに今日の潜水艦魂を作り上げるに至つたと聞いた僕は、その時に靜かに吐の中に佐久間魂、潜水艦魂といふ言葉を刻みつけたのであつた。それからまた一年半たつた。

君と手を握り合つて、日本人としての幸福さを楽しみと膽に銘じた、あの大東亞戦争勃發の日となつたのだ。君も忘れはすまい、世界平和を使命とする日本の大精神をふみにじつて、皇國日本の生命を狙はうとした敵米英のことを考へると、お互に腹が立つてたまらなかつたぢやないか。しかし眞珠灣で最初の一撃を加へた特別攻撃隊の九軍神の發表があつた時は誰も彼も、日本國民一人残らずが感激のるつぽに投げこまれてしまつたのだ。——僕はこの間から、この軍神についていろいろはしい調査をしたのだが、そのうち特に横山正治少佐や、君の親類である佐々木直吉少尉、それから稻垣清兵曹長のことを調べてゐると、私は、はたと一つのことになり気がついたのだ。それは何かといへば、この軍神の方たちの心の中に、あの三十四年前に殉職した佐久間艇長の精神が、脈々と息づいて、立派に生きてゐるといふことをしみじみと知つたのだ。他の六軍神の方たちもさうであつたと思ふが、横山少佐、佐々木少尉、稻垣兵曹長の三軍神は特に佐久間魂のことについて日記や歌に残してゐるのだ』

このやうに、私は興奮した調子で、佐々木少年に佐久間魂について語つたことを思ひだす。それから横山少佐の日記や佐々木少尉のことなどについて、いろいろなことを話したが、その時に佐々木少年にみせた軍神の日記や歌などを次に書いてみると——。

日記にみなぎる潜水艦魂

先づ横山少佐が、兵學校時代に書きつけてゐた日記を見ると――

一月一日(土曜日) 二中拜賀式に出席、軍人諸學校生徒多數出席す。

東郷墓地に詣で新年の覺悟を誓ふ。元帥の人格の半分でも、萬分の一でも真似む。午後
は展墓。照國神社參詣。夜は一家團樂。

一月五日(水曜日) 寒さ嚴冬訓練を思はしめる。間もなく兵學校へ、懐かしき古鷹山生
徒館、必勝の信念に燃えて學校に入る。大掃除、棒倒し勝負なし、次回は必ず勝たん。

一月六日(木曜日) 觀兵式行はる。元氣士氣共に旺盛。十三年度の初頭を飾る。一步一
歩踏みしめて進まん本分に行事。當日の感激とともに世界情勢に肉躍る感あり。完うせ
ん帝國の大使命を。見よ皇國の儼たる光を。日本を背負ふ若人我ら、英米の海軍何なら
ず。日本海軍を、斷然世界一海軍たらしめん。

二月八日(火曜日) 雪のちらほらする日なり、北風に冬の寒さ。然し海國男子の意氣は
旺んなり。安心すべし。世の中は要するに努力と眞面目なり。

二月九日(水曜日) 實に寒い日なり。父の命日。八方園に參拜す。聊か感慨無量なり。

年月の經つのは早いものだ。父の死は、われら小學校一年生の時なりしも、今は天下の
海軍兵學校に身を置くを得た。果して誰の恩ぞ。

大君の恩、父母の恩、師の恩、之なり。この高恩に酬ゆる正に吾人の最大の務めなるべ
し。安心されよ、不肖小生大いに頑張るなり。

四月十五日(金曜日) 相當なる風あり。短艇帆走訓練あり、佐久間艇長遭難記念日にし
て參考館に參拜。軍歌あり。

嗚呼 武人の華とうたはれる艇長も、この江田島に生じたるを思ひ、後輩として十分の
努力をなすに非ざれば、此の非常時帝國を如何にして双肩に擔ふを得んや。

――以上が日記の一節である。淡々とした日記の中に、佐久間艇長を如何に尊敬してゐ
たかがうかがひ知れるではないか。

次に、佐々木直吉少尉と佐久間魂のことを書いてみると――
佐々木少尉は、大正二年五月二十日濱田市の東郊島根縣那賀郡に呱呱の聲をあげた。そ
して村の久代尋常小學校へ入學して、更に高等小學校を卒業したが、その卒業をする時、
受持の小川音恵先生(現校長)から、軍人になつたがよいといはれたのであつた。

この時から、海軍への準備として、激しい自己錬成が始められたのである。昭和七年六月一日、宿望みごとになつて、呉海兵團に入團することができた。

そして、驅逐艦薄雲、鳶の乗組から、水雷學校を経て、磯波に乗組み、更に潜水學校、水雷學校高等科へと、一層の研鑽は続けられたのであつた。

この間、戦技優等賞を勝ち得ること二回、いかに、錬磨に心をくだいてゐたかがわかると思ふのである。特に潜水艦の乗組員になつてからは、精進は一段と続けられたといはれてゐる。

この佐々木少尉の心に刻みつけてゐた金言——それは、
サレド艇員一同死ニ至ルマデ皆ヨクソノ職ヲ守リ沈著ニ事ヲ處セリ……
とある佐久間艇長の遺訓にほかならなかつたといふ。

この精神は、やがて昭和十三年十一月一日、海軍一等兵曹に進級の實を結び、大東亞戦争勃發の日、眞珠灣の華と散らしたのである。

また、三重縣の生んだ軍神稻垣清兵曹長については——

稻垣兵曹長は大正四年十一月二十三日に生まれた。呉海兵團への入團は昭和九年六月一日である。乗艦略歴としては、驅逐艦早苗、海軍水雷學校、驅逐艦吳竹、海軍水雷學校高

等科教程等を経てゐる。

稻垣兵曹長の最後の歸省は、昭和十六年九月十九日から三日間であつた。

この最後の歸省の際、乃木大將と佐久間艇長に關する自作の歌を遺してゐる。そのうち佐久間艇長を歌つたものは、

ああ瀬戸内の海深く

書いて残した艇長の

血しほの遺書が華と咲く

男誓つて立つからは

戦の華だぐぐれ船

とある。

この歌と乃木大將に關する歌を詠んだ時の稻垣兵曹長の氣持は、恐らく、——乃木將軍が二人の愛兒を大君にささげて、親としての喜びと光榮を示した歌詞で、自分が護國の華と散つた時の、父母が親としての覺悟の程をほのめかし、また佐久間艇長の決意で、自分の敵への必殺の決意を示したに違ひないと思ふのである。

佐久間魂は軍神を生み、軍神の魂はまた次の軍神を生むに違ひない。佐久間魂こそ、不

滅のものであるといへよう。

——このことを私は、切々とたぎる心から佐々木少年に話したのだつた。

十二月八日の感激

佐々木少年が海軍少年飛行兵になりたいといふ氣持を持つたのは、田舎にゐたころであつたが、その時は或る理由で兩親や親類の許しを得ることができなかつたので、せめても飛行機に關係のある仕事をしたといふ熱い希望から、中學を卒業するとその年に募集してゐた内閣中央航空研究所に應募して、それが採用ときまつて、兩親の許しを受けて上京してきたのであつた。しかし佐々木少年をさらに奮起させたのは、大東亞戰爭勃發の日からであつた。

さもあらう、私でさへ血のたぎり立つほどであつたから、若い少年の心を打たずにはおかなかつたであらう。まつたく飛び立つ思ひに驅られたにちがひない。

想ひ起す——昭和十五年から十六年にかけて、日本と米英との國際關係は日一日と惡化して行つたあのころ——我が來栖大使がチャイナ・クリップバー機にのつて、ミッドウエイ島を通つて、アメリカに飛んだのも、なんとか向かふにゐる野村大使と力を合はせて、平

和に危機を打開しようと思つたためではなかつたか。それなのに米英は、私たちになにをもつて報いたであらうか。考へてもみるがよい。十六年の十一月二十七日には、上海に駐屯してゐた米國の陸戰隊が引揚げてゐるではないか。それに反して、フィリピンに戦備はますます強化されて行つた。英國もさうだ。ビルマに兵を増すかと思へば、マライに數多くの印度兵を送つてゐる。おまけに、シンガポールを機雷でうづめ、さらに十二月一日には、あの不沈艦といはれたプリンス・オブ・ウエールズを旗艦とする艦隊が堂々と入港してゐるではないか。

わざわざ我が來栖大使が米國に飛んで、和平に力をそいでゐる時、米英はあくことなく、このやうに戦備を強めてゐたのである。一方では經濟上の壓迫を加へて、日本がこれ以上我慢ができない、我慢をすれば戦はずして國が亡びるといふところまで追ひつめ、一方ではこのやうに戦備を進める——これは果してなにを意味するであらうか。

私は十二月八日の、あの朝、六時にニュースを聞いた時、胸が一杯になつて、大粒の涙をぽとぽと落したものだつた。胸が嬉しさにうづいてくるやうな氣持がした。沈黙の海軍が、今こそ起ちあがつた。正義日本が大東亞十億の民の平和のために起ちあがつた。東亞の植民地化と世界制覇をたくらむ米英の野望を打碎かんために起ちあがつたのだ。この

嬉しさに、私はすつかり興奮したものだつた。

その日も佐々木少年は、私の家に来て、

『やりましたね、小父さん。とうとうやりましたね』

と、感激の瞬間を語つた後、

『小父さん、知つてゐるかも知りませんが、僕の下宿してゐる家から四五軒行つたところに中學校の先生と、その裏に國民學校の校長先生がゐるのですよ。その先生がこんなことをいつてゐましたよ』

『うむ、どんなこといつてゐたね』

私は佐々木少年の眞剣な視線を感じながらたづねかへした。

『中學校の先生は、學校へ行くと、生徒は廣聲機の前で、ニースを聴いては、萬歳を唱へてゐたといふのです。どの顔も、みんな眞赤になつてゐたといふのです。それで校長先生が全校生徒を引率して、宮城前に行つて、萬歳を唱へ、それから靖國神社に參拜して、英靈に御報告するとともに、戦勝の祈願をしたといふことです。』

國民學校では、その校長先生がいつてゐましたが、私は日ごろから、太平洋こそ決戦場であるといふことを生徒に話してゐたが、あの米英に宣戦を布告されたことの發表がある

と、職員も、生徒も、すつかり感激してしまひ、教室もわれるやうな騒ぎになつたといふことでした。

それで三年生以上は、校庭にすわらせてラジオを聴かせ、小さい方の生徒たちには受持の先生を通じて、教室で、時々刻々の戦況を知らしたといふことです。

生徒たちも、幼な心にも、この戦争こそ、皆が命を捨てて戦はなければならぬ戦争だと口々にいつてゐたといふことですが、ほんたうにさうですね』

さういつて、佐々木少年は聲をつまらして涙の目を手でぬぐつたのだつた。さうして、『小父さん、僕もう我慢ができません。第一線に行つて、飛行機に乗つて戦ひたいんです。こんどこそ、お父さんやお母さんもきつと許してくれると思ふんです』

その時の感激にみちあふれた佐々木少年の聲が、今も私の耳に強くのこつてゐる。

聞け帝國海軍の榮光

その時、私は帝國海軍の有難い歴史について、佐々木少年に話してやつたことを覚えてゐる。

我が軍艦の艦首に輝いてゐる菊の御紋章、あれは日本海軍が 天子様の海軍であるとい

ふ意味なのだ。さうして畏い極みであるが、我が海軍の建設が、明治天皇の御遺業によるものだといふことを忘れてはならないのである。

明治元年には、僅かに六隻、その總噸數二千四百五十二噸でしかなかった日本海軍も、明治四十年には、すでに艦數は百二十三隻、總噸數が四十萬四千四百六十噸にもなつてゐたのであつて、いひかへれば、帝國海軍は、明治時代に作られ、明治時代に育てられ、大きくされたともいへる。

さらに、明治天皇は帝國海軍を大きくなされるために、いろいろ大御心を注がせられたが、その一例を挙げても、明治二十五年、海軍省が戦艦二隻、巡洋艦一隻、通報艦一隻の建造費を議會へ提出したが、思はしくない結果を御聽き遊ばされて、明治天皇はその年から六年間、宮中の御費用をさき給うて、毎年三十萬圓もの金額を帝國海軍に御下げ渡しになつたといふ事實もあるのだ。

『そのやうな 天子様の海軍の航空部隊に君が入隊して行くとしたら、なんと晴がましいことであらうか。なんと有難いことであらうか。君自身も胸がどるやうだらうね』

そのやうなことを話して行く私も、なぜか感激に聲が高まり、頬をほてらして、佐々木少年のさらさらと輝く目に、喰ひ入るやうに顔を近づけてゐるのであつた。

佐々木少年は、始終『うむ。うむ』と、うなづいて聽いてゐたが、私の話が終ると、『天子様の御心はほんたうに有難いですね。しつかりやりますよ、小父さん』
ぽつんと、さういつたのだつた。

お父さんお母さん有難うございました

それから三月ばかりたつたある日だつた。佐々木少年は半月ほど、私の家へこなかつたが、ひよつこり、その日は夕方訪れてきた。

相かはらず佐々木少年は私を『小父さん』と呼んで、いつになく、にこにこ顔をほころばしてゐた。

『どうしたのかね。ずるぶんこなかつたぢやないか』

私は佐々木少年に團扇をすすめながら、書齋のガラス戸をあけ直して、風の通りをよくした。

『ええ、航空研究所の方がいそがしかつたので……』

さういひながら、佐々木少年は學生服の内ポケットをもそもそとさぐつてゐたが、一通の手紙を私の前に差し出したのである。

『誰の手紙だね』

私はそれを、私に読めといふつもりでだされたのかどうか、なかば迷ひながら佐々木少年の顔をながめた。佐々木少年は今までおさへてゐた嬉しさが急に爆發したやうな聲で、『とうとう許されたのですよ』

大きな聲でさういつたのだつた。

私はそれがなんであるか、すぐにわかつた。佐々木少年のお父さんやお母さんが、きつと彼の海軍少年飛行兵になることを許したに違ひないと思ひはしたが、私はその喜びを、佐々木少年の口からいはずしてみたいやうな氣持になつて、

『なにを？』

と、とぼけて問ひかへしたのだつた。

『なにをつて小父さん、海軍少年飛行兵のことにきまつてゐるぢやありませんか。お父さんやお母さんが、僕が豫科練習生になることを許してくれたのですよ。そのお許しの手紙なんですよ、これ』

私は、『よかつた、おめでたう』といふ意味を一杯こめて先づ彼の肩をたたいてやつた。

『よかつたなあ、これですつかりなにもかもお許しがでたといふわけだね。よかつた。よ

かつた』

佐々木少年へきた手紙には、このやうなことが書いてあつた。

拜復 お前からの便りをみたが、相かはらず元氣で精勤してをられるとのこと、當方一同安心した。家の方もお蔭で皆達者で暮してをる。二三日前、郷里にゐる美紗（佐々木少年の妹）も元氣で毎日通學してゐると、便りをくれた。美紗も、女學校から勤勞奉仕にいつてゐるといふことだが、至極元氣で、それに勤勞奉仕の合間をみては、學校の方の勉強もやつてゐるが、風邪一つひかないといつてゐる。

皆元氣で各自のそれぞれの道に邁進してゐることは、ともも直さず、天子様への、お國への御奉公であるといふことをしみじみ感じさせられてをるよ。

昨晚おそく仕事を終へて家へ歸つてくると、お前からの便りがきてゐたので、嬉しく讀んだ。今この返事を書いてゐるが、時計をみると、もう二時半を廻つてゐる。

お前の書いてきた、海軍少年飛行兵になりたいといふ氣持は、現下の青年として、當然のことだと私も思ふ。お前は、陛下に捧げた赤子だ。父母になんの異存があらうはずはない。大いに奮闘して、試験をみごとにとほり、やがて航空隊に入隊できるやう努力

してくれ。さうして、日本に生まれて、御皇恩の萬分の一たりとも御奉公できるやう勵んでもらひたい。

お前は國民學校にゐるところから飛行士を志望してをり、私も母もそれを許してやりたことは始終思つてゐたのだが、お前も知つてのとほり、母は病身であるし、それにお前は長男であるといふことから、一時はお前が志望してゐた海軍少年飛行兵になることを許せないやうなことになるが、今はそのやうな、私たちだけの都合や、自分の身勝手をいつてをる時でない、つくづく考へさせられてゐる。

もちろん、私も日本人である以上、飛行兵になりたいといふお前のところざしは十分承知はしてゐるが、できるならば長男であるお前には、第一線に立たなくても何んとか、天子様に、お國に御奉公する途はないかと考へて、せめて飛行機に關係のある中央航空研究所にお前が入りたいといふのを許したのが、當時としては、私ども父母がでさる精一杯のことだつた。

しかし、今はさうでない。もちろん今の仕事も大事であらうが、さらに、國家は第一線で戦ふ飛行兵を、より一層欲してをるといふことを、私たちも痛感させられるやうになつた。

もうお母さんが病身であるとか、お前が長男であるからなどといふことは、お前も考へなくてよい。前にも書いたやうに、天子様の赤子として、立派にお役に立つてもらひたい。

この半島にも、やがて徴兵制が布かれるやうになる。さうして、またこの半島の人たちの特別志願兵は非常な數に達してをるといふことも聞いてゐる。お前もこの人たちにまけないやうに、しつかりやつてもらひたい。

いまさら、父がくどくど書く必要もないと思ふが、先輩の方々をよいお手本として、敵米英撃滅に向かつて、突撃の覺悟でやつてくれ。父もこの半島で大いに働くつもりだから、安心して海軍少年飛行兵を志願したらよい。

半島も、今年中に飛行機を百機獻納しようといふ運動が開始されてゐるが、これも一つに米英撃滅への、烈々と燃える闘魂の現れだ。父も母も頑張る。郷里にゐる美紗も、あれはあれなりにしつかりやることだらう。佐々木家の總進軍なのだ。

母がくれぐれもいつてゐることは、健康に注意して、大事の前に體をこはさないやうにとのことだ。

もう夜中の三時も廻つた。ではまた、結果の便りを待つてゐる。

裏を返すと、京城府龍山區京町×番地、佐々木繁としてあつた。

かねてから、佐々木少年のお父さんとお母さんは、鑛山の方の仕事の関係で、ここ一年ほど朝鮮の方へ行かれてゐると聞いてゐたが、そこからの便りであつたのだ。

私はもう一度、

『よかつたね』

と、その手紙をていねいに封筒にをさめて佐々木君に渡した。

『小父さん、この手紙をもらつた時には、ほんたうに朝鮮の方へ手をついて、お父さん、お母さん、有難うございましたと、僕は大きな聲でさういひましたよ』

『ほんたうにさうだつたらうね。さあ、お許しがでたら、こんどは試験の準備をしなればいけなよ。しつかりとね』

『ええ。これで落ちたら、父母に申しわけありませんから、きつとしつかりやりますよ。』

ほら、體だつて、このごろはこんなにしつかりしてきたのです』

さういつて、私の鼻先で、腕をまくつて力瘤をだしてみせるのだつた。

入隊手續はかうすればよい

ここで、海軍少年飛行兵になるにはどうすればよいか、といふことを述べよう。

豫科練習生は、甲種飛行豫科練習生と乙種飛行豫科練習生との區別がある。佐々木少年は甲種飛行豫科練習生に入隊したので、まづその方から述べてみよう。

この甲種は、入隊の年の十二月一日現在で満十五歳から二十歳未滿の者が志願できるのである。學力は、中學校第二學年終了程度の者である必要があるが、學歷には制限がないのであるから、國民學校をでて、夜學で勉強した者でも、商業學校の三年の者でもかまはない。それに優等生でなければ入れないといふのではない。それは成績のよいことに越したことはないが、まづ中位ならば入隊できるものと考へてよいであらう。

體格はつぎの表に示す規格によつて検査を受けるのである。

視力	年齢				
	十七年以上	十七年未満	十六年未満	十五年未満	十四年未満
體格	十七年以上	十七年未満	十六年未満	十五年未満	十四年未満
身長(糎)	一五四・〇	一五二・〇	一四九・〇	一四五・〇	一四一・〇
體重(庇)	四六・〇	四三・〇	四〇・〇	三七・〇	三四・〇
胸・圍(糎)	七六・〇	七五・〇	七二・〇	六九・〇	六七・〇
胸廓擴張(糎)	五・五	五・〇	五・〇	四・五	四・〇
肺活量(立糎)	二、九〇〇	二、八〇〇	二、六〇〇	二、五〇〇	二、三〇〇
握力左右(庇)	二四・〇	二三・〇	二二・〇	二〇・〇	一八・〇
視力	各眼視力一・〇 但し片眼のみ〇・八以上にして兩眼視力一・二に達する者は合格とす				

この外に懸垂がある、吊された繩に片手でつかまつて自分のからだを吊り下げるのであつて左右各三秒間づつ耐へられなければならぬ。

募集の時期や志願書の提出期日、検査日割、検査の場所は、各地方長官、すなはち道府縣知事などから一般に告示されるほか、ラジオや新聞、ポスターなどでも發表される。志願者はその募集が發表されたら、まづ親権者(戸主)の同意をうけてから、次のやうな志願書を作るのである。(太字は記載例を示したもの)

海軍甲種飛行豫科練習生志願書

本籍地 **大分縣宇佐郡南院内村二十八番地**

現居住地 **福岡縣小倉市板櫃臺町四百十六番地 (何某方)**

戸主トノ續柄 **戸主 千代松 次男**

山 田 次 郎

昭和三年十一月二十一日生

一 修學程度 **大分縣立宇佐中學校第三學年在學中**

一 現職業 **ナシ**

一 現居住地ニ移轉年月 **昭和 年 月**(志願書提出前六月以内ニ移轉シタル者ノミ記入ノコト)

右甲種飛行豫科練習生ヲ志願致度此段出願候也

昭和十九年七月一日

現住地 **福岡縣小倉市板櫃臺町四百十六番地**

本人 **山 田 次 郎**
 親権者 **山 田 千 代 松**
 又ハ後見人

福岡縣知事殿

(朝鮮、滿洲及び關東州に現住地を有する者は吳鎮守府司令長官、臺灣及び支那に現住地を有する者は佐世保鎮守府司令長官宛とすること)

志願書ができたならば直ちに市(區)役所、町村役場に持参するのである。宛名は、地方長官になつてゐても、各市(區)町村長を経て提出することになつてゐる。

さうして疑問のことがあつたならば、市(區)役所、町村役場に問合はせ、それでも不審の點があれば、何でも最寄りの海軍人事部(横須賀市、吳市、佐世保市、舞鶴市)又は地方海軍人事部(札幌市、青森市、秋田市、仙臺市、盛岡市、長野市、山形市、宇都宮市、静岡市、名古屋市、新潟市、津市、大阪市、神戸市、金澤市、岡山市、高松市、高知市、松江市、福岡市、熊本市、鹿児島市にある)に問合はせればよく教へてくれる。

次に乙種飛行豫科練習生のことについても述べておきたい。

年齢は、満十四歳八ヶ月以上、二十歳未満の者である。このときに十四歳の者だけは、入隊する年の三月三十一日現在であり、他の者はすべて十二月一日現在でこの年齢にあればよいのである。

學力は、國民學校高等科終了程度の試験に合格した者である。参考のために、この本の終りに、問題集をつけておいたから、みて頂けばわかると思ふが、國民學校初等科卒業程度の者でもやすやすできるやうな問題である。

體格は甲種飛行豫科練習生と同様であるから前に記した規格にあてはまればよい。

志願者の検査は入隊する年の前年八月から十二月までの期間内に行はれるが、募集の時期や志願書の提出期日、検査の日割等は毎年各府縣毎に一般に告示されるのであつて、この時のポスターなどには、『海軍志願兵徵募』と書いてある。これは甲種飛行豫科練習生のやうに、それだけを募集するのではなく、他の海軍志願兵、例へば機關兵、整備兵や少年電信兵、水兵などとともに、海軍志願兵として募集されるのであるから、間違はないやうにしてほしい。

志願手續は、甲種飛行豫科練習生と同じで、まづ親権者(戸主)の同意をうけたなら、つぎに示すやうな書式(太字は書き方の例)の志願書を作つて、期日におくれぬやうに市(區)町村役場に持参すればよいのである。わからぬことがあれば、甲種豫科練の場合に書いておいたやうに、市(區)町村役場や、海軍關係官廳に問合はせれば何でも教へてくれる。(志願書用紙は市(區)役所、町村役場に備へてあるが、ない時は手もとにある半紙や野紙などに書けばよい)

海軍志願兵志願書

本籍地 大分縣宇佐郡南院内村二十八番地

現居住地 福岡縣小倉市板櫃臺町四百十六番地 (何某方)

戸主トノ續柄

戸主 千代松 次男

山田次郎

昭和三年十一月二十一日生

一希望兵種 第一希望 少年飛行兵
第二希望 整備兵
第三希望 少年電信兵

一修學程度 大分縣宇佐郡南院内國民學校高等科修了
青年學校本科第三學年在學中

一現職業 工員(旋盤工)

一現居住地ニ移轉年月 昭和 年 月(志願書提出前六月以内ニ移轉シタル者ノミ記入ノコト)

右海軍志願兵ヲ志願致度此段出願候也

昭和十九年八月一日

本人 山田次郎

現住地 福岡縣小倉市板櫃臺町四百十六番地

親權者 山田千代松

又ハ後見人

福岡縣知事殿

希望兵種が第三までであるのは、第一希望は乙種飛行豫科練習生であるが、それにとほらない時は、整備兵なり、少年電信兵なり、あくまで海軍軍人を熱望する者のために第三希望まで用意されてあるのである。

時によつては、この志願書を府縣廳や知事宛に郵送する人があるといふが、志願書は必ず現在居住地の市(區)町村役場に持つて行かなければならないのである。

誰でもなれる少年飛行兵

佐々木少年は志願の手續をすつかり完了して、さうして私のところへ報告にきた。

『小父さん、志願の手續はすつかり終りました』

『さう、それはよかつたね。あとは検査の日にそなへて、からだに氣をつけて、勉強にはげんでおくのだね』

私は佐々木少年を激勵してやつた。

『とにかく、佐々木君しつかりやつてくれよ。この間も僕をたづねてきて、海軍少年飛行』

兵を志願したいのですが、試験にうかるだらうか、どうだらうかなどと、心配してゐた少年があるが、その少年に僕は大きいいつてやつたよ。少年飛行兵には誰でもなれるのだ、といふことをだね——』

『それはさうですね、小父さん』

佐々木少年は私の言葉を引取つて、

『僕だつて、中學校の時は優等生でもなかつたし、それに、からだだつて標準よりか、いくらかよいといふくらゐですが、試験には落ちないつもりで、頑張つてをるのですからね』

『そのとほりさ。僕も君のことをその少年に話してやつたよ。元氣な日本男子なら、誰でも少年飛行兵になれるのだ。からだも立派で、精神も立派ならば、誰でも入隊することができるのだと、話してやつた。その少年は、海軍少年飛行兵になるには、飛切りよいからだ、飛切りよい頭と、飛切りよい精神を持つてゐなければ——要するに、完全無缺な人間でなければ入れないやうに思つてゐたらしいのだが、誰でも入隊できるのだといはれると、目を丸くして驚いてゐたよ。それは、完全無缺の人間の方が、缺點のある人間よりいいには違ひないが、入隊すればもうそんなことは問題でなくなるのだからね。あの輝かし

い海軍の傳統と、海鷲をそだてる立派な教官が、海軍航空隊には大勢ゐるのだから、それによつて根柢から少年たちがたたきなほされるのだといふことも話してやつたよ。さうしたら、まだ志願の締切日に間に合ふかとさきから、まだ間に合ふといふと、それでは早速志願するのだといつて、意氣揚々として歸つて行つた。案外、君の検査場と同じところになるかも知れないよ』

『さうですか、一人仲間がまた殖えて嬉しいですね』

佐々木少年は、自分のことのやうに喜んでさういつた。

それから一ヶ月ばかりたつて、甲種飛行豫科練習生の試験の幕は切つて落されたのだつた。

当日は、朝七時集合だといふので、佐々木少年は、バスが間に合はないといけないからといふので、私の自轉車を貸してくださいと、いつてきた。私は心よく、お役に立てばと貸してやつた。

もつとも前の日には、何分位かかるか、時間をはかつておくなどと、用意周到なことを佐々木少年はやつてゐたのである。

試験場は、杉並の日大二中で行はれた。あとで佐々木少年にきくと、当日は横須賀鎮守

府のN大佐、H軍醫少佐などがこられて、體格検査は慎重に行はれたといふことである。

まづ講堂に全員を集めた後、N大佐は、いかに現在の大東亞戦争が苛烈になつてゐるかを話され、この決戦段階にある帝國海軍の責務はいよいよ重大で、特に海軍航空部隊の活躍は、今後の決戦を行ふべき動力になるであらうといふこと。またいかに海軍少年飛行兵が大東亞戦劈頭、ハワイの空襲やマライ沖海戦、その他の海戦、航空戦に赫々たる戦果をあげてゐるかを語つて、全員の覺悟をさらに新たにされたあとで、海軍では、規則によつて、たとへ今まで學校で六年間、八年間無缺勤の者であつても、ここ數日の間に、もし風邪をひいてゐたり、扁桃腺が腫れてゐたりしてゐる場合には、今日を基準とした検査であるから、やはり扁桃腺がわるい者であるといふことを記載して報告しなければならぬのである。——と、こまごまとしたことまで話されたといふことである。

さうして、身體検査は、身長、體重、胸圍、肺活量から始つて、内臓の検査、近眼の検査、握力の検査をはじめ、耳鼻咽喉の検査、また準備運動など、その他細部にわたつて検査を受けたのであつた。幸ひ、佐々木少年は體格検査に合格して、身體検査合格者として學力試験に出頭するやうにいはれたのであつた。

N大佐は最後に、からだに注意して風邪などをひかないやうに、しつかり勉強しておくやうにと身體検査合格者を勵まされたさうである。

豫科練の進級の話

學力試験は數學、國語(漢文を除く)、物象の三科目について行はれる。答案は鉛筆で書いてもよしつかへないことになつてゐる。

携帯するものは、國民學校初等科六年以上の通信簿、青年學校手帳、國民體力手帳、中等學校學籍簿、或ひはこれに準ずるもの、その他學業に關する證書なども持ち、この外に鉛筆、ナイフ、消しゴム、辨當、風呂敷などはいふまでもなく持つて行かねばならない。學科の程度はこの本の終りに試験問題をつけておいたから、どんな程度であり、どんな問題がでたかといふやうなことは、それによつて勉強してもらひたい。

佐々木少年は、この第一次試験、すなはち身體検査と學力試験、口頭試問などにも、みごとにとほつて、第二次検査を待つたのである。

この第二次検査といふのは、第一次検査において身體検査や學力試験に合格した者の中から選抜して、さだめられた海軍航空隊等を集めて、さらに身體検査や適性検査を行ふことで、この受検者については、鎮守府から府縣廳を経てそれぞれ本人に通知がある。さう

してこの検査の結果によつて、鎮守府で採用者を決定するのである。だから第一次検査に合格したからといつて氣をゆるめてはならない。私は佐々木少年にいつたのである。

『まだ第二次検査があるのだからね。佐々木君、もう大丈夫だなどといふやうな氣持を起してはだめだよ』

佐々木少年は、素直な目つきで、『ええ。一層頑張りますよ』といつてゐるやうに、うなづいてみせた。

後に、三重海軍航空隊を見學に行つた時、某教官は、學科試験について、

『特に中學時代に理化學、數學といふ方面に、相當突つこんで、興味を持つて勉強してゐる者は、航空隊に入つて成績がよい』

といふことをいつてゐた。要するに他の學科もよいに越したことはないが、理數科方面の成績のよい者が教官の方からいふと、教へやすく伸びやすいといふことになるのであらう。

また、身體検査の方で、今までは視力は一・二までなければ、合格させなかつたのに、一・〇に低下させたのであるが、これは、海軍の教育によつて、もう少しみえるやうにすれば、使へるやうになるといふので一・〇までに下げたのである。實際の戦闘力からいふ

と、飛行機の搭乗員としては、一・〇では不足なのである。ある飛行機の種類によると、眼が特に必要なものがあつて、これは、一・〇の者では乗せられないのであるから、従つて、それ以下の者は飛行機には不適當だといふことになるのである。

眼以外のことについては、身體検査の規格に示してある通り、年齢によつてわけてある。十四歳の者の身長、體重、十五歳の者の身長、體重、十六歳はこれといふやうに、各年齢ごとに標準をきめてある。従つて、十六歳の者より十五歳の者は規格は低い、これは將來伸びる可能性があるといふので下げてあるのださうである。

なほ、第一次検査、第二次検査における旅費はいづれも現住地の市(區)町村で徴兵旅費を支給することになつてゐる。

第一次、第二次検査を通つて採用ときますと、いよいよ全國民の期待を双肩になつて甲種飛行豫科練習生として海軍練習航空隊に入隊するのである。航空隊の教育は前期、後期を通じて二ヶ年半、もつとも今は戦時とあつてこの年限は相當短縮されてゐるが、前期の約一年半は將來航空機搭乗員として、皇國海軍軍人として立派に任務を盡し得る基礎を作るための身體、精神の鍛鍊と、一般軍事學の修得にあてられ、後期の約一年間に操縦術や偵察術の技能をみがくとともに航空術に關する高等の學術を授けられるのである。この後

期の教程に入ると練習生一人々々の適性に應じて操縦と偵察に分けられ、操縦に適した者には主として飛行機の操縦についての學術技能を、偵察に適した者には偵察のほか爆撃や雷撃、通信に關する學術技能を専修せしめられるのである。

甲種豫科練の教育は以上述べたところで大體おわかりになつたことと思ふが、ただ一部の者は搭乗員としての教育を受ける前に先づ海軍練習航空隊または海軍通信學校でそれぞれ整備、通信、電測の技術を修め、それから航空母艦や航空部隊に配屬して短期間の實習を経た後搭乗員になることになつてゐるが、進級その他は初めから搭乗員として教育された者と同じである。

さてその進級であるが、甲種豫科練習生は入隊すると二等飛行兵を命ぜられ、六ヶ月過ぎると早くも飛行兵長となり、後期の教程に進んで一かど海軍飛行兵としての貫祿を積んでゐるうちに二等飛行兵曹に任ぜられ、この教程を卒へると今度は艦隊所屬の艦船や海軍航空部隊に屬して實地勤務に服した後累進して上等飛行兵曹に進級する。それから後は約一年間練習航空隊選修學生として航空術に關する一層高等の學術技能を修め、これを卒へると間もなく飛行兵曹長となつて入隊後わづか三年半であつたがれの短劍を腰にさげるやうになるのである。更に進んで二十二三歳にして少尉に任官し、それから後は兵學校出身者

と同様の進路が開かれ、海軍大學校の甲種學生や特修學生に採用されることもできれば、努力次第で將官にも榮進することができるのであるから豫科練の將來たりやまことに洋々たるものといはなければならぬ。

次に、乙種飛行豫科練習生は、海軍志願兵徵募検査に合格して、適任證書を得、第二次検査に召集されて、これを終ると、みな歸郷を命ぜられた後、鎮守府ではいよいよ採用者を選定する。この選に入つた者が、採用證書を下附されるのである。これが終れば、もう入隊にそなへるばかりである。

この乙種飛行豫科練習生の期間は約二ヶ年半で、この期間の教育を終ると、他の航空隊に移つて、約一ヶ年、操縦、偵察の技を修めるのである。

さうして特修科飛行術練習生となつて、五ヶ月から九ヶ月、飛行術のみがきをかけて、最後の選修學生に進んで行く。さうして、入隊後約五ヶ年あまりにして、准士官の飛行兵曹長になることができる。その後は、甲種同様、まことに驚くべき昇進がみられるのである。

まづ、もつとも若い、十四歳で入隊した者について考へてみると、二十歳で早くも准士官といふことになる。

心も樂し晴れて入隊

佐々木少年は、みごとに第二次検査もとほることができ、晴れて三重海軍航空隊に入隊することができた。

彼の喜びは天を突くばかり。彼の父母も、どんなに喜んだことであらう。

佐々木少年は、三月の三十日に東京を立つて行つた。そして四月一日の入隊式を迎へて帝國海軍軍人としての記念すべき第一歩を踏み出したのであつた。

あとで、三重海軍航空隊に佐々木少年を訪ねた時、佐々木少年は、四月一日の入隊式に話された、司令の言葉はしみじみと身にしみたといつて、私に話すのであつた。その司令の言葉をかいつまんで書いてみると――

『お前たちは、大空への希望を持つて、この航空隊に入隊してきた。それはとりも直さず、お前たちは一身を大君に捧げ、もつて君恩に報ぜんとする決意をもつてやつてきたことにほかならないと思ふ。』

我々が、廣大無邊な君恩をうけて、この日本に生まれてきて、なすことはなんであるかといふに、それはいふまでもなく、一死奉公、至誠もつて大君の御ためにつくすこと、こ

れだけであると思ふのである。今日よりは、お前たちは醜の御楯となるべく出發したのである。大君の御ために、一切をかへりみない生活に入つたのである。

人間は馴れると、ゆるんでくる短所を誰しも持つてをる。しかし、今日からはそれを十分警戒し、ゆるむことが絶対あつてはならない。なんとすれば、今日からは、自分の身であつて、自分の身ではないからである。大君に捧げ奉つたものである。この信念を持つてゐたならば、ゆるむといふことは絶対にできないわけである。

捧げ奉つたものは自分のものではない。自分のものでない故に、自分をいためてはならない。自分を卑劣にしてはならない。要するに、自分の感情の奴隷になつてはならないのである。司令は入隊始めに、そのことをはつきりとお前たちに教へておきたい。

「大君の邊にこそ死なめ、かへりみはせじ」

の大精神をつねに自分の信念として、一日一日をしつかりと歩んでほしい。言葉をかへていふならば、喜んで死ぬ、といふ言葉をお前たちにいひたいのだ。

この精神は航空隊の精神である。海軍の精神である。日本の精神である。この精神を二千六百年の長い間、我々はうけつぎ、また次の時代にうけつがす使命がある。それを今、お前たちがまづうけつぐやうになつたのである。立派にその務めを果して、次の時代にう

けつがすのがお前たちの役目なのである』

引きしぼつた弓のやうな心に、その一言一句は、苗を植ゑるやうに、佐々木少年の心に、いや、その日三重海軍航空隊に集つた豫科練習生となるべき少年たち全員の心に植ゑつけられて行つたに違ひない。さうしてそれは、大空へ飛び立つ日の希望と、さらに、さうするためには、今日から豫科練習生としての日課を、立派に修練して行かうといふ決意になつて行つたことであらう。

見違へたぞ雛鷺二人

海軍少年飛行兵といへば、誰も土浦をすぐ思ひますが、そのためか、三重海軍航空隊の名は、何か新鮮な響きを持つてゐる。その三重海軍航空隊をけふはたづねるのである。

名古屋驛で關西急行にのりかへて、香良洲といふ驛で降りると、そこから広い自動車道路が乾ききつて、白くなつた肌をあらはして、つづいてゐた。その上に眞夏のざらざらする午後の陽が、焼けつくやうに照りつけてゐた。

三重海軍航空隊は、開隊して〇年しかたないので、すべてが新しかつた。その土地にしても、建物と建物の間にしても、土浦よりは、はるかに広いやうに思へた。

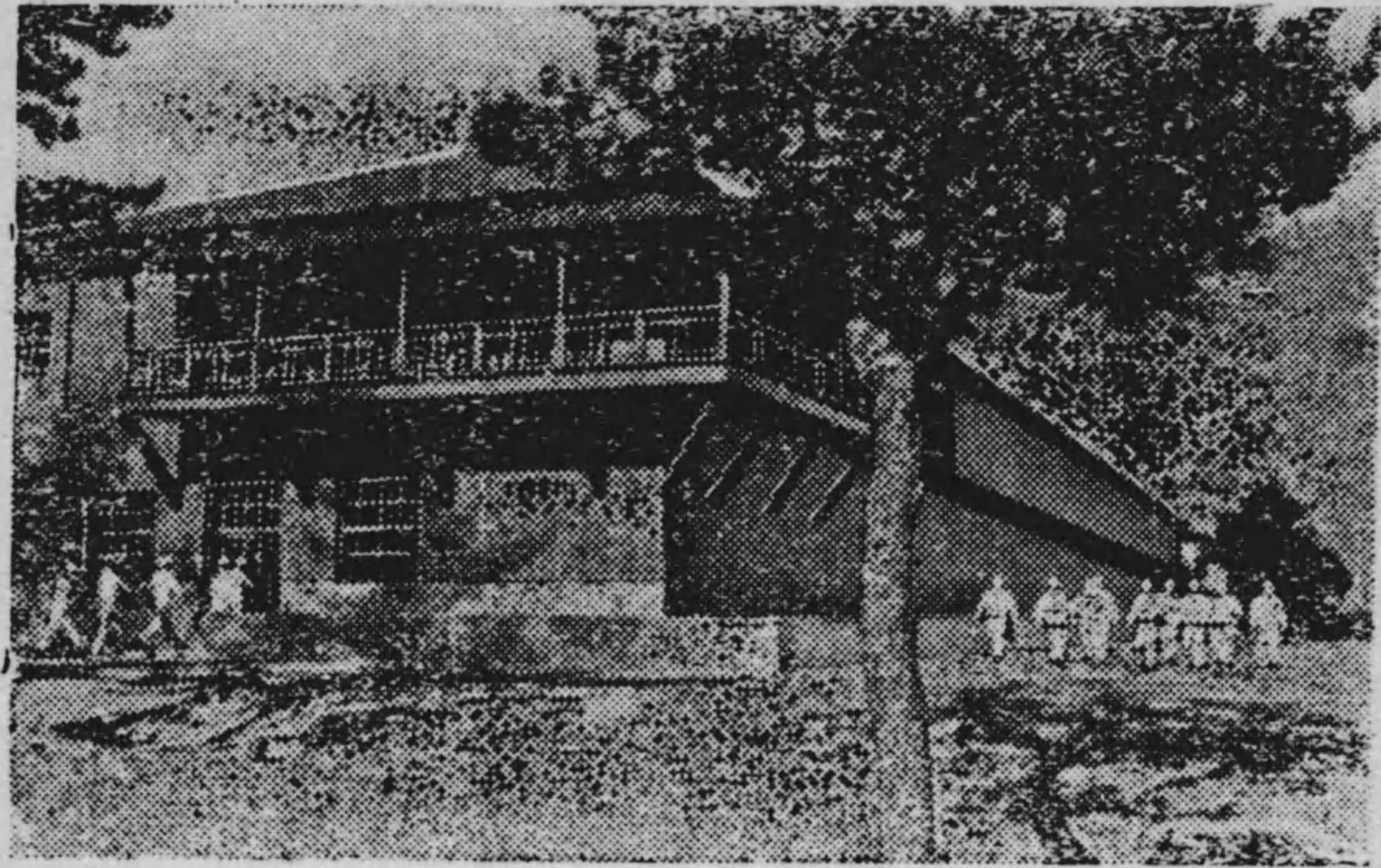
銀杏の樹が營門から本部までの長い道の兩側に植わつてゐた。つきあたりは伊勢海で、松原からは青々とした海が一面につづいてみえた。

案内をして下さつた某大尉は、

『夏はこれでも感じませんが、冬は鈴鹿あろしが吹きつけて、それはひどく寒いところですよ。しかし、その寒さも、豫科練習生などはちつとも感じてゐないのですからね。たいした元氣ですよ。——えつ、この土地や、建物が廣すぎないかといふんですか。とんでもない。これでも、まだせまい位ですよ。もつと大きくして、もつと建物をふやして、大勢の豫科練習生を收容しても、なほあまりある位にしたいと思つとるんですよ』
といつてをられた。たしか土浦の柔剣道の道場は、それぞれ千疊敷だと覺えてゐたが、ここでは千三百疊敷だといはれて、驚かされたのである。

着いたその日は、柔剣道や水泳などを見學して、夕方の、食事後の時間を心待ちに待つたのである。

やがて、待つてゐた食事後の時間がきた。私はその前から、雄飛館といふ、二階が座敷になつて、そこで夕食後の一と時や休日の一日をゆつくりと遊べるところの下にある酒保の一隅で、やがて私をたづねてくるであらう二人の人を待つてゐた。



豫科練生たちのいこひの家雄飛館—酒保に圖書室に集ひ
の座敷に静かな伊勢海を望んでくつろぐ時の楽しさ……

夕食時で、私が行つた時は、まだ誰も少年兵の姿はみえなかつた。ただこれから賣りださうとする汁粉やうどんを用意してゐる人たちがゐるだけであつたが、やがて、夕食後の時間となると、その酒保一杯に、あふれるばかりの少年兵がやつてきた。汁粉をすすめる者、パンをたべる者、うどんをたべる者など、そここに楽しい少年たちの間食が始つたのを、私は目を丸くしてみてゐた。

『小父さん！』

耳元で大きな聲で呼ばれたので、私は、はつとしてその方をふり向いた。四ヶ月ぶりにみる佐々木少年——豫科練習生姿である。あまりにもたくましくなつてゐるその

姿に、私はしみじみとした氣持で顔を見た。

『小父さん、よくきてくれましたね』

持前の元氣な顔を、心持紅潮させて、佐々木豫科練習生はさういつた。

私はうなづいて立ちあがると、そのたくましくなつた肩に手を置いて、『たくましくなつたね』とか、『ふとつたね』といふべきところを、無言で眺める。その眼が一層言葉を物語るのであらう、佐々木豫科練習生は、さらに胸をぐつと張つて、『こんな立派になりましたよ』と、いはんばかりに私にみせるのであつた。

動作にしても、入隊して、まだわづか四ヶ月あまりであるのに、もう、まつたく軍人になり切つてゐるのである。さらにその態度の嚴肅なことには驚かされた。短期間にこれだけの訓練をほどこす教官も、きたへられる少年たちも、どれほど苦心と努力をはらふことかと、私はほんたうに頭のさがる思ひがした。

さもあらう、教官はすべて、西南、中央太平洋の各基地で自ら空中戦闘に加はつた勇士であり、教はる少年たちは、やがて近き日に、敵高射砲の彈幕の中に突入しようといふ者であるのだから、教へる者、教はる者の氣魄は、言葉ではいひ現せない激しいものであらう。——私は、これがかつての日の佐々木少年であるのかと、ほんたうに疑りたくなるの

であつた。

それからしばらくの間話をしてゐたが、なにからなにまで驚かされることばかりであつた。

少しばかりであつたが、配給の菓子をポケットにしよばせてゐたのをだすと、佐々木豫科練習生は、にっこりと笑つて、

『小父さん、折角ですが、自分はやがて航空隊の中堅となる者です。お志は有難いですが、航空隊の食物だけで十分ですから、小父さんあがつて下さい』

さういつて、とうとう終りまで手をつけようとしなかつた。東京から折角持つてきた菓子ではあるが、それをたべてくれるよりも、さういつて、たべないでくれた佐々木豫科練習生の氣持を、しみじみと嬉しく思つた。

話してゐるうちに、私のもう一人の待ち人である豫備學生の木田といふ青年がやつてきた。木田青年は私の友人の弟で、やはりこの三重海軍航空隊に入隊したのであつた。

海軍豫備學生のことについては、まだ私は書かなかつたが、これは、大學令による大學の學部卒業生及び大學令による大學の豫科、高等學校高等科、專門學校、またはこれと同等以上の學校を卒業した者で、採用の日に年齢二十八歳未満の者を志願資格とされてゐる

のである。

募集の時期は官報で示されるが、採用の上は、各科少尉候補生に準じて待遇されるのである。さうして海軍練習航空隊で約一ケ年半の軍事教育をうけると、輝かしい海軍少尉に任ぜられる。

あの昭和十六年十二月十日のマライ沖海戦で、敵の不沈艦と誇つたプリンス・オブ・ウエールズとレパルスにたいして、敢然と撃滅の緒を作つたものの中には、任官したばかりの豫備學生出身の少尉がゐたことは、諸君もご存じのことであらうが、それはいはゆる學生出身の士官が、烈々たる氣魄を發した一例にほかならないのである。

木田青年も、その海軍航空部隊に馳せ參じた、やはり大學、專門學校卒業生の一人であつた。

私たち三人は、夜の課業が始るまで話し合つた。木田豫備學生と佐々木豫科練習生は、はじめて知り合ひになつたのであるが、三人は十年の知己でもあるかのやうに、心から話し合つたのである。

佐々木豫科練習生は相かはらず、『小父さん』と、私への愛稱をもつて呼ぶと、

『この間こんな話を聞いて、泣いてしまひましたよ』

さういつて語りだした。――

彼と同じ分隊にゐる豫科練習生の一人であるが、いよいよ入隊する時のことだつたさうである。家をでる時に、その豫科練のお父さんは、

『からだに氣をつけて、しつかりやれよ。この村からはじめてお前が海軍少年飛行兵となつて、お國のためにつくす時がきたのだ。不名譽のことをしたら承知しないぞ』

といふやうな訓戒をしたさうだが、母親は、父親の蔭にかくれて、だまつて下を向いてゐた。

母親は、泣いてゐるのではないだらうかと、その豫科練習生は、母親の手を取つて、『お母さん、行つてきます』といつたさうである。その少年は一人息子であつた。お父さんも、お母さんも心よく許してくれたのであつたが、さすがに、いざ出發といふ折には、父親は毅然としてゐたが、母親は、かすかに涙をうかべてゐたといふことである。今日からは我が子にして我が子でない。お國のために一人息子を捧げるのだと、自分にいひきかせるのであるが、母親の愛情は、涙をさそふのであらう。我が子の大きいなる日の感動によつて、大君に捧げ奉ることができる嬉しさによつて、嬉し涙を流してゐるのであらう。悲しくて泣いてゐる、女々しさとは違ふのだといふことを、少年はその身にひしひしと感じ

て、自分も涙がこぼれるやうな張りつめた氣持に追ひやられたといふことであつた。

『これは鎮守様のお守りだから、しつかりと肌身につけて、病氣をしないやうにね』
といふ母親の顔をみながら、

『うん、やるともね』

と、元氣に手をにぎりかへした。――といふのである。

『自分はこの話をきいて、――小父さんも覺えてゐるでせう。自分の父親から許しの手紙がきて、みせに行きましたね。あのやうに、その少年の父母も心よく許してくれたに違ひないと思ふと、自分の父母も、その豫科練のお父さんやお母さんのやうに思へて、嬉しくてたまらなかつたですよ。それから、その少年と自分は特別に仲がよくなつてゐるのです』

かう語る佐々木豫科練習生の言葉を引きとつて、木田豫備學生も口をきつた。

『私の方の豫備學生の中にも、ういふのがをりますよ。五人の男兄弟ばかりを子供に持つた母親が、四人も兵隊に捧げて、私の隊にをる者は四番目ださうです。すでに、次男は支那事變で戦死をし、金鷄勳章をいただいたといふことですし、長男は今、南の第一線で戦つてをるといふことです。すぐ上の兄は現役で、北支に行つてをるさうですが、そ

の四人目の子供が豫備學生を志願したいと、母親に願ふと、父親は早く亡くなつてゐたさうですが、母親は心よく許してくれたといふことです。いよいよ出發といふ時、プラットホームまで送つてくれた母親は、汽車が動きだすと、静かに手をあげて、「からだにお氣をつけ」と、ぼつりとさういつただけだといふことですが、その時みた母親の顔があまりの神々しさに、思はず「お母さん」と、走りだした汽車の中から叫んだといふことです』

私はこの二人と話してゐるうちに、次第に目頭の熱くなるのを感じたのだつた。國を思ひ、大空をみつめる、その母親が、最愛なるものを國に捧げる、そのひたむきな心に胸打たれぬものはないであらう。

あとで、やはり三重海軍航空隊の教官である某少佐から、

『お母さんのしつかりした子は、やはりしつかりしてをりますよ。お母さんが、天子様のために、國のために、しつかりやりなさい。私たちのことは考へないでやつてくださいね、といふお母さんの子供は、やはり立派ですね』

と聽かされた言葉を思ひ出す。

さうであらう。このやうな母親にそだてられた少年飛行兵や豫備學生の人たちが、たくましく成長した曉こそ、あの空の御楯となつて、敢然と敵艦にみづから我が機を突つこんで、自爆して行く、不撓不屈の精神を持つ飛行兵になることはいふまでもないことであらう。某少佐の言葉と思ひ合はせて、戦ふ日本の母親の重い責任と、大きな力をしみじみと思はずにはゐられないのである。

『小父さん、自分なんか、下宿してゐた時でも、自分の物は自分で洗濯してゐたからよかつたですが、中には、洗濯をした経験など、てんで持つてゐないやうな者も入つてきてゐるのですよ』

佐々木豫科練習生は、さう笑ひ顔で話します。

『朝は五時十五分の起床から、夜は二十一時半の消燈まで、十六時間がきつちりつまつてゐて、自分の勝手な時間といふものはないのです。だから、少しの時間でもあると、汗と埃にまみれた襦袢や禪から敷布や上着、袴にいたるまで、全部洗濯するのです。しかしこれが少しも苦痛にならないのです。みんな嬉しさうに、或ひは話しながら、或ひは無言で、ごしごし洗ふのです。中には自分のを洗つてしまつて、人のを手傳つてゐる者もあるのですよ。従業服は水も透らないやうな、丈夫な木綿の生地でせう。だからこれを洗ふ時などは、とても力があるのです。ご覽になつたでせうが、あの洗濯場の大きなコンクリートの上で、いろいろな洗濯物をやるのですが、洗濯する時はほんたうに楽しいものです』

よ』

『楽しいとさへば…』
と、こんどは木田豫備學生が言葉を引きとつた。

『兵舎の前の、窓の下に花壇がそれぞれあつたでせう』

『さうさう、綺麗な花壇が方々にあつたね』

『豫科練の人たちもよくやつてをりますが、私たち豫備學生も盛んにやつてをりますよ。長方形に區切つたその



やさしい心づかひの花壇『ほら花が咲いたよ』
と、豫科練生は互ひに顔をほころばしてゐる

花壇に、四季とりどりの花を咲かせるのです。そして、その花の横の方に、花の名前が書いてあります。これでほのかに故郷の草や花をしのぶのですね』

『實に餘裕綽々たる姿だね。——ほんたうに、僕もけふ一日見學させてもらつて、しみじみ感じさせられたことは、航空隊内が、どこことなく、ゆとりがあるといふことだね。それは、もちろん嚴肅な規律の中に生活してゐる君たちに、だらだらとした、餘裕があるといふわけではないのだが、どこことなく莞爾とした、餘裕があることは、我々が學ぶべきところぢやないだらうか。豫備學生や豫科練習生である君たち二人についても、どこことなく、そのやうなことが感じられるのだ。要するに、たゆまない訓練を経てきた者が持つ、あの底力のある者の持つ餘裕といふのだらうね。この餘裕のある姿なんかを、一般社會の人にみせてやりたいやうな氣持が、僕は起きてしやうがないよ……』

やがて、話してゐるうちに、夜の課業の時間がせまつてきた。二人は立ちあがつて、同じやうな意味のことを口々にいふのだつた。

私が東京に歸つたならば、『佐々木豫科練習生の友だちや木田豫備學生の友人に傳へてくれ』といふのであるが、それは大體つぎのやうなことである。——

『自分たちは、この航空隊で一生懸命にはげみ、やがて、前線に行く日を待つてゐる。

さうして醜の御楯となつて、喜んで散つて行くが、さらに、私たちのあとを繼ぐ者をどんどん寄越してもらひたいものだ。

我々は喜んで死んで行く。しかし、我々の後輩たちが、自分たちの屍をのり越えて、米英撃滅を目指し、勝利の旗をかかげてもらはなければならぬ。自分らの生きてゐるうちに大東亞戦争が終るとは思はない。しかし、自分らのあとにつづく者が、自分たちが望んでゐる輝かしい勝利を實現してくれることを願ふのである。我々よりか、さらに多い後輩をできるだけ一人でも多く送つてもらひたい』

二人は互ひにうなづき合ひながら、かういふ意味のことをいひ終ると、私に舉手の禮をして、雄飛館からでて行つた。私は出口まで行つて二人を見送つた。二人の着てゐる白い従業服の背に夕陽がさらさら反射して、眼に痛くしみるほどであつた。

航空隊の本部の前の廣場には、軍艦旗が高く翻つてゐて、ここまでさわやかな音をたててゐるのが聞えた。私は、二人がそれぞれの兵舎へ行く曲り角をまがつて、みえなくなるまで、いつまでもみつめてゐた。

健康についての親心

その翌日、教官が大勢集つてゐる部屋で、この木田豫備學生や佐々木豫科練習生が、あまりにもたくましくなつたことを、しみじみとした氣持で話すと、一人の教官が、

『ほんたうにかはるでせう。入隊して半年もたつと、みな生々として、第一、眼のうごきが違つてきますからね。當隊にゐるものは豫備學生も豫科練もほんたうに皆、當隊に入つてゐることを誇りに思つてゐるのですよ』

といへば、他の教官は、

『一日の日課はきつちりとつまつてゐるのです。いろいろの日課と、はげしい訓練がつづけられますが、それをあぎなふだけの榮養と、十分な睡眠が彼らを立派にかへて行くのです。ですから、入つてから四ヶ月目に身體全般の機能を検査してみると、驚くほどかはつてをりますよ』

また、他の教官は、

『科學的な施設を十分そろへてゐて、入隊してから一ヶ月間に、何十回といふ注射をやつとるんです。それから、一ヶ月毎に嚴重な身體検査、同時に體力検査もやつとるんです。また内臓をよく調べ、レントゲンをかけて、くはしい検査もやつてゐますから、からだの悪い者がでて、わからずにすんでしまふといふことはなく、きはめて早期に発見さ

れるので、對策も早く講ぜられ、回復も早いわけです。毎日診察時間があつて、少しでもからだの調子が悪いと思ふ者は、すぐに診察をうけさせる。それから練習生を五部にわけ、各部に軍醫がつて、健康指導にあたつてをるなど、いろいろな心をくだいてをるので

兵舎の出入口に備へてある消毒液の話にしても、入浴時や外出時の話にしても、聞けば聞くほど健康にたいする航空隊の行届いた注意に感心させられるのである。

一人の教官は、

『要するに、當航空隊の訓練は非常にはげしいものであり、それに力を注いでをります。が、それと表裏一體といひますか、その半面には非常に保護してをるので。鍛へれば鍛へるほど、ますますこまかい眼で、からだや



『立派な飛行兵になるには立派な身體を……』と、豫科練の健康には細心の注意が拂はれる

顔をみて行くのです。

つまり、今までのほんたうのお父さんやお母さんの膝下から離れて、この航空隊に入つた少年たちに、分隊長といふお父さん、分隊長といふお母さん、それに班長といふお兄さんを、それぞれつけてほんたうの親にもまさる親心を示すところに、この教育は徹底して行くのでせうな』



明日に備へる日曜日の休養—『ハイおやつ』と、倶楽部のまばさんから温い心のこもつたお伊モの配給

『思考力といふ點なんかも非常に進歩するのではないでせうか。入隊當時は、いはゆる中學生とか國民學校卒業生ですから、あらゆる方面に注意力が向くといふやうなことはあ

りませんが、入隊して一年もたつと、全然眼つきが違つてきますよ。これはさつきも誰かがいつてをりましたが、結局あらゆることに相當程度の見識を持つてくるからだと思ふのです。いはゆる判断力がついてくるのですね。さうして、この航空隊をでて行くころにはほんたうに、たのもしい海軍飛行兵になつて行くのです』

私は、教官がたのこも語るこれらの言葉をきいて、眞の親にもまさる親心のあることをつくづく感じたのであつた。それであるからこそ、あのやうに立派に成長して行くに違ひない。ほんたうに豫科練習生にしても豫備學生にしても仕合はせなことであると、何かうらやましいものをさへ感じさせられたのであつた。

手紙で知らせる三重空の日課

三日間、三重海軍航空隊をつぶさに見學した私は、三日目の夜、香良洲海岸の宿舍で、田舎にゐる親戚の子供あてに手紙を書いた。まだ中學二年と、國民學校の六年の兄弟の少年へである。

この二人の少年は、私が三重海軍航空隊にでかける前に一週間ほど遊びにきてゐたのであるが、二人とも豫科練志望で、私に何回も豫科練の話聞きせびり、航空隊に行つたな

ら、その模様を手紙で書いて送つてくれと、頼まれてゐたのである。それを夕食後、私は思ひだして、あまり明かるくない電燈の下で、せつせとペンを走らせたのである。

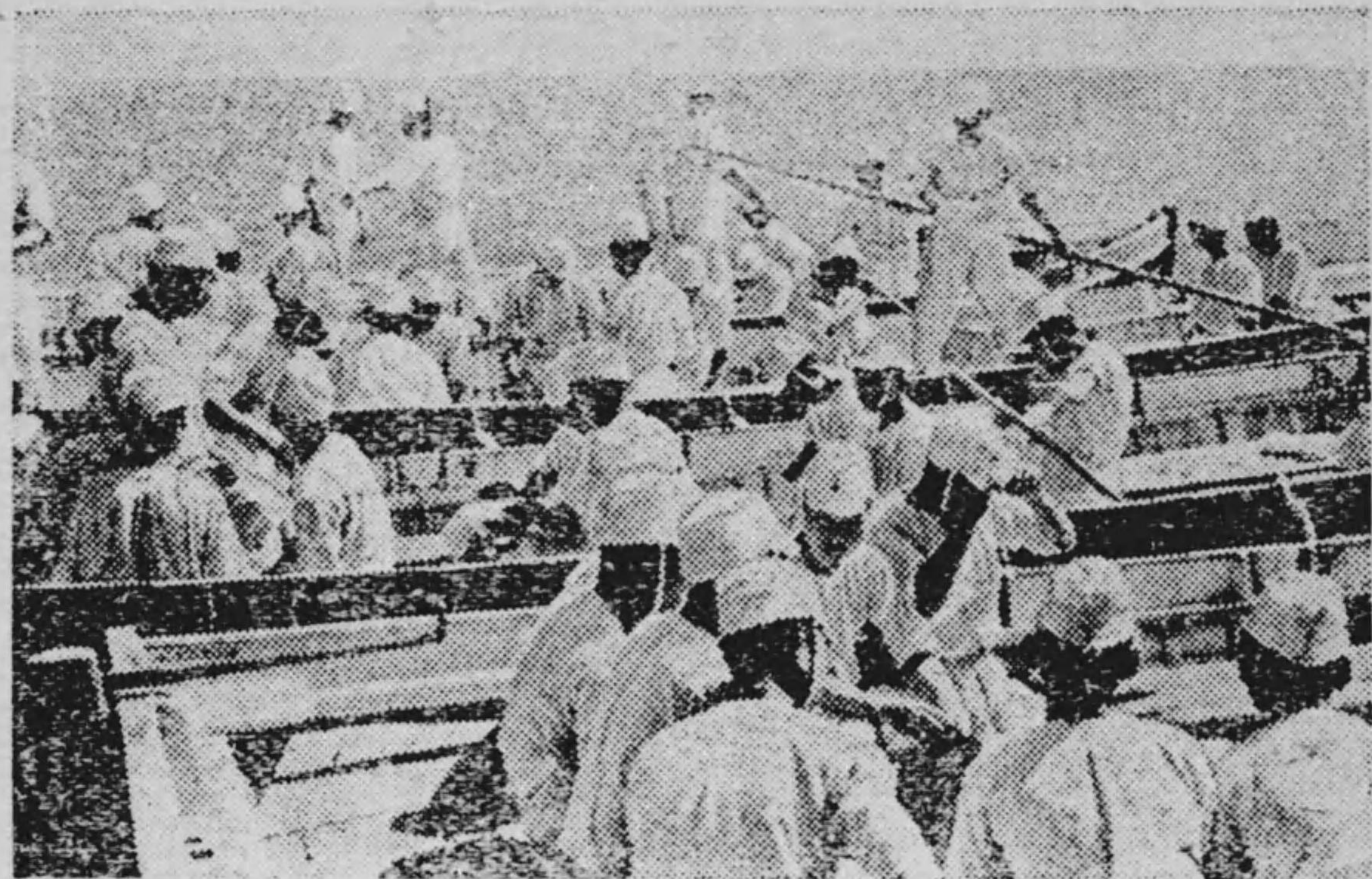
次郎君。

照正君。

この間は君たちと連日太平洋の大空をかけまはつて、赫々たる武勳をたててゐる、海軍少年飛行兵のお話をたくさんしましたね。その時、君たちと約束した、三重海軍航空隊の見學のお便りを今から書きはじめますよ。

あの時は、もし三重へ小父さんが見學に行くやうなことがあつたら、君たち二人に大きな豫科練習生について、いろいろのお話を知らしてあげようと約束しました。しかし、いざ三重にきてみると、豫科練習生の日常の訓練が、あまりに立派で、あまりにもたくましいので、小父さんは、ただただ驚嘆の眼をみはるばかりで、これを君たちに知らせるなどとは思ひもよらない感にうたれたのです。

これでは約束を果せないと、三日がかりでN大尉の案内で航空隊を見學させて頂いたことを、もう一度頭の中で整理して、やつと今、これを書きはじめたわけです。



カッターの訓練にこれから出発、ピツピツといふ笛の音にオールをそろへてやがて艇は伊勢海の波に乗つてすべり出す

が、まあその不便を取りのぞく位ゆつくり、丁寧にみて行つてくださるのですな』
N大尉は日焼けした顔をほころばせ、まつ白い歯をのぞかせてさういはれました。
小父さんは、以前、土浦海軍航空隊を見學させて頂いた時に、うすい「土浦海軍航空隊案内」といふ小冊子を、はじめに頂きました。たしか、その小冊子のはじめには、教育目的として、
『軍人タルノ徳性ヲ涵養シ、體力ヲ鍊成シ、學術ヲ修得シ、航空機搭乗員タルノ基礎ヲ確立ス、即チ當隊ハ航空機搭乗員タルベキ青少年ヲシテ先ヅ立派ナ海軍軍人タルベキ教育ヲ實施ス』

これを書いてゐるところは、三重海軍航空隊から歩いて約四十分位離れたところにある香良洲海岸といふところの旅館です。もうまつ暗になりかかつてゐるといふのに、空では爆音がまだ聞えてをります。

今度君たち二人が、この間のやうに小父さんの家に遊びにくることがあつたら、その時こそ、手紙に書きつくせない、見學してきた、ありつたけのことを話してあげませう。

大分前あきが長くなりました。そろそろ三重海軍航空隊の豫科練習生のことについてお話をしませう。しかし、その前に三重海軍航空隊がどこにあるかといふことから書いておきますよ。

東京からだ、東海道線で名古屋に行き、そこから關西急行鐵道で約一時間半、香良洲といふところで降りて、そこからバスで航空隊の途中のところまで行くのです。そのバスを降りて、二十分も歩くと、もう航空隊の門につきあたります。

航空隊本部の應接間で待つことしばらく、見學指導をやつて頂くN大尉が入つてこられました。

『土浦海軍航空隊のやうに、案内用の小冊子などが作つてあると便利なのですが、まだ當隊は開隊して〇年しかたちませんので、それができてなくて、御不便かも知れません

といふやうなことが書いてありました。

しかし、小父さんが一番よく覚えてゐる記事は、その小冊子の終りにあつた、「飛行兵の母より」と題した、豫科練習生を子に持つ母の文章が載つてゐるのを讀んだ時のことでした。小父さんは、それを讀んですつかり感激させられてしまつたのでしたが、今、三重海軍航空隊にきて、N大尉から土浦海軍航空隊の小冊子のことを話された瞬間それを思ひだしたのは無理からぬことでせう。

たしか、その手紙の文章はこんな風だつたと覚えてゐますよ。

飛行兵の母より

お寫真有難う。早速額縁に入れて、箆笥の上に飾りました。

私の生んだ子が、かうして軍人になれたので、母の務めが終つたやうに感じてゐます。この上は、どうぞ上官のご命令に従つてくれますやうに、この母を慕ふ代りに、上官をお慕ひ申しあげるやうにと念じてをります。

かうして軍服を身につけたからには、一切の私事を考へないで、ただ、一心にどうしたら一日も早く教練が身につくか。どうしたらお國のお役に立つ人間になれるかといふこと

だけを、心にかけてゐてくださいね。お母さんはそのために忘れられても、うとまれても喜んでをりますよ。

食事一つでも、自分の舌や身を満足させるためであつてはならないのです。航空隊に入つたその日からは、天子様の赤子として、立派なお役にたつ時のことばかりを考へて、お國に捧げる大事のからだを養ふために、一椀のお汁でも、一椀のご飯でも頂いてください。好き嫌ひなどはもつてのほかですよ。

お母さんは、軍人になつたお前に、もうなにも教へてあげることはありません。ただ、毎日毎日東郷神社にお詣りをして、どうぞお前がまつたく自分をすてて、軍の掟に従ふことができますやうに、お前がやらねばならぬ病氣がありましたら、この母に代らしてくださいと祈りつづけてゐるのです。

お前の立身出世を祈らない、樂であれとも祈らない。ただ、お前が……、お前がやがて靖國の御社で千萬の御英靈の御前に立つ日、とどこほりなくお務めを果して參りましたとばかるところなく報告がきますやうに、お母さんは名譽のその日までお前の影身にそつてをりますよ。しつかりやつて下さい。

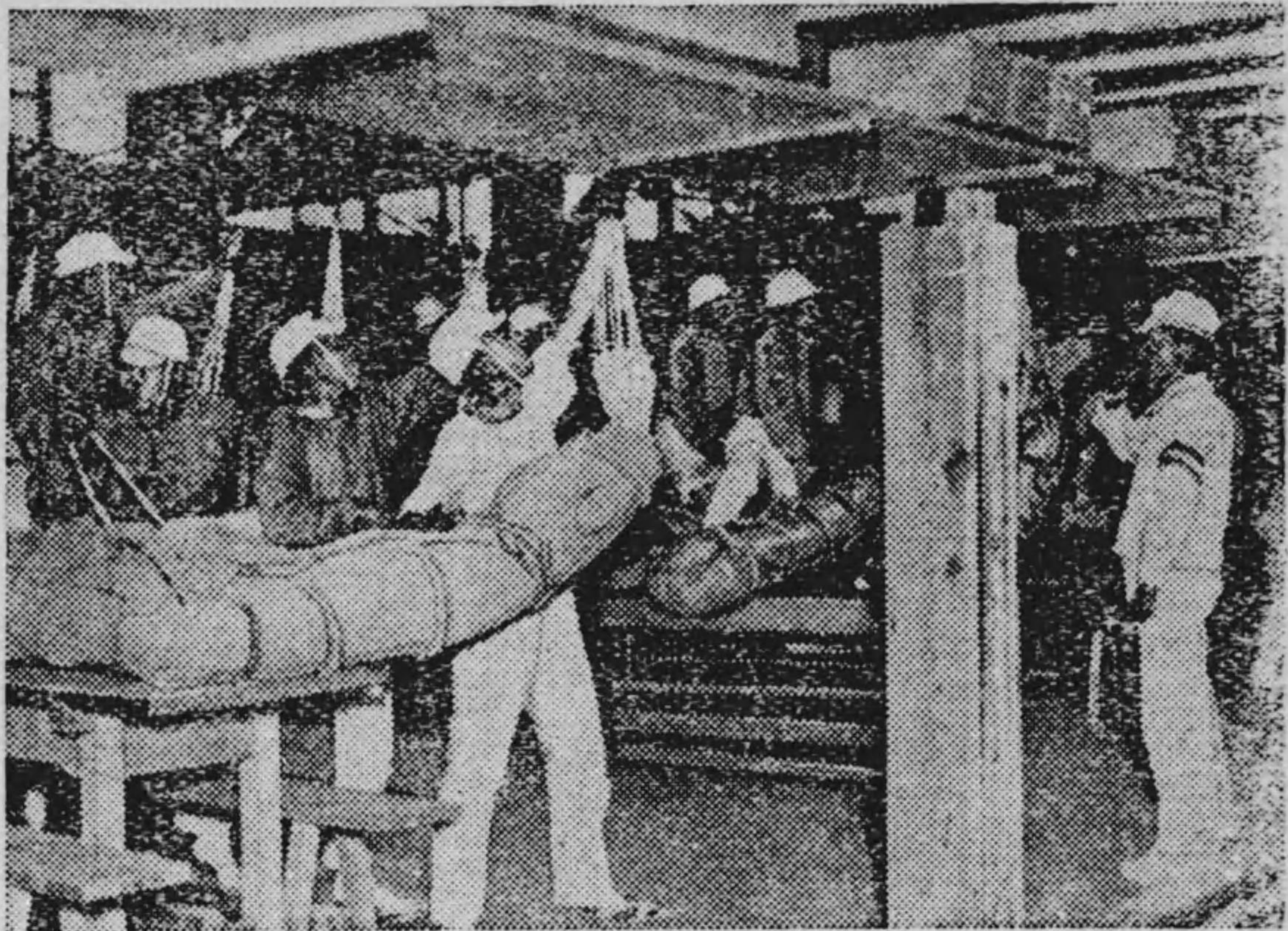
母より

そのやうなことが書いてあつたのです。小父さんもその時は、男泣きに泣いたものですよ。おそらく日本人なら、日本國民なら泣かない人はないでせう。このやうなお母さんがゐるから、日本の兵隊さんは強いのだな、といふことをその時つくづく感じたのでした。三重にきて、土浦の話など書いてしまひました。しかし、豫科練習生のお母さんに、このやうなお母さんがあるといふことを、君たち二人に知らせるのも、決して無駄ではないと思つて書いたのです。

お母さんで思ひだしましたが、見學してゐる時に、教室でなにげなく、豫科練習生の机の蓋をあけてみると、その机のはしの方に、お母さんらしい人の寫眞が貼つてあつたことがありましたよ。その時も、このお母さんもきつと土浦の小冊子にでてゐるやうなお母さんに違ひない。ほんたうに豫科練習生のお母さんたちは、陰になり、日向になりして、いつまでもじつとみつめてゐてくれるのだなと思つたことでした。

つぎに、豫科練習生の日課のことを書きませう。何時ごろ起きて、どんな學課や作業をするのか。次郎君も照正君も知りたいでせう。

見學に行つた翌朝は、旅館で三時半に起してもらひましたが、まだ月が皎々とでてゐる時間を、自分の影をふみながら、航空隊に向かつたのです。豫科練習生の五時十五分の總



【總員起し】—高聲令達器から號令がつかはると豫科練習生たちは一齊に飛び起きて釣床の始末にかかる

員起しをみせてもらふためです。

冬は六時に起きるさうですが、丁度伊勢海に朝日があがるのと一緒にとび起きるわけです。

まづ總員起し五分前にブザーが鳴つて、號令が高聲令達器からつたはります。海軍では、なにごとによらず、必ず五分前に、心の準備をととのへることになつてゐて、朝の起床から、このやうな號令がつかはるのです。これなどは君たち二人がよく覚えておいてもよいことでせうね。その時にのぞんで準備にかかるのは、いざ、といふ時に間に合はないので、なにごとも五分前が大切だと

いふことを、しつかり覚えておくことです。

さうすると、各兵舎の豫科練習生は、五分後の總員起しにそなへて、全員が、ぱつちりと目をあけて、待機の姿勢になります。と、五時十五分、ふたたびブザーが鳴りひびいて、高聲令達器から、總員起しのラッパが高らかに吹き鳴らされます。すると全員は、がばつとはね起きるのです。白い落下傘が一齊に開いたやうな感じですが、

とび降りるが早いか、吊床の始末です。これは、毛布を正しくしばつて、それを五ヶ所麻縄でむすぶのです。入隊したばかりの者は五六分もかかるさうですが、やがては、一分間位でできるやうになります。軍艦に、敵の砲弾の破裂してとぶ破片をふせぐために、艦橋の外側に白い袋があるのを、次郎君も、照正君も寫真などでみたことがあるでせう。つまりあれがこの吊床を利用したものなのです。そのしばつた吊床は、その兵舎の天井近くにできてゐる格納庫へかつぎこみますと、そこにゐる、總員起しより早く起きた當番が、それを順々にうけとつてきちんと立てならべます。

それから、洗面所へかけつけます。洗面所では、金だらひは使ひません。それは衛生と水の節約をするためなのです。ずらりとならんだ水道の蛇口から、できるだけ少い水を手をうけて、しかも早く洗面して、つぎの人と交代するのです。案内して下さつたN大尉

が、あとで水のことについてこのやうにいつてをられました。

『飛行兵でも水兵と同じやうに、水を大切にすることを覚えてをるんですよ。軍艦などでは、水の上にあつて、水に困りますからね。しかし、この航空隊では、必要な時の水はよく使ひ、不必要な水は、一滴も無駄にしてはいけない、といふことを常にいつてをります』

洗面がすむと、かけ足で練兵場へ集ります。豫科練習生は、どこへ行くにもかけ足です。君たち二人が歩いてゐると同じやうに、豫科練習生はかけることが普通なのです。練兵場につくと、各分隊ごとにきまつた位置にあらんで、朝禮になるまで、號令演習を行います。『氣をつけ』、『前へ進め』など、思ひ思ひの號令を、喉もさけよと叫んでゐる姿は、實に壯觀そのものです。

朝禮始めとなると、ぴたりと、全員が鳴りを静めます。當直將校が號令臺に立ちますと各分隊ごとに、異状なしの届けが行はれます。やがて、『帽とれ』と、嚴かに號令がかかる、つづいて皇居遙拜、つぎに聖訓五條。

一、軍人ハ忠節ヲ盡スヲ本分トスベシ

一、軍人ハ禮儀ヲ正クスベシ

- 一、軍人ハ武勇ヲ尙ブベシ
- 一、軍人ハ信義ヲ重ンズベシ
- 一、軍人ハ質素ヲ旨トスベシ

ついで、明治天皇の御製奉唱が行はれるのです。

朝みどりすみわたりたる大空の

ひろきをおのが心ともがな

地面一帯、朝霧で、しつとりとしめつた中で、白い服に身をかためた練習生が、静かにしかも朗々と御製を奉唱してゐる姿をみて、自然に頭のさがる莊嚴さにうたれたのでした。

そのつぎには、十分間海軍體操が行はれ、それから各兵舎に歸つて、こんどは掃除です。軍艦内と同じやうに、甲板掃除といふ名前での掃除を呼ぶのださうです。さうして兵舎も、講堂も、廊下も便所も、この名前にそむかず、鏡のやうに光るまでしつかりと行ひます。

午前八時の朝食のあとで、三十分ほど自習の時間がありますが、それから課業整列の號令で、ふたたび全員は練兵場に集合します。さあ豫科練習生の一日の戦ひが始るのです。

ひらひらとはためく軍艦旗を、練習生の目はみつめます。きつと結んだ唇は、『よし、やるぞ』と、さういつてゐるやうにみえます。これが、中學二年の次郎君、國民學校六年の照正君とほとんど同じか、或ひは少し兄さん位の人なのです。二人ともひとごとと思へないでせう。

この整列が終ると、耳に痛いほど響くラッパの音につれて、各分隊ごとにそれぞれの講堂とか教室に、歩調をとつて入つて行くのです。では、それからどんな學課をうけるのでせうか、それをつぎに説明させう。

まづ大きくわけて、一、訓育、二、學術、にわけますが、この訓育をさらにわけて、
(一) 精神教育 これは入隊後一ヶ月間は毎日、或ひは二日に一回の割で、一時間うけるさうですが、それから後は、毎週一時間づつあるといふことです。

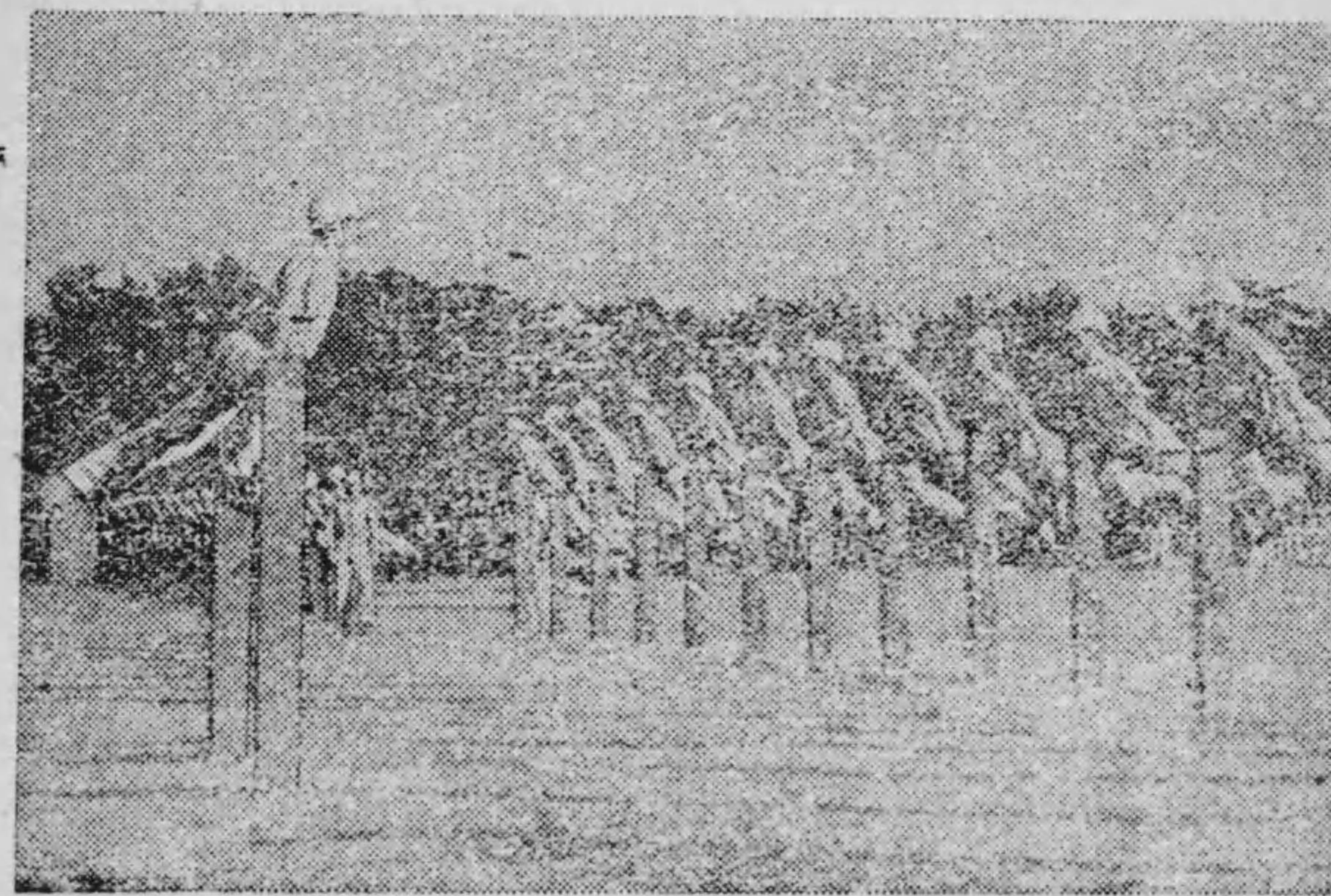
(二) 體育 大體毎日、午後行はれます。その他訓育にふくまれるものは、課目ではありませんが、日常勤務が重大な意義を持つことは、次郎君も照正君もよくわかつてもらへることと思ひます。

それから、二、學術を分けて、(一) 普通學 (甲種豫科練習生は英語がはぶかれ、乙種豫科練習生は英語をならひますが、大體中學校三年修了程度です) (二) 軍事學 (大體兵

学校の二年修了程度)にわけられるのです。

これをさらに説明しますと、精神訓話
は、帝國軍人の覺悟から、日常生活にたい
する行届いた注意、また、血で綴つた實戰
談、或ひは、教官の大半は、南の戦線から
歸られたかたばかりなので、その戦ひの有
様、また、先輩の武勳などをきかされて、
攻撃精神をいやが上にも燃え立たせるので
す。

つぎに體育ですが、これは、「一」體操、
〔二〕武技(銃劍術、劍道、柔道、游泳が
入ります)、〔三〕體育(これには相撲、闘
球、籠球、滞空が入ります)、この體育で
も常に精神訓話からうけると同じやうに、
體育から攻撃精神を學ばせるのです。倒れ

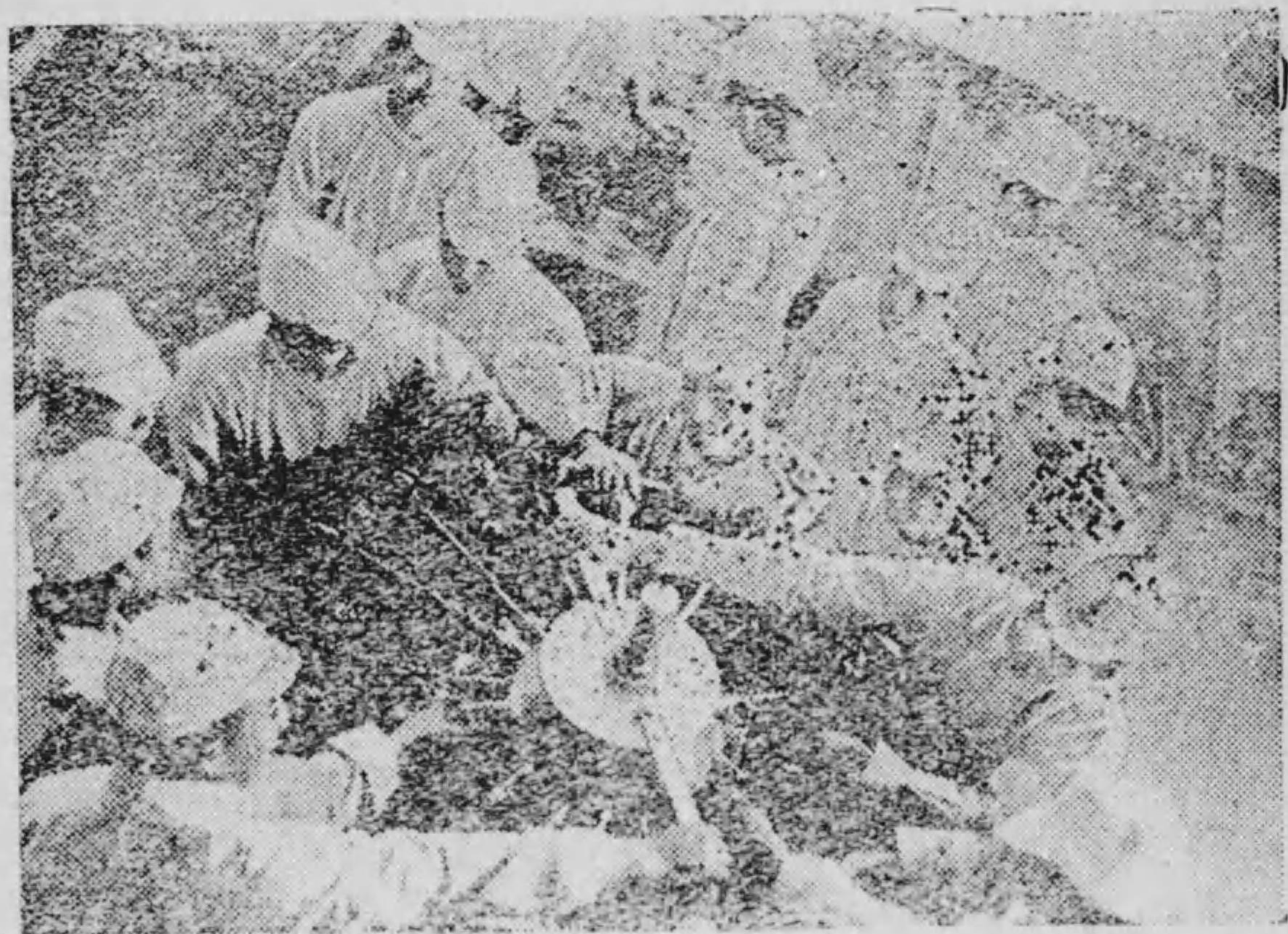


見事にそろつた鐵棒の上につしりした體軀がびちびちと躍る

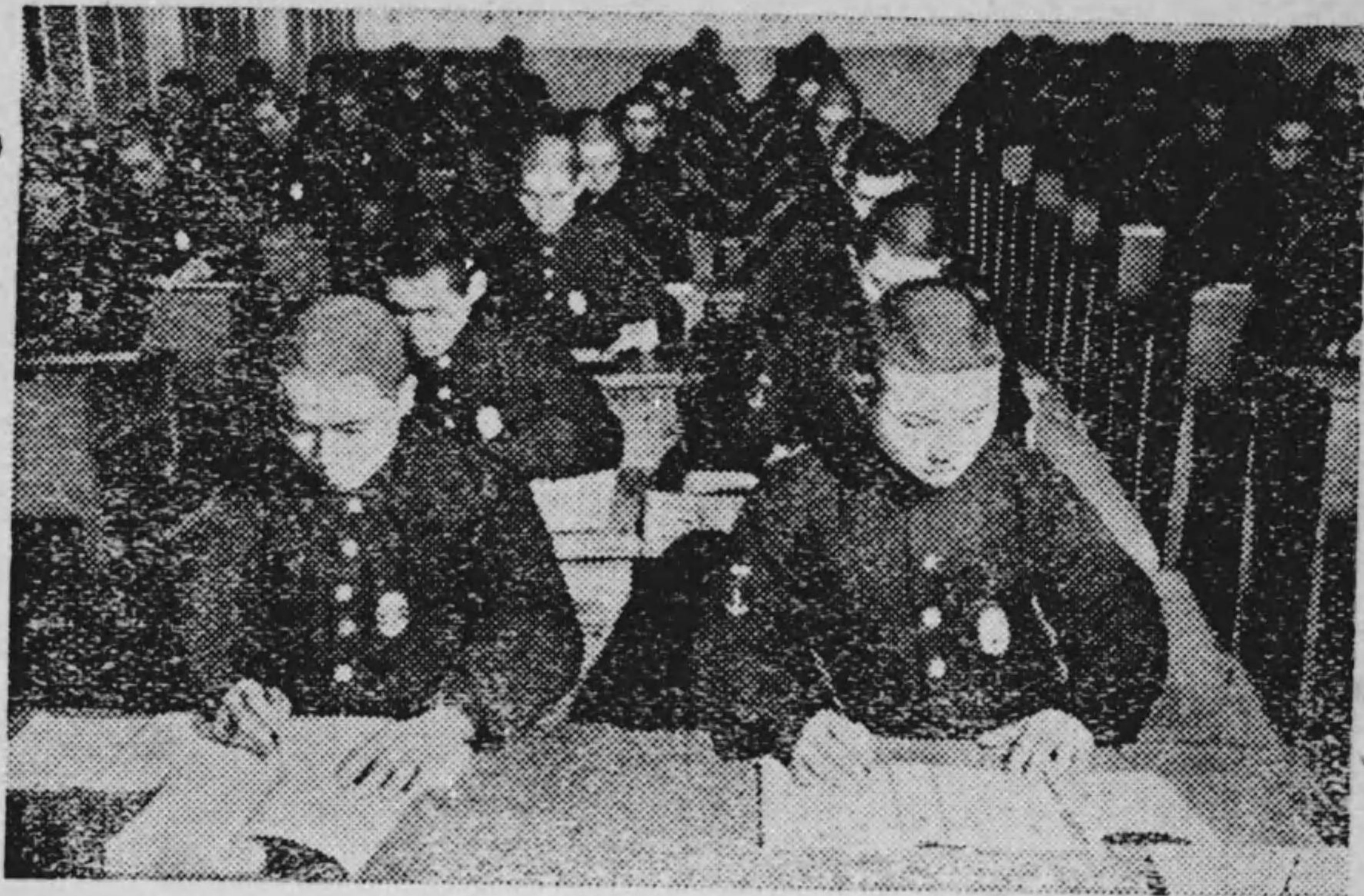
て後止むの氣概といふものを教へるわ
けです。

それから、普通學は、數學、物理化
學、地理、歴史、國語、英語で、この
中、英語のことは前にのべたとほりで
す。物理學などは、もつとも多い時間
ですが、それは航空術、或ひは無線電
信の組立てなどに非常に關係があり、
皆この課目に入るためださうです。驚
くことに、この航空隊をでて行くころ
には、物理化學などは、大體専門學校
卒業程度のもを、すつかり覺えてし
まふといふことです。

最後は、軍事學です。これには、砲
術、水雷、航海、通信、運用、航空、



立派な飛行兵になるには飛行機の構造もしつかり覚えておな
ければならない一分解訓練に餘念のない豫科練生



温習の夜のせぬ身じろぎも明日の豫習と復習のけふ

六時十五分から八時三十分までが、温習時間です。航空隊では、自習のことを温習といつてゐるのです。この時は各自の教室に入つて、復習、整理、豫習をしますが、班長が交代で教へ、また當直の教官もみまはつて、質問などをうけます。

『温習終り五分前』——静かに道具や書物をかたづけ、端坐して瞑目します。電燈が消され、五省が行はれるのです。各自は、反省、默念して、けふ一日を精一杯訓練したかどうか、といふことなどをふりかへるのです。それとともに、静かに皇恩の有難さにひたるのです。

さあ、それからは寝るばかりです。九時に消燈ラッパが鳴り、やがて、當直將校の

軍制、兵術、機關術などがあるのですが、その一部を紹介させう。

まづ、飛行機の機體の構造を習ふ航空術、また、無電の送信、手旗信號、陸戦の突撃、機銃、拳銃の射ちかた、また、短艇訓練、漕艇、帆走などを習ひますが、その中に、待ちに待つた適性飛行が行はれます。教官と一緒に同乗飛行をするのですが、それは、三重海軍航空隊から十二、三軒離れた白子の分遣隊で行はれるのです。

はじめて、空を飛ぶ時は嬉しいでせうね。伊勢海を眼下にみおろした時は、胸が痛くなつて、きつと、感激の涙がこみあげてくることせう。

午後四時すぎになると、武技と體育で汗だくになつた豫科練習生は、浴場に行きます。その風呂場はプールのやうに広いものです。

夕食は夏は五時十分、冬は四時四十五分に始るといふことです。武技と體育でもんだからだを、さらに風呂につかり、もうお腹はぐうぐういつてをります。

三度の食事のカロリが、一日分で四千カロリ以上の栄養があるといふのですから驚くでせう。その上、夕食から六時三十分までは休憩時間ですから、酒保へ行つてお汁粉、うどん、パンなどをたべるさうです。この時間には許された雑誌、新聞を読み、また故郷に手紙を書くのもこの時間ださうです。

巡視がある時は、もう、豫科練習生は安らかに、さうして、明日の活動にそなへて眠りに入つてゐるのです。

長い手紙になりましたね。小父さんも、こんな長い手紙を書いたのははじめてですよ。なにか参考になりましたか。次郎君、照正君。この三重にゐる豫科練習生の人たちにまけないやう、今は、君たちは君たちの務めをしつかりとはげんで、訓練に、勉強に精だしてください。

次郎君は甲種飛行豫科練習生に、照正君は乙種飛行豫科練習生になつて、敵米英撃滅に出陣する日を今から祈つてをりますよ。

小父より

次郎君
照正君

私は二時間近くもかかつて、この手紙を書きあげた。さうして、それをだしてもらふやうに宿の人に頼んで床に入つた。

三重空の教育を聞く

やがて私は、三重海軍航空隊に二度目の訪問をする日がきた。

それは、もう夏が終らうとするころであつた。

私は、おたづねしたその日、本部の會議室でT少佐から三重海軍航空隊の教育について、つぶさにお話を伺ふことができた。

私はまづ、前に航空隊での教育方針は、第一に態度を正しくすること、第二に旺盛な氣力を養ふこと、第三に沈着を、第四に機敏になるやう方針をさだめて教育をしてゐるといふことをきかされたが、このことをT少佐に話すと、その通りであると答へられ、更に豫科練習生の一人一人に指導精神をしつかり行きわたらせるためには、班長の役目が非常に重大であると、言葉をつがれて話された。

『海軍では當航空隊でも海兵團でもさうですが、教育に人手をたくさんかけてゐるのですよ。まづ、そのために班長といふやうなものをたくさん使ふわけです。なぜ、大勢の人が教育に入用かといひますと、理想的に教育しようと思つたら、一人で教育し得るのには限度がある、といふことが明らかにわかつてゐるからです。大體十五人前後に一人の指導

者、班長をつけるのが普通とされてゐますが、これ以上は無理ですね。それは単にいはんとすると、ところを放送するなら、もちろん幾人でもかまひませんが、立派な者に、こちらの理想どほりに、豫科練習生などを教育しようと思つたら、まあ十五人が限度でせうね。これ位の人數ですと、あの豫科練習生は、このやうな性質だ。この人間はいつもこんなことを考へてゐる。この豫科練習生はかういふ風にみちびけば更に進歩する。といふやうなことがのできるのですね。面白いことに、海軍でも十三人だと、この成績があがり、十七人だと僅かですが落ちるといはれてゐます。ですから當航空隊でも、海軍兵學校あたりでも大體十五人を基準にしてゐるのです。そして、この十五人の豫科練習生に一人づつ下士官がつきますが、これが班長と呼ばれてゐるのです。これがなかなか教育としては一番特長といはれるところですよ。その十五人の者に班長は毎日ついてゐるわけであつて、たいがい一日おき位には、朝から晩まで隊内居住をして、一緒に起き、一緒に寝て、いつでも一緒にゐて、いはゆる二十四時間教育をやるわけです。この教育は、ほんたうにすばらしく効果をあげるのです。この班長の上には分隊長、その上に分隊長とが一人づつをります。この分隊長は五、六班位で一分隊を作つてゐるところもありますし、九、十班位で一分隊を形づくるところもあつていろいろですが、とにかく班の上に分隊長があります。そして分隊長

は若い人は中尉、年輩の人は少佐がやつてゐます。この分隊長の全面的な女房役として分隊長といふものがあるのです。分隊長は中尉、少尉、兵曹長がやりますが、中尉の人はめつたにありませんね。そしてこの分隊長の上に教育主任がゐる教育について、常に専門に考へてゐる。教育主任の上には教頭がをり、またその上には司令がゐます。このやうになつてゐるのです。しかもこの人たちも家へ歸らず、つきつきりで豫科練習生の教育をやつてゐるのですから、効果はめきめきあがるわけですね。その上、普通一般でも師弟同行といはれてゐるのでせうが、當隊では徹底して、班長なり、分隊長が垂範實行の教育をやつてゐるのです。ですから、班長などはすべての先に立つて模範を示すわけで、この模範につづけと豫科練習生をみちびくのです。その模範も口先だけではないのです。また、各班には指導練習生といふものをつけてゐます。これは上級練習生がなつて、下級練習生をみちびくわけです。上級練習生は班に一名か二名つけてをりますが、この上級練習生の活躍もなかなかめざましいものです。班長の下にあつて、いろいろの仕事をやつたり、下級練習生の指導方法を講じたり、あらゆる點で上手に切り廻してやつてをるので。例へば、吊床のハンモックなども下級練習生と一緒にみな自分でたたみますが、これなども上級のものが早くたたんで、下の練習生に、かうやるんだといつて一々見本をみせながら、ほん

たうにかはいがつて教へてゐるのです。それから航空隊にこられる人たちが、「どうしてあんな若い飛行兵の人たちが、死生を超越した行ひをやつてのけることができるのであらう



ツーツートンツ、戦場の空をしの
んで打つ手にも思はず力がこもる

か。なにか、これについて具體的な教育をみたい」とよくいはれるのですが、海軍では精神教育はもちろんやつてはをりますが、特に二十歳前後の者が、死生を超越してものごとをするまでになるやうな、特別な教育は決してやつてゐないのです。要するに、隊門をくぐり、今までの服をぬいで、軍服にきかへる。服の疊み方、食事の仕方、総員起床の動作、勉強のやり方、これにたいして徹底的に

しつけて行く。——このやうなことから、海軍の傳統的精神を順次に行(ぎやう)の行ですぬ)によつて體得せしめるのです。いはゆる教へこむのではありません。これが海軍の教育といふものでせうね。海軍の教育は、朝起きてから夜寝るまで全部が教育だと思つて頂きたいのであります。

それから、航空隊の精神教育はなにを目標にしてやつてゐるかといひますと、結局軍人勅諭にもとづいて、海軍の傳統精神、これを體得せしめてゐるわけです。有難いことには軍人勅諭を賜はつてをりますから、これを中心にして豫科練生の精神を徹底せしめ、敢闘精神を心ゆくまで體得せしめるのです。しかしその手段いかんといふことになりますと、これはその指導にあたる分隊長や教官が率先垂範、すなはち、先ほど申しました、自ら範を示して身をもつてひつぱつて行くわけで、それ以外にはなにもありません。これは三重も土浦も鹿兒島も、みんな同じであります。それから、しつけの一例ですが、……私がかういふやうなしつけをしてをります。今一番若い豫科練生を私はもつてゐますが、それが入つてきた時に、「かうやれ」といはれたら「はい」と答へて直ぐ實行しろといひふくめてゐます。「はい」と答へることは命令に服従することである。軍紀の根元である。その「はい」といふことは「はい畏りました」といふ敬意が入つてゐるのだ。敬意といふ

のは上官を敬ふといふことで、五箇條の御精神にある禮儀のところへくるわけです。それで實行するといふことは第四條の信義に合致するわけで、また、いかなる困難でもやるといふのは武勇になり、また、忠節にもなるわけです。であるから五箇條の勅諭の中には軍隊の最も必要なものが皆入つてゐるわけで、それも、一言「はい」と答へてこれを直ぐ實行することによつて、すべて五箇條の勅諭の御精神を踐みおこなふことになるのであるから必ずさうおこなはなくてはならない——と豫科練生に教へこんでをります。豫科練生が短時日の教育によつて、あのやうな死生を顧みないたくましい軍人魂がよくまあ植ゑつけられるものだと驚かれるのもつとですが、別に生とはなんぞや、死とはなんぞやといふやうなことをいふわけのものではなく、要するに「はい」といつて素直に實行する精神から生まれてくるのです。例へば、敵がうようよしてゐる中でも、上官が「行け」といはれたら「はい」といつて突つこんで行く、どんな苦しさがあつても「はい」といつてとびだす。ほんたうに「はい」といつておこなふ一事が大いなる責任を果すといふ精神となり、それがおそろしさも、死の恐怖も、すべてを打消してくれるわけですね。これさへできれば、もともと立派な日本の青少年ですから、直ぐにも忠勇な軍人になることができるわけです。

それなら、豫科練習生には、どんな人が應募して欲しいかといひますと、少しでも優秀なよい青少年を探りたいといふのはもつともな話でせう。ですから應募者がむやみに多くても、心身ともに程度があまり悪くては困るのです。しかし優秀な青少年といふのは、ずばぬけて頭がよく、すばらしくからだが達者なものばかりをいふのではありません。つまり中位の頭で、普通の體格をもつてゐる平凡な青少年で十分結構なのです。ものごとをいひつけられたら、「はい」といつてすぐに實行する青少年であればよいのです。ほかにむづかしいことは要求しませんよ。ですから素直で丈夫な人間であればよいわけです。特にグライダーをやる必要もないし、模型飛行機が上手でなければならぬといふこともありません。一度び海軍の傳統の中でそだてられると、いろいろ新聞や放送で知られるやうな赫々たる武勳をたてる海鷲に誰でもなれるのです。この際、更に、より一層、家庭とか學校なども戦局の重大性に認識を深めて、豫科練習生を一人でも多く送りだして頂けるやう努力してほしいものです』

T少佐は、しみじみと、力強く最後の一句をさう結んだ。それは日本の青少年全體に、その父兄や教育者全體に呼びかける言葉だなど、私は聞いた。

さうだ、戦ひはますます熾烈になつてゆく。航空戦の重大性はそれとともにいよいよ加

重されてゆく。今こそ、青少年はこぞつて飛行豫科練習生を志望し、輝く海鷲となつて敵米英撃滅に飛びたつて行かねばならない時である。

窓のそとは晝さがりの陽が、ぎらぎらと練兵場の上を照りつけてゐた。その中を、かけ足で、三々伍々いそいで行く、豫科練習生の姿が眼界を走りすぎた。

私は、その豫科練習生の背に、大きく黒々と、

『青少年よ、豫科練につづけ』

と書いてあるやうな氣がしてならなかつた。

三重空の劍道について

T少佐にお會ひした午後、劍道の稽古を見學したが、それは實に眞劍な、倒れて後止むといふか、火の出るやうな稽古であつた。H教官は三重海軍航空隊における劍道について『從來の一般の劍道は勝負に非常にとらはれ過ぎてゐはしないかと思はれるのです。たたくとか、當てるとか、さういふやうな問題が非常にやかましくいはれて、結局最後に斬るといふところまでは到達しきれないといふやうな、約束動作だけにこだはり過ぎてゐると思ひます。そのやうなことに關係なく、ほんたうに一撃一殺といふか、さういふ意味の劍

道に當隊では力を入れてをります。ただ約束動作が上手で、單に竹刀を當てた方がよいといふのは、實際に刀をふつて斬る場合には斬れるものではないのです。

また、當隊では、防具をつけないでやれるやうなものを今研究中です。防具はなにもつけないで、籠手、面、胴といふ約束でなく、頭の上から足の先まで、どこをたたいてもよいといふことでやらせるのです。兩方で構へて始めると、もう一氣になぐり合ひます。その壯烈さといつたら……』

と、窓から練兵場の方をちらりとみながら、その光景を險の裏にゑがくやうであつた。

『かうなると試合でなく、仕合——ですから果し合ひになつてしまふのですね。果し合ひは眞劍勝負ですから、これはその果し合ひの入口、仕合口といふ意味でやらせるのです。結局平時の仕合は即戦闘に通じなくてはなんにもなりません。その戦闘に行く入口として仕合に行くのです』

といはれたのであつた。

敢闘精神を養ふ柔道

そのあくる日。こんどは柔道について、S教官から、いろいろお話を伺つたのである。

お話を聞いてゐる時、元氣のいいかけ聲が、遠くから私の耳にひびいてきた。體操の時間なのでもあらうかと思ひながら教官の口もとをみつめた。

『普通柔道といふと投げることだと考へますが、當隊の柔道は、從來の柔道のやうに投げて相手を制するといふだけではないのです。いはゆる一撃必殺の精神をもつて、相手を殺し、その後に投げてきめる。——といった敢闘精神を養ふところに目的があるのです。

なにかこれで相手をかうするとか、相手がかうくればかうしなければならぬといふ形だけのものではなくて、これから體得した精神で總てを行じて行く。——さういふところに武道を課した一つの使命があるのだと思ひます。

幾ら文明が進んで行つても、兵器が進歩しても、かうした三千年の傳統のある武道精神といふものをもつて、豫科練の精神を教育するといふ意味から、この武道を課して行くのであつて、これにより不屈の精神を養つて行くとともに、これを通して總ての行動を武道的な精神をもつてやる——さういふところに、大きな重點が置かれてゐるのです。つまり術をとほして精神を練るのですから、その精神がいざ飛行機に乗るとなると、體當りの精神にもなるし、機關銃を撃てば、それが敵を十分に手許まで引きつけてから、がつとばかりに引金を引く精神にもなるのです。

今ここでは戰國時代における武術を再検討して、その精神を研究してをりますが、結局海軍戰術と武道といふものは、精神においては非常にびつたりするものがあるのです。ですからしつかりやるのです。

今までの柔道では型においても、相手がなぐつてくるのを、それをうけて相手を倒すといふものが多かつたのですが、海軍傳統の精神としては先の先をきつて行かなければならないのです。機先を制するのですね。その先の先を取つて、相手を殺すといふことを研究して、豫科練習生にさういふ武術を課してゐる、といふことがいへると思ひます』

體操と闘球の話

豫科練習生のあのたくましいからだをきたへる、航空隊の體操とはどんなものであらうか。某教官のお話を伺ふことにする。——先づ私が、『航空隊での體操のお話を、これから伺はせて頂きたいと思ふのですが——特にあの横轉びとか前轉びといはれてをります廻轉運動は、あれが單に體育のためだけにやつてゐられるのではなくて、飛行機にのつた時の宙返りとか、横轉とか、高等飛行技術をやる場合にそなへるための體鍊であるといふことを聞きましたか、……』といふと、

『さうですね。元來航空隊でやつてゐる廻轉運動は、一つにはいはゆる身體的な體鍊道といふものを高めて行く、といふことをねらつてゐるのですが、その半面また飛行兵の體力として必要なものを植ゑつけて行くといつた意味からあれをやつてゐるのです。これを深く考へますと、あの横にころころとがる横轉びなどは、別に航空隊だけでやる特殊なものぢやないのですよ。それは人間が日常やつてゐる自然生活の中には、上を向いたり下を向いたり、前にころがつたりすることはありますが、横にころぶといふことは、まあ、めつたにありません。けれども横轉びのやうなああいふ運動は、よく田舎の子供などの小さい時には、きつとやるものなのですよ。例へば、なだらかな土堤を横にころころんで降りたりするのを、あなたがたもみかけたことがあるでせう。つまり日常生活にはありませんが、小さい時には経験したやうなものを取り入れてゐるわけですね。もう一つ將來考へなければならぬと思ひますのは、あの肋木です。これはどうして必要かといひますと、あの肋木の上へのせたり、その上で體操させることは、今にこの豫科練習生が飛行機の離着陸をやるやうな時に一番こまる地上の高さの目測に、これが應用できるのですから體操もなかなか大切なものですよ。普通の者は地平面と自分の飛行機の高さを目測する時に非常に誤差が多いさうです。しかしこれは私たち人類が祖先からうけついで一つ

の性質、錯覺なのでせうね。私たちは地面をみる長さよりも、垂直面をみるのを大體過大評價するものです。ですから、どうしても高さといふやうなものは、非常に目測できにくくなるのですね。そこで航空隊では、豫科練習生にこのやうなことのないやうにならして行くために、さういふやうなものを體育の中に取り入れるわけです。例へば五米なら五米といふ高さの肋木で體操するといふ體驗を通して、一つの運動の型として、その高さなどを十分頭と體にたたくこびのですね。それが垂直感覺の訓練になるといふことはわかるでせう。このやうな訓練が將來の飛行技術の上に大きな力となることを、私たちは考へてをります。——それで一般に豫科練習生の身體の耐久度、それから柔軟性と巧緻性、強靱性の三つの特質を體操によつて高めて行くやうに考へられてゐるのですが、日ごろの體鍊が、將來飛行兵としての身體特性になるやうにといふ點に重きをおいてやつてゐるのがこの體操です。そこで、あなたがたは、では航空隊に入つてくる前の國民學校、中等學校で前轉び、後轉び、横轉びなどをやつたらどうかと思ふかも知れませんが、それはあまり要求しなくてもよいと思ひます。——ただかういふことを考へます。精神的に非常に從順な性格をもつてゐる者、また從順で、卑屈でない者は、それが或る方面では強い責任感をもつ者にもなるし、或ひは、しつかりした戰鬥精神をもつ者にも必ずなるものです。すなはち從

順さが一つの根據になると思ひます。それと同じやうに身體的にも柔軟さが將來飛行兵になるといふ意味から、非常に必要なのですね。ところがここへくる練習生の身體は固いですよ。そこで子供は元來柔軟性のある者なのですから、隊の體育教育は練習生の身體を軟かくする。固いのをほぐすやうにしてあるのですが、軟かくするといふことは國民學校や中等學校でも大いにやつてもらひたいですね。——からだが固いと飛行機にのつてゐる時、飛行機がかたむくと、自然固いからだの者は、左に傾けば右に、右に傾けば左にからだを向けて釣合ひを取らうとしてしまふのです。さういふことをしますと非常に疲れてしまひます。

足を少し曲げろ、または、しつかりと伸ばせといつても、初めはなかなかうまく行かないのですが、それを伸ばせといはれたら伸ばせるからだ、曲げろといはれたら曲げられるやうなからだにしておく、いはゆる精神も、身體もともに柔軟性のある者にするといふところに、航空隊の體操の使命があると考へます。それから體技の中の鬪球ですが、あれなんかも盛んにやつてをります。これは、この鬪球が、練習生が將來行ふところの空戦に似てゐるところがありますし、これによつてできるだけ實戦の雰囲気にはたらせるやうにするために、やらせるのです。あの鬪球の體當りとか、突撃隊とか、防禦隊とかは、これはあくまでも實戦に應用できる頑張りをも、精神と身體に、しつかり覚えさせるところに、この

鬪球の必要さがあるのです。それも普通約一時間くらいありますが、初めも終りも少しも變らないくらゐるやうにしてゐるのも、ここに意味があるのです』

私はなるほどと、この三重海軍航空隊での體操の内容をしつかり身につけさせられたのである。

實戦にそなへる水泳訓練

なにか飛行兵と水泳とは、およそ縁のないやうな感じをうけるが、それは大變な間違ひで、非常に密接な關係があり、いかに大切な訓練であるかが、次にお傳へする〇少尉のお話を聞いてゐるうちに、切實に、わかつてくるのであつた。では〇少尉のお話を耳をかたむけよう。



實戦に臨んでの頑張りと攻撃精神を練磨する鬪球

『水泳は甲種も乙種もうまいですよ。——三重空の水泳の鍛錬法としては別に特質はありません。普通にやつてをります。多少違ふと思ふのは、いはゆる競泳ですね。まるで陸上スポーツのやうな競泳、ああいふものには重きをおいてをりません。耐久力の方へ重きをおいてゐるのです。』

海軍では武道としてとりあつかつてゐる點が、違ふといへばいへるのではないでせうか。また身體の鍛錬のためといふ目的以上に、精神の練磨といつた要素が相當多分に入つてをります。

で、競技の話になりますが、先づ一番大きな競技は遠泳ですね。

編隊遠泳では、我勝ちに早く行くのではなく、一つの隊がまとまつて一人の落伍者もなく泳ぎきる、さうして終着點へとびこむ。これが一番點數が多くなつてゐます。

それから飛込競技ですが、特に飛行兵には必要な練習であるといへませう。空中感覺をやしなふにはもつともよい鍛錬法で、果敢な氣性をやしなふことは陸上ではできないものです。

かういふ風に精神的な意味も非常にふくんでゐるのです。いひ忘れましたが團體競技は二十人一組です。その二十人のうち一人でもおくれる者があれば、全然點に入らないので

す。これは海軍の教育の特色ですね。あらゆる方面に團體、全體といふものをいつも考へるわけであります。

個人といふものはあまりみとめないのです。従つて體鍊の方でも、躰教育の上でも、一人がへまをやれば百人ぬれば百人全體がしかられるのです。これが結局責任觀念の養成、協力一致の精神をつくるのですよ。さういふことが海軍の傳統でありませうね。

ですから、さういふ成果があつたソロモン海戦の時には、ずるぶんでてゐます。——例へば味方の驅逐艦がやられると、その場合乗員は艦長の指揮に従つて、四列側面縱隊となつて、堂々と敵前を泳ぎ切つた例があります。これなども、各個ばらばらであつたら大分犠牲者が多かつたらうと思ふのです。中には四十八時間泳いで助つた者たちがあるほどです。とても一人ではそんなに長い時間泳げるものではありません。兵學校あたりでも團體遠泳といふことを大變やかましくいつてゐますよ。距離は十哩で、朝八時ごろ海に入つて、晩暗くならないと歸れないのです。速い者も遅い者もみんな同じ速度で泳ぐのです。さういふことが實戦に大分効果がでてきてゐる事實を私は時々聞かされますが……』

私は、〇少尉の白い齒並をみつめながら、『實戦に即した特殊な泳法の訓練などをやつてゐるのでせうか』とお尋ねしてみた。

『今年は天候の加減でさうしたところまで行きませんでした。』

話は別ですが、救助法の中に溺みを解く方法がありますが、これに類したもので水中格闘法といふのがありますよ。

しかし實戦に即應したものは耐久法とか、今いつたやうな船がひつくり返つた時に、ばらばらにならないといふことなどは、消極的なものですが實戦上必要なことですね。

また、服を着たままとびこんで、水中で解く、或ひは低温の場合、高温の場合はどうすればよいか、さういふことを研究してをります

『水泳を武道として取り上げる場合に、昔からある水泳術から採り入れてゐるといふものはありませんか』

『それはこまかいところをみれば、これはあの流儀でやるのと同じやうなものだ、といへばさういふところもあるかも知れませんが、實際は各流の真似ではなくて、各流の泳法を、今まで、水泳術家も誰もやつてゐないやうな分解をして、手の動作にはかういふ種類のものがあるとか、足の動作にはかういふ種類があるといふことを、科學的に分析して、それを効果的にやるにはどうしたらよいかといふやうに、それぞれ結合して海軍の泳法はできてゐるので』

『全然泳げない者を泳げるやうにするには、どんな方法をとられますか』

『大體順序をきめて、初歩から無理なく進む仕くみにしてをります。』

例へば最初は編隊を作つて海岸の浅いところをかけ足をさせる。水がとびはねて顔へかかる。これで水になれさせるのですね。

次は水へ顔をつける。こんどは二人手を組んでしづむ。お互にしづんだ中でにらめつことをやる。と、長くやつてゐられません。身體が浮いてくるから、それで身體が浮くといふことを覚えるのです。

この水の中を歩いたり、ぼかつと浮かんだりするのは、游泳の中の相當大きな段階に入るのです。

このやうにして海軍の游泳教程は大體第一過程、第二過程、第三過程の三つにわかれてゐるのです。

第一過程は歩き方、浮かび方がふくまれてゐます。例へば股を一杯あげて歩くにはどうすればよいか、それから、探渉（探り歩き）、拔渉、送渉、跳渉といふやうなものが入つてゐます。面白いのは潜水競争、あれには參りましたね。水の中へもぐつてどの位の距離を行くかの競争をするのですが、あれをやらせると、頑張りすぎて、みんな伸びるまでやら

れるにはこまりましたよ。

入隊後四箇月から練習生にやらせたのですが、いつまでたつても浮かんでこない。終いに伸びて浮かんでくる始末ですよ。これは危険だといふのでやめました。ここにも豫科練の頑張り精神がよくわかると思ひますが……。

大體、水泳のお話は以上のやうなものです。指導要項などの一部がありますから、ご覽になりませんか』

といつて少尉は「游泳術指導提要」とある小冊子を私に渡してくれた。

それを手にとつて、頁をめくつてみると、游泳の理論と實際を微に入り細を穿つて書いてある。その内、游泳心得の項を左に抜萃すると――

游泳心得

第一節 諸種の水の状況に對する心得

一、渡 涉

河等の流水を渉る際には水面靜なる所は一般に深きを以て成可く小波の立ち居る箇所を選び河下に向ひ斜に渉るべし、部隊の渡涉にありては強き者を上流に配し横隊となり腕を組み渉るを可とす
海底其他の状況に依り渡涉には次の如き方法あり

(イ) 探涉 海底に石、介殼等危険物多くある際足を海底に附けた儘擦足にて足場を探りつつ前進する方法なり

(ロ) 拔涉 水深淺く海水混濁し又海藻類の繁茂せる海面に於て一足毎に足を水面迄抜き上げ靜に前方に差入れ足場を探りたる後重心を其足へ移し前進する方法なり

(ハ) 送涉 流水横より激しく當り轉倒さるる危険ある場合下流の足を前方に出し後方の足を之に引付け更に下流の足を出し銃劍術に於る前進の如き要領にて前進する方法なり。通常の前進法にては兩足横に並び前後相反せんとする時轉倒さるる虞あり

(ニ) 跳涉 海底安全にして急速に前進せんとする場合拔涉の如く足を抜き上げ跳びつつ走り進む方法なり。又水勢激しく足を拂はるる虞ある箇所を渉るには重き石等を持つて渉るを可とし海底危険又は海藻繁茂せる海面にして稍深き所を渉るには體を屈して充分水に沈め足に掛る重量を輕減して徐に前進すべし

二、流水を遊ぎ渡る場合

流水を渡るには特に氣力を充實し平常に比し一層沈着なること肝要なり。若し中途にて怯心生ずれば動作激し呼吸迫りて忽ち疲勞し危殆に陥ることあるものとす。河川に在りては成可く上流より入水し豫め下流に數箇の目標を定め置き、第一目標に到達し能はざる時は下流の第二到着點に目標を移す可し。強ひて最初の目標に達せんとして流を溯るときは疲勞の爲危険に陥ることあるべし。尙水上に於

ける距離は陸上にて見るより遠きを例とするを以て目測を正確にし自己の技を考察したる後實施すること肝要なり。尙河海を問はず流水を溯るには抵抗及び疲勞少き體形を必要とするを以て通常横體又は平體中の速力ある泳法を選ぶべしと雖も臂脚の動作を休む能はざるを以て疲勞を來し易く止むを得ざる場合の外好んで適用すべきものに非ず

三、流潮の變化に對する心得

陸岸の形狀並に岩石等の配列及び風潮波浪等の關係に従ひ流潮の變化を伴ふものとす、一般に之等の變化に遭遇せば意を剛毅ならしめ流勢に逆はず、速泳若くは早拔手等を以て脱出すべし

(イ) 渦 卷

渦卷は遠くより見ゆるを以て近寄らざるを第一とし、若し之に陥りたる時は先づ其の方向を確め之に逆ふことなく一時渦に従ひ其の方向に斜に拔手、速泳等を以て脱出すべし。此際立體となるべからず。若し脱出の暇なく卷込まれし時は盲動することなく暫く耐へて卷込みに任せ沈着にして腰膝を屈し兩手を以て脚を抱き全體を圓くし浮出を待ちて速に拔手を以て離脱すべし

(ロ) 出 潮

河口附近又は海岸線屈曲の模様により出潮と稱する流勢を生じ不知の間に沖に流さることあり。若し之に出會せば岸に向ふことなく海岸と平行に拔手等を以て乗切るべし。而して出潮の起る箇所は地方に依り概ね一定しあるを以て豫め調査すること肝要なり。又出潮は其幅員大ならざるを以て

例とし之が脱出は困難に非ざるものとす

(ハ) 迫水及び突込潮

流勢又は波濤の衝突により迫水と稱し小なる渦の如き現象を生ずることあり。斯の如き場合には拔手にて速に脱すべきも止むを得ず其中に押し入れられたる時は渦卷の場合の如く身體を圓くして浮上り更に離脱するを要す。又地形特に海底の状態に依り突込潮と稱し水の表面と異なる下流を生じ游泳中臂脚の動作變調を來し意外の方面に運び去らることあり。此の場合には決して狼狽することなく速泳又は早拔手等を以て横に切り抜くるを可とす

第二節 波濤に對する心得

一、平波又は長波

波頂の崩れざる平波即ちノタリ波又は大洋に起る長濤の場合には平泳又は立泳を以て波と共に上下しつつ泳行するを可とす

二、漣又は小波

漣又は連続來る小波は飛沫間斷なく鼻孔を襲ひ平波に比し却つて困難を感ずるを以て平體又は横體にて顔面を背けて泳行すべし

三、白波又は巨濤

波頂折れ崩れ白波となり高さ約一米以内の時は體を横に向け波に乗りかかる様にし之を通過し得べく

遠浅の場合に在りては其の都度水底を強く蹴り跳躍して之に乗りかかり次の波の來らざる間に前進するものとす。波浪次第に其の高さを増せば潮を含み或は顔を打たれ以上の動作奏效せざるを以て淺瀬に在りては海底を蹴り外海に在りては足を煽り波の將に崩れんとするとき頭を下げ之に向ひ平潜を以て突入し其の突き貫きたるを待ちて更に泳行するものとす。一、二丈の巨濤に襲はれ或は大なる引波に捲込まれし場合には股膝を充分屈げ兩臂にて脚を抱き全身を球の如く固め回轉せられ乍ら波に任せつつ水面に浮ぶを待ちて或は要すれば中途より明るき方向を見定めて煽り出づるを可とす

第三節 上陸に對する心得

未知の地點に上陸せんとする時は海底の狀況に就き注意するを要す。然らざれば岩角、杭或は貝類等の爲め思はざる負傷をなすことあり。波濤なき場合は顔を水につけ海底の狀況を注意しつつ近付き上陸に際しては充分體を水に沈め足に掛る重量を輕減しつつ足場を探れば可なり、然れども波濤ある場合は兩臂を伸し手泳をなしつつ足を前に出し足場を探り差波に乗じて取付き波引きたる後上陸すべし。上陸點若し砂濱なりとも巨濤ある際は不用意に上陸すべからず。往々にして再び引波に轉倒され捲込まることある故なり。古流の教へに差波に乗じて砂濱に上りたらば扇子、短刀等の得物を砂中に突立て引波に堪へ然る後速に上陸すべしとあり。要するに引波に對し充分注意すれば可なり

第四節で耐寒法を述べ、第五節で害蟲、毒魚に對する注意を與へ、次に「水上競技指導要領」の項で競技の目的と實施上の諸注意を細説し、次に「游泳訓練準則」として、

一、游泳術指導に關し左記諸件に注意するを要す

- (1) 教者は習者心身の狀態を考察し適當なる變化と興味とを與ふるを要す
- (2) 游泳は他の運動と異なり人命に關する危険あるを以て設備及び器具を整ふると共に習者をして良く指令を遵守せしめ監督し得ざる人員を同時に入水せしめざるを可とす
- (3) 習者をして長く淺所に靜止せしめる時は身體冷え腹部其他に故障を生ずる虞あるを以て適當に離水せしむる様注意を要す

(4) 游泳時間の長短は水溫、氣溫及び習者の體質に依るも通例初期に於ては其の時間を短縮し水に慣るるに従ひ漸進的に増加するものとす

二、游泳實施に當りては左記諸件に注意すべし

- (1) 受診患者は游泳の可否につき軍醫官の指示を受くべし
- (2) 過勞又は異狀を感じる者は訓練に参加せしめざるものとす。特に有熱、下痢又は眼、耳、肛門等に異狀ある者は受診前と雖も其の旨を届け見學すべし
- (3) 中耳炎、其の他の耳病の既往症ある者は潜水を避くるを要す

三、入水前左記諸件に注意すべし

- (1) 嚴密なる人員調査を行ふこと

- (d) 豫め用便を達し置くこと
 - (e) 準備運動を行ひたる後唾液又は水にて耳孔を潤し先づ頭及び胸に水を注ぎ徐に入水すべし
 - (f) 游泳帯は固く結び途中にて解けざる如くし又必ず游泳帽を用ふべし
- 四、游泳中は左記諸件に注意すべし

- (1) 極めて静肅にして漫に談笑すべからず。又溺者の真似をなすべからず
- (2) 呼吸は自然に平靜に行ひ氣を充分落付くるを要す
- (3) 危険に際しては直に大聲を發して救助を求むべし。又他人の危難を認めたる時は速に救助艇を呼び附近の者と協力して救助に努むべし
- (4) 顔に水を被りたる時又は水より顔を出したるとき手を以て之を拭ふ癖は努めて之を避くるを要す
- (5) 口を開きて一々水を吞吐するの癖は衛生上避くるを可とす
- (6) 游泳中は屢々頭部を潤し眩暈等を防ぐと共に心を沈着ならしむることに注意すべし

五、游泳後は左記諸件に注意すべし

- (1) 人員調査を嚴重に行ふこと
- (2) 直に淡水にて身體を洗ひ乾きたる手拭にて全身を強く拭ひ呼吸運動等を行ひたる後着衣するを可とす

- (3) 必ず耳孔の水分を除去し置くべし。之が爲めには其の耳を下に向け片足にて跳躍せば大部分を除去し得るものにして甚だ困難なる場合は強ひて之が除去を行はず病室に於て處置を受くべし
 - (4) 游泳直後に冷水を飲むは避くべし
 - (5) 日光の直射に依り炎症を起し疼痛を覺ゆる時は皮膚を清潔にし「ワセリン」等の油類を塗るを可とす
 - (6) 眼に結膜炎を起したる時又皮膚に炎症發泡を生ぜる場合は病室に於て手當を受くべし
 - (7) 強く鼻をかむは避くるを要す
 - (8) 游泳帯は使用後洗濯し乾燥せしむべし
- まことに懇切といはうか、周到といはうか、かゆいところへ手のとどくやうな豫科練習生の水泳指導法を何回も讀み返して、私はすっかり感心してしまつたのである。

待ちに待つた適性飛行とは

三重海軍航空隊から電車で三十分あまりの白子驛から、歩いて四十分ほどのところにある三重海軍航空隊の白子分遣隊をたづねる。秋晴の空は、あくまですみきつたその下を、私は分遣隊からだして頂いた車を、分遣隊の建物には入らず、そのまま飛行場につけて頂

いたのである。

一段と高い天幕張りの中央に、飛行服の姿もおもしろく、おもむろに他の教官の方や豫科練生をうしろに従へて腰かけてゐるのが、尋ねる分隊長のK大尉であつた。

きつと飛行場をにらみ、豫科練生の同乗飛行をじつとみてゐる時のK大尉の顔は、近よりがたい激しいなものか、あたりをはらつてゐるのであるが、いざ私たちと話される段になると、うつて變る柔和な瞳をたたへて語られるのである。私はK大尉が、丁度、やさしくもあり、きびしくもあるあの慈父のやうに思へてしかたがなかつた。

——飛行場ではまた一機練習機が、黄色い横腹をみせてとびあがつて行つた。その間をぬけて飛ぶやうに赤トンボが、すすいと空にとぶ。私は静かにK大尉の話に耳をすますのであつた。

『適性飛行の種類は、今海軍でやつてゐるのは、採用の時の適性と、採用して航空隊に入つてからの適性と二通りであります。』

この白子分遣隊でやつてゐるのは、操縦とか偵察とか攻撃とか通信とかいふ教育を早目にわたるために、つまり専科の教育をやりやすいやうにするのが目的なのです。またこの目的の一つとしては——豫科練習生は將來飛行兵としての基礎教育をするといふところか

ら、この間は全然飛行機にのれないのですが、入隊當時飛行機にのりたいといふことで心が一杯であつたのに、入隊後この豫科練にゐる長い間飛行機にのれないといふことは練習生として非常に苦痛であるし、また適性飛行の期間は僅か四日ですが、その四日でも飛行機にのせてやつて、それによつて練習生が飛行機といふものはかういふものだといふことや、訓練もかういふやうな訓練をうけるのだといふことを知らせるためでもあるのです。

要するに將來の飛行機乗りとして、いくぶんでも飛行機の體驗をさせて、自分がこれから勉強して行く道への方針とさせ、その上に日本傳統の飛行兵氣質といふものを早くのみこませ、そして自分が、どのやうな方向に向かつて勉強した方がよいかとか、どのやうな方面に體力を練らなければならぬかとか、精神的には、どんな風にして自分で修練して行かねばならないかとか、そのやうなことを早い時期にめいめいにたたきこむといふこと——このやうなことが目的であります。

しかし、この適性飛行は、ただ飛行機にのせるだけでなく、地上適性といふものもあります。ですから、この適性には地上適性と機上適性と両方あるわけです。

地上の方の適性は、三重海軍航空隊の本部でやつてをります。これは地上で、小さいものですが、いろいろな飛行機の模型にのせてみて、飛行機にのつて上空に行つたとおなじ

状態にさせて、右に傾いたらどうしたらよいかとか、着陸姿勢はどうすればよいかとか、地上で操縦の訓練をしますので。それからまた心理検査や形態性格といつて、操縦にはこのやうな顔や、からだつき、すなはち形態をもつてゐる人がよいのであるとか、骨相學的に適不適をわかるやうなことでして、いろいろと適性を調べるのです。

その他レコードに電信のいろいろな符號の音を吹きこんで置いて、蓄音機でそのレコードをかけて、どのやうな通信であるかといふことを筆記させたり、すぐにいはせたりして、どの位その人に通信の方の能力があるかといふことを検査する。また、搭乗員の身體検査をする——このやうな検査をひつくるめて地上検査といつてゐます。

その地上検査を終つた者を、こんどは機上検査で、それぞれその豫科練習生が、どんな方面が得意であるかといふことを決定しようといふわけです。

さうして三重海軍航空隊にゐる間は、操縦の方と偵察の方と二つに大きくわけておくのです。操縦にわけられた者は操縦に必要な教育をやり、偵察にわけられた者は偵察に必要なものを教育するのです。操縦にも、偵察にも向かない者は、あとで攻撃にもつて行きま

す。

この白子分遣隊で四日間にやる教育についてお話ししますと、第一日目は舵の効果であり

ます。ご存じでせうが飛行機の舵には、補助翼と方向舵と昇降舵と、三つの舵の使ひ分けがあります。操縦桿を右へ倒せばどういふやうになるか、左に倒せばどうなるか、つまり操縦桿をどうあつかへば、舵はどうなるかといふことを教へるのです。それから、かういふときには舵の具合がよいか、舵の具合をみる方法はかうすればよいといった、要するに舵について第一日目はいろいろ教へるのです。これは、ごく基本的なもので、これによつて水平直線飛行といふのは、飛行機が眞直で曲らずに傾かないやうにすること、さうするためには飛行機の頭の上げ下げなどに氣をつけて眞直にとぶやうにしなければならぬといふことなどを、しつかり教へるのです。

それから第二日目には、水平飛行と、水平旋回をやりまゝです。これで教へることは大體終つて、第三日目、第四日目は、第一日、第二日目で習つたことを復習して、さうして検査に入るのです。

これで四日間は終るのですが、その検定をやつてもまだ決められない者はもう一度検定をやり直します。

四日間の成績で、どういふ結果を豫科練習生にあたへるかといひますと、四日間であらうまい豫科練習生は、自分一人で飛行機を操縦するやうにもなるのです。しかし、まづい者は



飛行適性—初飛行—いざ報告に隊長分
ふる胸に感激をへむかの日飛行の

また一機、豫科練習生をのせた、こ
で使つてゐる三式二號陸上練習機が、ふ
わりと地上を離れるのが眼にうつる。
K大尉はさらに言葉をつがれて、
『歸つたときには「出發します」のとこ
ろを、「終りました」といひます。あの
黑板に書いてあるのは人の飛行機の
番號、その次は練習生の番號ですが、そ
れに斜線を引いてでて行くのです。歸つ
てきましたら、もう一本斜線を、終つた
しるしとして引いて、丁度×の字になる
やうに斜線を引くのです。これは戦地で
も使つてゐるのです。あれをみると誰が
どの飛行機のなににのるか、今とんでゐ
るか、飛行場にゐるかといふことなど

いつまでも飛行機の頭を下げ過ぎたり、上げ過ぎたりしてうまくゆきませんよ。同乗飛行
をしてゐる教官は操縦桿をはなしてしまふのですが、非常に適性のよい豫科練習生は、實
にたつしやに、うまくとんでゐます。實際操縦をやらせてみると、一番よくわかるので
が、まづい者はいくらやつても上手にならないといふことですね。こればかりは地上では
少しもわかりません。普通初めて飛行機にのる豫科練習生は、いくら地上で頭がよいとい
はれる者でも、機上ではよくないといふことがしばしばあります。やはり精神上的の影響が
多分にあるのでせうな。このやうに地上でいくら上手でも飛行機にのつたらだめだといふ
ことがあるので、地上検査と關聯して、適性検査をやつてゐるわけです』
K大尉は、ちよつと言葉をさらされたので、私は眼を飛行場の方に向けた。豫科練習生は
同乗飛行の教官と一緒に、分隊長に報告をしてゐる。

『何々練習生、第〇號（これは飛行機の番號）空中操作、同乗出發します』

きつちりとした敬禮をすると、大またに一步横に踏みだし、廻れ右をすると、黑板の前
に勢よく飛んでゆく。その恰好は實に飛行機にのれるといふ喜びに勇んでゐる感じのほか
に、なにか、おかしがたい嚴肅さと、はちきれんばかりの意氣が、からだ全體にみなぎつ
てゐるのがみられるのであつた。

が、すぐにわかります。

え、飛行服の説明をしてほしいといはれるのですか、それでは説明させよう。あの上に着てゐるのはライフジャケットといつて、救命袴といはれるものです。あの中には真綿が入つてゐます。あれは陸上機ですと、着けなくてもさしつかへありませんが、水上機或ひは、海上にでた場合に、萬一海の中におちたとしますと、あれがあれば海の上を浮いてゐることができなのです。また、その上に青い紐を肩から腰の方にかけてゐるでせう。あれは落下傘の装置がしてあるのです。あの中に傘體といつて落下傘が入つてゐるのです。耳にあるのが傳聲管です』

やがて話が海軍の體當り精神に移つて行つた。K大尉は、前歐洲大戰の頃の話を引例されて、

『海軍の教育の體當り主義といつた戦術は、私は前歐洲大戰のころから行はれてゐたと思ひますね。大正三年九月四日のあの時に、日本の特務艦の若宮（水上機母艦）が青島攻撃に参加しましたが、飛行機といへば僅かでした。その時、すでに體當り戦術をやつたのですよ。當時ドイツの方では、日本ではフランスから非常によい飛行機や航空母艦をもつて行つてゐるから、うっかり空中戦をやつたら敵はないといつて、日本の飛行機におびえ

てゐたさうですよ。ところが實際は、さう最新式といつたものでなくて、飛行機には三八式小銃をつみこんでゐたり、錨の小さいやうな恰好のもので、これを敵機に投げつけて引つけて、撃墜させるといつた、今から考へると、相當原始的な武器ですが、これを持つて、それこそ體當りをするつもりで、大いに戦つたのですな。こんどの大東亞戦争でも、やつぱり、その三十年もの前から、いよいよ盛んになり、みがきのかかつた體當り精神を發揮して、或ひは自分の身を犠牲にして軍艦に體當りして撃沈させてしまつたりしてゐるわけですよ。たとへ武器は、ますますよくなつてゐるとはいへ、海軍の傳統的な犠牲的精神には、なんら變るところがないのですよ。それですから、その體當りする日にそなへてといひませうか、この適性検査をやるにしても非常に眞剣なものです。教へる方も死物狂ひなら、教はる者もそれ以上です。なにもわからぬ者を飛行機にのせるわけですから、實に大變ですよ。さうして、この三重海軍航空隊にゐるうちに、いつでも命をすてることができるといつた精神をたたきこむのです。もちろん、教へる人もさうですよ。教はる人もさうですよ。この四日間においても、飛行機の上ではちよつとした間違ひでも許されないといふことも教へてむわけですね。さうしなければ實際弾が槍ぶすまのやうにとんでくるやうなところを突つこんで行くのですから、命令をうけたらどんなことがあつても、あくまで

突つこんで行くといふ精神をも養ふわけです。それには少しのちよつとした間違いでも、それは間違いではないけない、それをきちんと直して行かなければいけないと教へてゐます……』

私はほんたうに、適性検査を實際にみることによつて、そしてK大尉の話を伺ふことによつて、眞の豫科練魂を知ることができたやうな心地がした。

空では、もう暮れようとしてゐるのに、まだ黄色い練習機が爆音もすさまじくとんでゐた。

私は、その練習機が、まさに、鍾馗になり、吞龍になつて、敵米英主都にとび立つて行くやうな錯覺におそはれたのである。

いや、これは決して錯覺ではない、近き日、この豫科練生が、やがて太平洋上に活躍する日、必ずや實現することであらうと、心にいひきかせながら、もう一度暮れゆく空に練習機の影を追つたのである。

副長が話す唐統からすべるの話

三重海軍航空隊に二度目の見學に行つた時、當時の副長T中佐と士官室の食堂で食事を

させて頂いたことがある。

T中佐は、

『この三重海軍航空隊の所在地である香良洲町は、伊勢中央部を西から流れてくる雲津川の三角洲の上にあつて、その上流の多賀地方は、吉野時代に北畠氏が據つた由緒のある土地で、數多くの勤皇の志士が盡忠の血を流したところです。近くにある香良洲神社の起りや、香良洲の語源は、豊臣秀吉が朝鮮、支那を大東亞が仲よくなるやう統一しようとした時に、この地點を基地としようと考えたことからすべるから、唐統といふやうなことがいはれ、それがやがて、香良洲にかはつて行つたのです』

と、話された。

熱田神宮、檀原神宮、伊勢神宮の近い、この三重海軍航空隊は、土地柄や環境からいへば非常にめぐまれてゐるのである。勤皇の志士が流した血は、この豫科練習生たちのからだの中によみがへり、その豫科練習生はやがて敵米英撃滅に向かつて、南に北に、敢然ととびたつて行くに違ひない。――

T中佐はまた有名な月月火水木金金といふ、あの歌の作詞者であると、あとで聞かされた。

そのためであらうか、三重海軍航空隊隊歌は非常に勇壯なものである。T中佐は、『この隊歌は、まだできて間もないので、歌へるのは軍樂隊の人と私ばかりですよ』さういつて、からからと笑はれて、その隊歌をみせてくださった。

「空の少年兵」(三重海軍航空隊隊歌)

- 一、雲出の川瀬月澄みて
太平洋の波寄する
神風伊勢の香良洲濱
世紀の空を翔けるべく
雄叫び擧ぐる高らかに
我等は空の少年兵
- 二、忠烈勇武まつしぐら
只聖訓をかしくみて
日夜に磨く闘魂の
夢にも握る操縦桿
明日のいくさを負ひて起つ
我等は空の少年兵
- 三、歴史は薫る三千年
金甌の榮永劫に
護り終ふべし秋津洲
正氣凜然皇猷を
資けて建てむ大東亞
我等は空の少年兵
- 四、雲にはためく軍艦旗
仰げ不滅の傳統を

今日は遙の北辰に

明日は十字の星の下

萬里扶搖にいざ搏たむ

我等は空の少年兵

しかし、この隊歌はT中佐が作られたのではなくて、少しばかり前この航空隊を巢立つて行つた、豫科練習生から隊歌を募集して、その中から拔萃した歌詞をT中佐がまとめたものであるといふ。T中佐は、

『これは私が作つたものではありませんよ。豫科練の連中です。一句一語たりとも、私の言葉は入つてをらんですよ。しかし、一人の豫科練のものではありません。みんなのよいところだけをとつて、私がまとめたのですからな』
さういつてをられた。

神宮の話。唐統の話。航空隊隊歌の話。私はこの食事の時の思ひ出が、今もなほ頭からはなれないのである。

感激にうるむ教官への母親の手紙

『こんなことがありました』といつて、三重海軍航空隊の分隊長の某大尉が話されたのである。

『ある豫科練習生が、妹からもらつた手紙なのですが、お父さんがお酒を飲んでこまるといふやうなことがあつたのを、私が知つてしまつたのです。その妹といふのは、國民學校三年位であつたと記憶してゐますが、正直に書いたのでせう。しかし、それを讀んだ、その豫科練習生が、ぼろりと涙を流したのを、私は見つけてしまひました。

いろいろ話し合つてみますと、父親が生來お酒が好きで、それを家の者がみな心配してをるとのこゝろをうちあげました。その豫科練習生も父親のことが心配だつたのですね。當時私は、すぎたとは思つたのですが、その豫科練習生を課業に専念させるためには、父親の酒飲みをやめてもらはなければならぬと思つて、長い手紙を、三度ばかり書きました。私のやうな若いものが忠告するのは、をこがましい限りでありましたが、その後、その父親は自分の息子のために、だんぜん酒をやめてくれたといふ手紙をうけとりましたよ。こんなことは、お聴かせするほどのことではないでせうが……』

いかに海軍航空隊と豫科練習生との家庭がまつすぐに、つながり合つてゐるかといふことを、私はしみじみと知らされたのである。

それからその某大尉から、分隊長宛にきた母親や、父親の手紙をみせて頂いたのであるが、いづれも感激そのものの手紙であつた。

手紙その一

拜啓

初めまして、私は第〇十一分隊〇班生田英雄の母生田秀子でございます。

朝夕はよほど涼しく相なりましたものの、日中の暑さは特別でございます。この暑さにもかかはらず分隊長様にはお元氣で軍務にご精勵の御事とお喜び申上げてをります。

さて、このたびは分隊長様の一兵員として、ご指導御鞭撻を仰ぎますのも、なにかのお約束ごと、不肖な件でございますが、よろしくお願ひ申上げます。

ただ正直なおとなしい少年であります故に、なにかと刻苦勉勵させてやつてくださいませ。

生後一年七ヶ月にして父をうしなひ、義理ある兄とは十六年前に生別し、女手で今日に至りましたもの、幼少のころは繪をこのみ畫家になるなどと申しをりました次第ですが、時局を考へて海軍少年飛行兵を志して、只今分隊長様のお世話を頂くやうになつたのでござります。

家には、とくより英雄の遺髪爪を置いて參つてをります。

私とても吾が子にして吾が子でございます。軍國の母として覺悟はできてをります。

決して女々しき振舞はいたさない覺悟をります。

大君に捧ぐるやうな子を持つて、一家一門の譽、名譽はこの上もないとよろこんでをります。

何卒至らない作ではございますけれども、なにぶんともによしなにお取計ひくださいまして、至らぬ點はよろしくお願ひ申し上げます。

草葉のかけで亡父、亡祖母は、よろこんでゐてくれることと思ひます。あれの武運長久を祈つてゐてくれてをります。

私も少しも早く君國のためにお役に立つ立派な我が海軍飛行兵とならんことを、朝夕に毎日祈りつづけてをります。つたない歌を二三首作りました。ご笑覽くださいませ。

大君に捧げまつらんひな一羽ひなもひなひなあらわしのひな

すこやかに育てしひなを大君に捧ぐる今日の母の感激

やまざくらつぼみなれども大君に捧げさかせんやまと心を

分隊長様みぎ亂筆で免くくださいませ。

時節柄おからだをお大切に遊ばされまして、何卒ひなどものためにご盡力くださいませ。

まづはご挨拶かたがた御願ひまで。眼が悪うございますので、しどろもどろ何卒おゆるしくくださいませ。

分隊長様にはご自愛專一に遊ばされませ。あらあらかしこ。

八月十八日

分隊長様

生田秀子

手紙その二

暑中御見舞申上げます。

毎日ほげしい暑さでございます。

分隊長様にはお達者で軍務にご奉公の御事とお察し致します。降つて私方家族一同元氣で食糧増産にご奉公致してをりますれば、何卒ご安心くださいませ。

さて、先般愚息光男事、休暇歸省を許されまして、まことに有難うございました。

九ヶ月ぶりにみる我が子の立派な軍服姿に、涙のこぼれるほど嬉しうございました。

あのやうに立派な軍人になつて歸省致しまして、母として名譽の上もなく、これ一重

に分隊長様のお蔭様と、あつくお禮申上げる次第でございます。

どうか今後とも一層ご指導くださいまして、一日も早く立派な海鷲としてお役にたつやう、ご指導の程を切にお願ひ申上げます。

私もあの子は随分負けぬ氣の子ですから、きつと立派にお役にたつてくれるものと信じてをります。

なにぶんよろしくお願ひ致します。

では時 柄分隊長様には、十分お體に氣をつけてご奉公くださいますやうお祈り致してをります。かしこ。

八月十六日

分 隊 長 様

光 男 母 より

手紙その三

さわやかな初夏の息吹きが空一杯にみなぎつて、そよ風になびく青葉の香りは、ことさら心にせまつてまわります。

しかし、晝となく夜となく、爆音すさまじい荒鷲の訓練をみとれてゐます時、又、ラジオに新聞に親しむ頃には、なんともいへない感じにうたれてしまひます。

さわやかな息吹も、その香りも、いつの間にか忘れて、強い心が浮きあがつてまわります。

そしてまた、必勝の意氣と米英撃滅の奮氣は、ゆきかふ市民の一人一人のまなこに讀みとれるやうに感じられます。

さて、先日はいろいろとご多忙の中にご懇切なるお便りをくださいまして、有難く感謝致してをります。

何卒愚息輝義を、どうか立派な海の荒鷲にそだてて頂けるやう、切に切にお願ひ致します。

大空をかけ廻つて自ら敵艦にぶつかつて行く、その影にひそんでをりますはかり知れない猛訓練があることを思ひます。

それでこそめざましい戦果が生れ、鬼神も泣かしめる働きができるのでありませう。

「梅檀は二葉より馨し」といはれますが、どうか些細なことまでご教育くださいまして、荒鷲としての精神體力を鍛錬し、お上の股肱として立派な働きのできる軍人にそだてあげ

てくださいませ。私たちも直接、間接にさす覚悟をります。

いよいよ戦争も激烈になり、火の玉となつて一億國民が長期建設に幕進する日がまゐりました。

ことにその第一線の飛行兵を養成する教育の任にご奉公なさいますことは、まことに光榮の至りと拜察致します。

どうか、お身御大切になされましてご奮勵くださいませ。では今日はこれでおいとま致します。

來たるべき日の天晴れぶりをお祈り致してをりますれば、あらためてお願ひ致します。

その手紙を読み終つた私は、感激に涙をうかべた眼で、大尉をみつめたのである。

『教官が、いかに豫科練習生のことや、その家庭のことをよく考へてゐてくださいるかといふことも、そのまた豫科練習生の父親や母親が、分隊長がほんたうの親にもまざる氣持で、豫科練習生の面倒をみて頂いてをるといふことを、いかに感激してゐるかが、この手紙で私はつくづくわかりましたよ。ほんたうに、よい手紙ですね、感激そのもの手紙とでもいふのでせうか』

さう私はいつたのであつた。

大尉は言葉をつづけて、『こんな話もありますよ』と冷たくなつたお茶を飲みながら話された。

『まだこの航空隊にをる豫科練習生の一人ですが、その少年も、敵米英を撃滅するためには、明日の十機より今の一機が必要で、それに乗る搭乗員もまた、その通り必要であることを痛感して入つてきたのでせうが、いざ入隊して、家から遠くはなれてみると、家が戀しくてしやうがないのですな。家が戀しい、といふのは、ただ單に子供心に、家から離れてさびしいといふだけではないのです。それにはこんな原因があつたのです。

家族といふとお父さんがゐない家庭で、たつたお母さんと妹の二人しかゐないのださうですが、長男の自分が航空隊に入隊してしまつて、さぞかしお母さんたちが、淋しく暮してゐることだらう。それに親戚の人が、ほんたうに家の方をみてやつてくれるかどうか、といふことを思ふと、家のことが心配でならないのですな。九州の方の中學出身の十七歳で入つてきた少年でした。

私は、そのことをちらりと知つて、休暇を利用して、はるばる九州のその子供の家まで行つて來ましたよ。近所で家の状況を調べたり、憲兵隊の手で調べてもらつたりして、こ

れならば、子供が家へ歸らなくても、お母さんも妹も大丈夫生活して行かれる。これは單にその豫科練習生の少年の氣苦勞にほかならないといふことをたしかめて、歸つてきました。

しかし、その豫科練習生も心配なことであらうと思つて、お母さんにきてもらつた。その豫科練習生の前で、

「お前はお母さんのことを始終心配してをるやうに聞いてゐるが、お母さんはお前が家へ歸つてくれるよりか、航空隊で立派な日本人となつてくれる方がいいとおつしやつてゐられるから、これからは心配しないで、しつかり課業にはげむやうに」

といつてやると、お母さんも、
「私のことを思つてくれるのは嬉しいが、それよりも、お前がここで立派な飛行兵になつて、お國のためにつくしてくれることが、とりもなほさずお母さんに孝行してくれることなのだよ」

と、涙を流していつて聞かせたのです。それから少しも心配するやうなことがなくなつたせゐか、前にもましてすばらしく成績がよくなつて、戦闘機に乗つたら、分隊で一番の戦闘機乗りになるであらうと、教官たちもうはさをするやうになつた練習生もをります



雄飛館の二階で班長をかこんで語りすごす楽しい日曜日の一とき

よ。

このやうな話は一例ですが、分隊長はほんたうに、練習生の兄がどこへ行つて、なにに務めてゐるか、弟がどこの學校へ行つてゐるか、お父さんやお母さんは健在であるかどうか。お父さんがなにか子供の心配するやうなことでもしてゐることはないだらうかとか、さうしたならば、それもできるだけ解決してやつて、豫科練習生の苦勞をとりのぞいてやらうなどと、夜も寝ずに分隊長は努力してをりますよ』

私はその話をきいて、このやうな生みの親にもまざる育ての親の分隊長を持つ、豫科練習生がうらやましくさへ思へたのであつた。

これにてこそ

これでこそ——このやうな分隊長の下にゐる豫科練習生が、さうして海軍航空隊の、輝かしい傳統の中にそだてられる豫科練習生が、やがて、一機の長となり、自ら敵の戦艦を沈め、敵の空母目がけて突つこむことのできる飛行兵となるのである。

私は三重海軍航空隊の見學を終へて、しみじみと思つたことは——。このいつくしみ深い分隊長、またお母さん役である分隊長、兄さんである班長の指導精神が的確に行きわたつてゐるからこそ、彈丸のごとき突撃肉薄の精神をやしなふことができ、敵艦に體當りする氣魄が生まれるに違ひない。また全軍勝利の緒をくつる、崇高なる犠牲的精神を養ひ、自ら相果てる、盡忠の精神も生まれるに違ひない。

さうして、自分の一身を殺して、全軍が利するならば、喜んで死んで行く、ほんたうの海軍軍人精神を會得することができるに違ひない——と痛感させられたのである。

ほんたうに、教官、分隊長は練習生とともに隊内に居住し、夜、便所にかよふ回数が多くなつても、すぐに明日は軍醫官にみせるといふ風なことまでも心配してゐられるといふことをさき、生みの親でも、そこまでは考へがよばないのではないかと思つた。

いはゆる、二十四時間教育といふものであらうか。

また少し覺えの悪い子供があるかと思ふと、班長や分隊長、分隊長が、夜の温習時間になると、自分で手をとつて、他の者におひつくやうに努力してゐる姿は、實に涙なくしてはみられない情景である。

かくてこそ、旺盛な氣力を持ち、沈着にして、機敏なる豫科練習生が生まれ、親子の情愛がわくのであらう。

豫科練習生の誰彼にきいても、「航空隊に入つてきたことを、ほんたうによかつたと思つてをります」とか、「喜んで、一日一日を送つてをります」とか、「學生生活にくらべて、こんなに張りのある生活があると思ひませんでした」とか口々にさかされるのであるが、このやうに、人から、豫科練習生と敬はれ、愛される、輝かしい、希望にみちた青少年たちの生活こそは、日本の青少年のあこがれの的ではないだらうか。

征け決勝の大空へ！

昭和十八年六月五日——。私は日比谷公園の一隅で、けふ國葬の禮を執り行はれる山本元帥の柩車をお待ちしてゐた。掃き清められた廣場にゐならば人々の顔は肅然として、咳

一つ聞えない。静かに晴れわたつた空の下を、遠く、太鼓とラッパの音が聞える。やがて、柩車は音もなく進んでくる。なみある人々は嚴肅そのものために、そして、あまりにも大きな悲しみのために、泣くことすら忘れて齒を喰ひしばつてゐたに違ひない。

やがて、黙々と、參列者の參進がはじまつた。十時二十七分には、かしこくも勅使徳大寺侍従の拜禮、つづいて皇后陛下、皇太后陛下御使の拜禮、十時五十分には、若き喪主、親族の拜禮が行はれた。

どこからともなく、静かに、しかし力強い、「命をすてて」の軍樂が聞えてくる。

突如銃聲が三度び、うち鳴らされた。この銃聲によつて、はじめて、はりつめてゐた氣持が、ほつとするのを感じると、臉にためてゐた涙が頬をつたはつてくるのだつた。

私の目の前にゐた老婆は、道ばたに、きちんと膝をそろへて、合掌してゐた。その肩はこまかくふるへてゐるのが、私の臉の奥ににじんで見えた。そこから起るすすり泣の中に米内光政委員長、嶋田海軍大臣、その他一萬五千の參列者の列がつづいた。

この足音こそ、敵米英撃滅の足音にほかならない。ふみしめる一億のちかひは、今こそ元帥の御魂に向かつて、一步一步、かならずや、敵米英を撃滅せずにはおかないといふ誓

のひびきでなくてならぬであらう。

今こそ、みづく屍とられた元帥の御魂の前に、悲しみの中にも、決然たたかひぬかんの氣魄、さうして敵米英必滅の決意を、元帥の靈前に捧げようとしてゐるのではないか。

ことに、私が胸をうたれたのは、あの眞珠灣攻撃の華とちつた、岩佐中佐以下九軍神の遺族のかたがた、それからまた、第二次特別攻撃隊の伴少佐の母堂、令弟のかたがたがこの式場においてになつてゐるのをながめたことである。かつて眞珠灣攻撃隊の九軍神の遺族として、同じこの日比谷で合同葬が行はれた、その日には、一滴の涙さへみせなかつた遺族のかたがたが、今、元帥の御魂を拜して、熱涙をぬぐふこともわすれてゐるのである。

私は、三重海軍航空隊の見學から歸つてきた今日、あの山本元帥の國葬の日のことを思ひ浮かべてゐる。なぜならば、山本元帥がかつての日、そだての親とられた各海軍航空隊にゐるところの豫科練習生が、やがて巢だつて、元帥につづいて飛びたつて行く姿を、きつと山本元帥はみつめてゐられるに違ひないと思つたからである。

戦ひはますます熾烈となつて行く。たたかかれても、たたかかれても物量をたのんで我をう

たんとする敵米英に向かつて、若い者の強さ、若さの強さによつて、敢闘して行かなければならない。

日本國民一億が一致團結して、若い者たちを守りたてて行き、さうして前線にこたへて明日の十機より、今日の十機と、増産にはげみ、その飛行機にのつて南に、北に、とびたつて行く空の若人をして、敵米英撃滅に思ふ存分の活躍をさせねばならない。

今こそ、青少年は山本元帥の御魂にまもられて、決勝の大空にとび立つ日がきたのである。元帥は、南の空で壯烈な戦死をとげられたが、しかし、その精神は、私たちの心に、血の中に脈々として息づいてゐることを、膽に銘じておなければならぬ。

一人でも多く搭乗員になれかしとの信念は、疑つて私にこの一冊の本を書かした。佐々木豫科練習生や木田豫備學生は、今、三重海軍航空隊で、やがて、敵撃滅の大空にとびたつて行く日を心に念じながら、日に日に訓練にいそしんでゐる。男に生まれた仕合せをしみじみと感じ、豫科練習生に、豫備學生になつた喜びにひたつて、訓練に日夜はげんでゐる。そのあとにつづく者は、誰でもない、皆さんである。國民學校に、中等學校に、また青年學校に、職場にゐる日本の青少年の皆さんである。皆さんの中から、第二、第三の山本元帥につづく者がでることを私は期待し、皆さんの腕と力で、敵米英をたたきつける

日が遠からずくることを信じてやまないものである。

私が、この原稿を書いてゐると、はるか向かふの方から、小さな子供があどけない聲でうたふのが聞えてくる――。

命惜しまぬ豫科練の

意氣の翼は勝利の翼

見事轟沈した敵艦を

母へ寫真で送りたし

私は眼をあげて、晴れわたつた空に、ぼつかりと浮かんだ白雲をみつめる。

その雲のかなた、三重海軍航空隊では、けふもまた佐々木豫科練習生、木田豫備學生、否、幾百、幾千の豫科練習生や豫備學生が、たくましくはげんでゐるのである。

なぜか今耳に聞える子供の歌ふ聲が、あの三重海軍航空隊歌

雲出の川瀬月澄みて

太平洋の波寄する

神風伊勢の香良洲濱

世紀の空を翔けるべく

雄叫び擧ぐる高らかに

我等は空の少年兵

の歌聲に變つて聞えてならなかつた。

八幡神社の境内にたてられた日の丸の國旗が、陽にきらきら反射して眼にしみる。それは丁度、三重海軍航空隊で仰ぎみた、あの軍艦旗のそれであるかのやうに――。

豫科練の試験問題

甲種飛行豫科練習生試験問題（昭和十九年度前期）

國語

一、左ノ文ノ空欄ノ處ニ漢字ヲ書キ入レヨ。

開戦以來、遠く太平洋を渡つて米本土の

しつつかつた帝國海軍

にまで悠々その

を現はし、米本土

に初の

二、左ノ語ニ讀ミ假名ヲ施セ。（片假名ニテ）

ハウ
ゲキ

を
加へた。

を
現はし、

米本土

に

に

初の

鞏固 氣魄 推移 掃蕩 剛毅
 昂揚 遂行 飛翔 擴張 企圖

三、次ノ文ヲ讀ミテ左ノ問ニ答ヘヨ。

畏きあたりに於かせられては、元帥多年の勳功を思召され、特に侯爵陸叡の御沙汰を賜つた。思ふに元帥の一生が千古の史上稀に見る輝かしい武勳に飾られてゐる事はこゝに改めて贅言を要しない。

(イ) 解釋セヨ

(ロ) 文語體ニ改メヨ

(ハ) 解釋セヨ

(ニ) 文語體ニ改メヨ

四、左ノ文ノ傍線ノ處ヲ解釋セヨ。

今ヤ國家存亡ノ關頭ニ立ツ。夫レ身命ハ輕ク責務ハ重シ。如何ナル難關モ、之ヲ貫クニ盡忠報國ノ赤誠ト果斷決行ノ勇猛心ヲ以テセバ、天下何事カ成ラザラン。

(イ)

(ロ)

(ハ)

(ニ)

(ホ)

數 學

1. 地球ノ半徑ハ 6371 米ニシテ世界ノ最高峰ニ至ルノ高サハ 8882 米ナリ。地球ノ半徑 1 米ノ球ト見做サバズベキトノ高サハ何種ノ割合ナルカ。之ヲ小數ニテ表ハセ。

2.

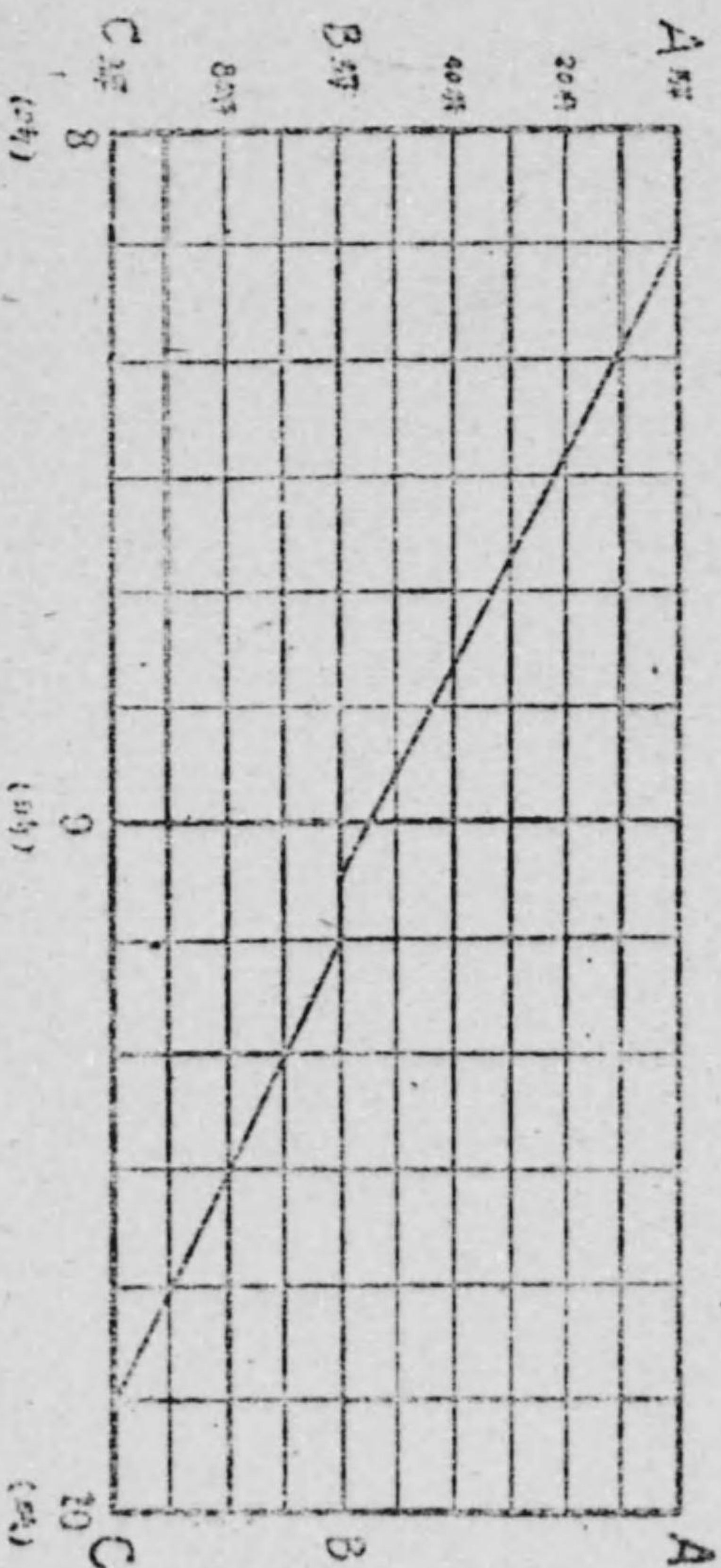
(イ) 次ノ方程式ヲ解ケ。

$$(x - 10)^2 = x(x - 16)$$

(ロ) 次ノ式ヲ簡單ニセヨ。

$$\frac{1}{x^2 - x} + \frac{1}{1 - x}$$

3.



圖ハ或ル下リ急行列車ノ運行ヲ示ス
 ぐらふノ一部ナリ。之ヲ讀ミテ次ノ
 表中ノ空欄ヲ填メヨ。

A 驛	B 驛	C 驛
發車時刻	到着時刻	發車時刻
8時 10分	時 分	時 分

上ニ倣ヒテ次ノ表ニ示サレタル上リ急行列車ノ運行ヲ示スぐらふヲ圖上ニ描キ、兩列車
 ノ會合時刻及ビ A 驛ヨリ會合地點マデノ距離ヲ求メヨ。

C 驛	B 驛	A 驛
發車時刻	通 過	到着時刻
8時 00分		9時 20分

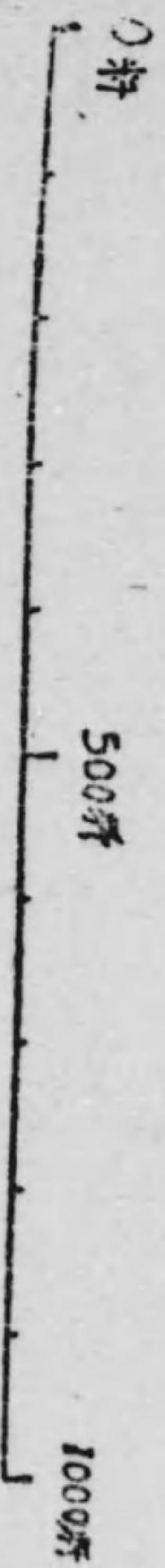
會 合 時 刻 時 分
 A 驛ヨリノ距離 杆

4. 時速 24 杆ニテ直航中ノ某艦ハ A ニ於テ燈臺 L ヲ航路ニ對シ左 30° ニ認メ、10 分
 後 B ニ到リテソレヲ左 60° ニ認メタリ。B ト L トノ距離如何。更ニ 10 分後ノ位置
 C ト L トノ距離ハ何杆カ。



5. 地圖上ニ A, B, C, D, E ノ五地點アリ。A ヨリ B ニ到ル最短路ヲ太キ線ニテ圖示セ
 ヨ。但シ C, D, E ノ各ヨリ 200 杆以内ニ入ラザルモノトス。(證明ヲ要セズ。作圖ニ使
 用セル線ハ抹消スベカラズ。)

物 象



A.

C.

B.

D.

E.

1. 體溫計ニツキ次ノ問ニ答ヘヨ.

(イ) 水銀ノ如何ナル性質ヲ利用セシモノカ.

鐵本塾
理科部

(ロ) 檢温後モ水銀ノ下ヲザルハ如何ナル構造ニヨルカ.

2. 螺線 (蔓卷バネ) ニ分銅ヲ

掛ケタルニ下表ノ如キ關係ヲ
得タリ.

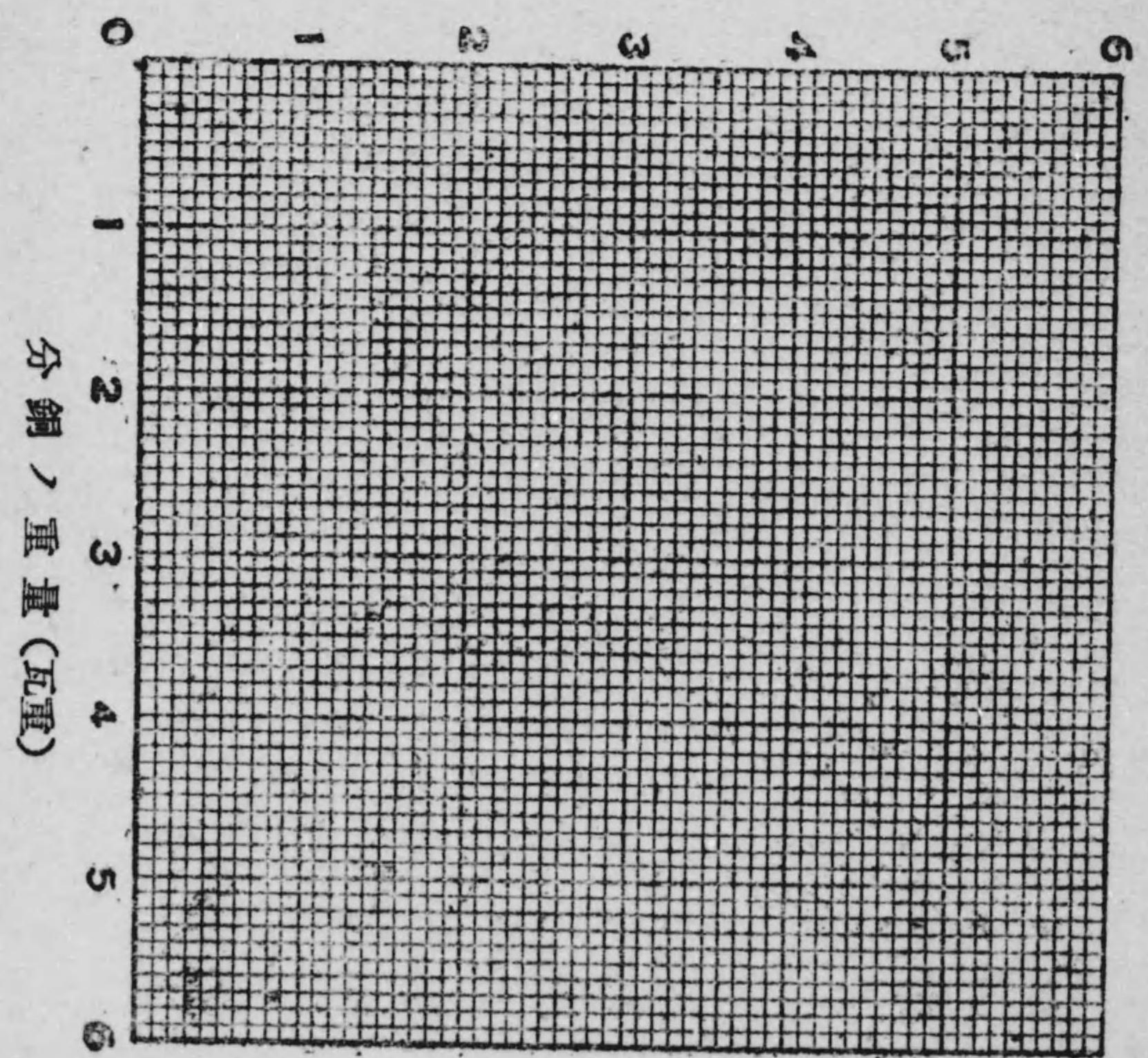
分銅ノ重量 (互重)	1.20	2.30	3.30	4.10	4.90	5.30
螺線ノ延ビ (種)	1.02	1.96	2.81	3.67	4.85	5.77

(イ) 分銅ノ重量ト螺線ノ延
ビトノ關係ヲ方眼紙上ニ圖
示セヨ.

(ロ) 分銅ノ重量ト螺線ノ延
ビトガ正比例關係ヲナス部
分ヲ太線ニテ示セ.

(ハ) 重量未知ノ物體ヲ掛ケ
タルニ延ビ2.00種トナレリ

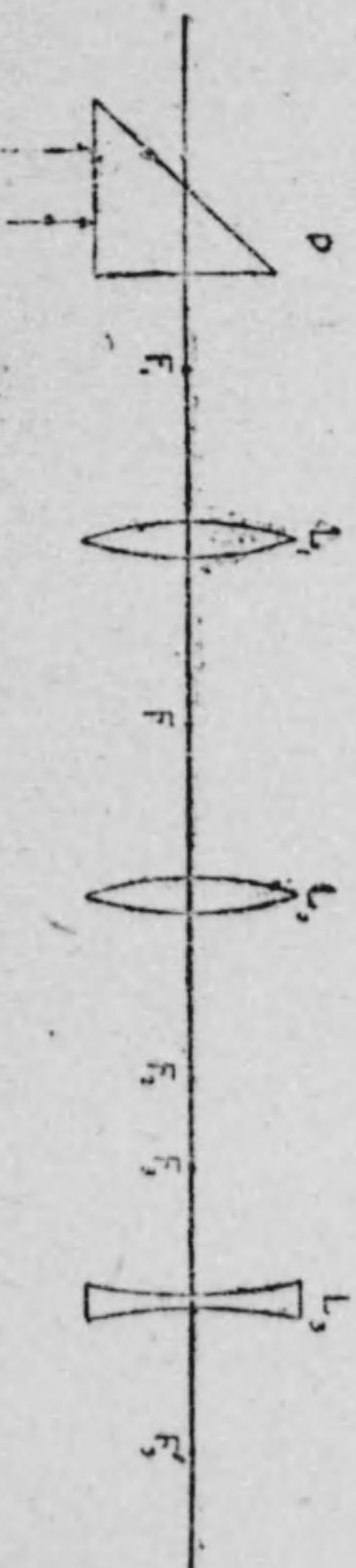
螺線ノ延ビ(種)



コノ物體ノ重量如何。

3. 次ノ括弧 () 内ニ適當ナル語ヲ挿入セヨ。
 空氣ヲ液化スルニハ、此ヲ () スルノミニテハ不可能ニシテ、空氣ヲソノ () 以下ニ冷却スルヲ要ス。
 ソノ爲ニハ、空氣ヲ急ニ () セシムルトキ、ソノ溫度ガ降下スル性質ヲ利用ス。而シテ液體空氣ハ、此ヲ蒸發セシムルコトニヨリ () ト () トヲ分離スルニ用ヘラル。

4. 圖ノ如ク平行光線ヲ二等邊直角「プリズム」ニ投射セシトキソノ進路ヲ記入セヨ。但シ F_1, F, F_2 ハ凸「レンズ」 L_1, L_2 ノ焦點ニシテ、 F_3, F_3' ハ凹「レンズ」 L_3 ノ焦點ナリ。



5. 酸ノ性質ヲ列記セヨ。

6. 黑色酸化銅ヲ水素ニテ還元スル際ノ反應方程式ハ次ノ如シ。



200 瓦ノ酸化銅ヨリ得ラルル銅ノ量ヲ計算セヨ。
 但シ銅ノ原子量ヲ 64, 酸素ノ原子量ヲ 16 トス。

甲種飛行豫科練習生試験問題 (昭和十八年度後期)

國語

一、左ノ文中 ノ部分ニ漢字ヲ書き入レヨ。

今ヤ皇國ノ 東亞ノ ハコノ一舉ニ懸レリ。

全國民ハ今次征戰ノ ト使命トニ深く思ヒヲ效シ、苟モ驕ルコトナク、又

忘ルコトナク、克ク竭シ、克ク耐へ、以テ我等祖先ノ遺風ヲ シ、難關ニ

逢フヤ必ズ國家發展ノ基ヲ啓キシ我等祖先ノ赫々タル史蹟ヲ仰ギ、雄渾深遠ナル

ノ
 シ、以テ
 ニ萬
 ナキヲ
 ヒ、進ンデ征戰ノ目的
 ヲ永遠ニ安ンジ奉ランコトヲ期セザルベカラズ。

二、左ノ語ニ讀ミ假名ヲ施セ。

須 臾 熾 烈 危 殆 提 携 優 渥
 邀 擊 雄 渾 恪 遵 恐 懼 使 嗾

三、左ノ文ヲ讀ミテ諸問ニ答ヘヨ。

人は立ち上る所なければ物にならず。人より頭を踏まれ、ぐづぐづとして一生を果すは口惜しき事なり。誠に夢の間なるにはつきりとして死に度きことぞかし。こゝに眼の附く者は稀なり。世に時めき、飛ぶ鳥落す勢のある人として天魔鬼神にてはあるまじ。「彼も人なり。我も人なり。されば少しも劣り申すべきか。若し誰々に乗り越えずんば腹掻切つて死ぬべし。」と突立ち上れば即座にうは手になる事なり。「功を積みてより」などとはまだるし。一念發起すれば則ち立ち上ることなり。

(イ) 如何ナル意味カ。

(ロ) 如何ナル意味カ。

(ハ) 文中ノ何處ヲ指スカ傍線ヲ引キテ示セ。

(ニ) 解釋セヨ。

(ホ) 解釋セヨ。

四、左ノ文ニ誤アラバ正セ。(誤ノ箇所ヲ消シ左傍ニ書キ入レヨ)

(イ) 人誰カソノ身ノ幸福ヲ希ハザル者ナカラシ。

(ロ) 印章ヲ持參セザルモノハ必ず捺印スルコトヲ要セズ。

(ハ) 人知ラザレドモ不正ノ行爲アルベカラズ。

(ニ) カ、ル失敗ハ蓋シ時機ヲ誤リシ故ナリ。

數 題

1. 次ノ式ヲ簡單ニセヨ。

$$(1) (a+b)^2 - (a-b)^2$$

$$(2) \frac{1}{1+\frac{x}{y}} + \frac{1}{1+\frac{y}{x}}$$

2. (イ) $x = -2$ ナルトキ $x^2 - 4x + 1$ ノ値如何.

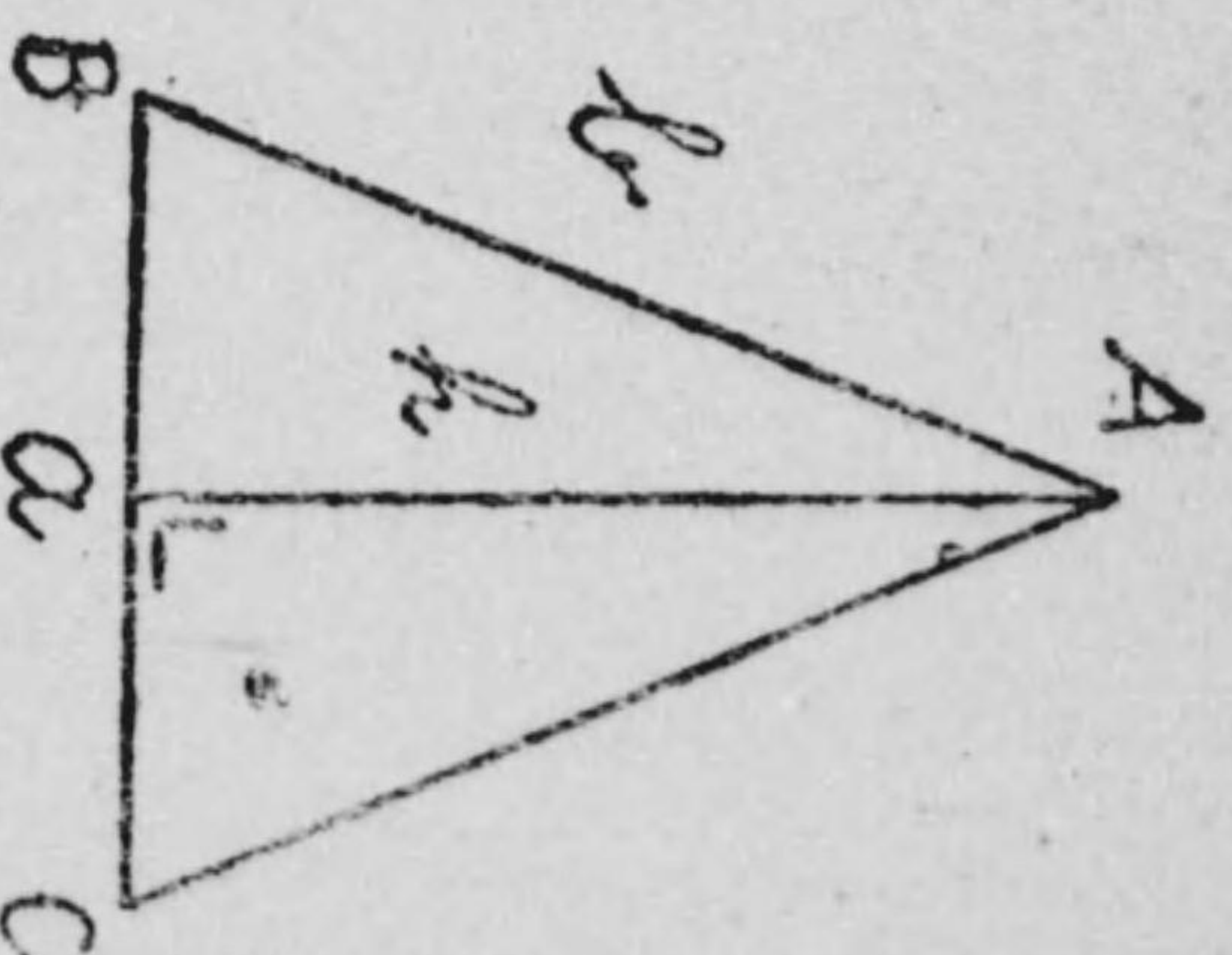
(ロ) $x^2 - 4x + 1$ ノ値ヲ 6 ナラシムル x ノ値如何.

3. 二等邊三角形ニ於テ底邊ノ長サヲ a , 他ノ邊ノ長サヲ b , 高サヲ h トスルトキ次ノ問ニ答ヘヨ.

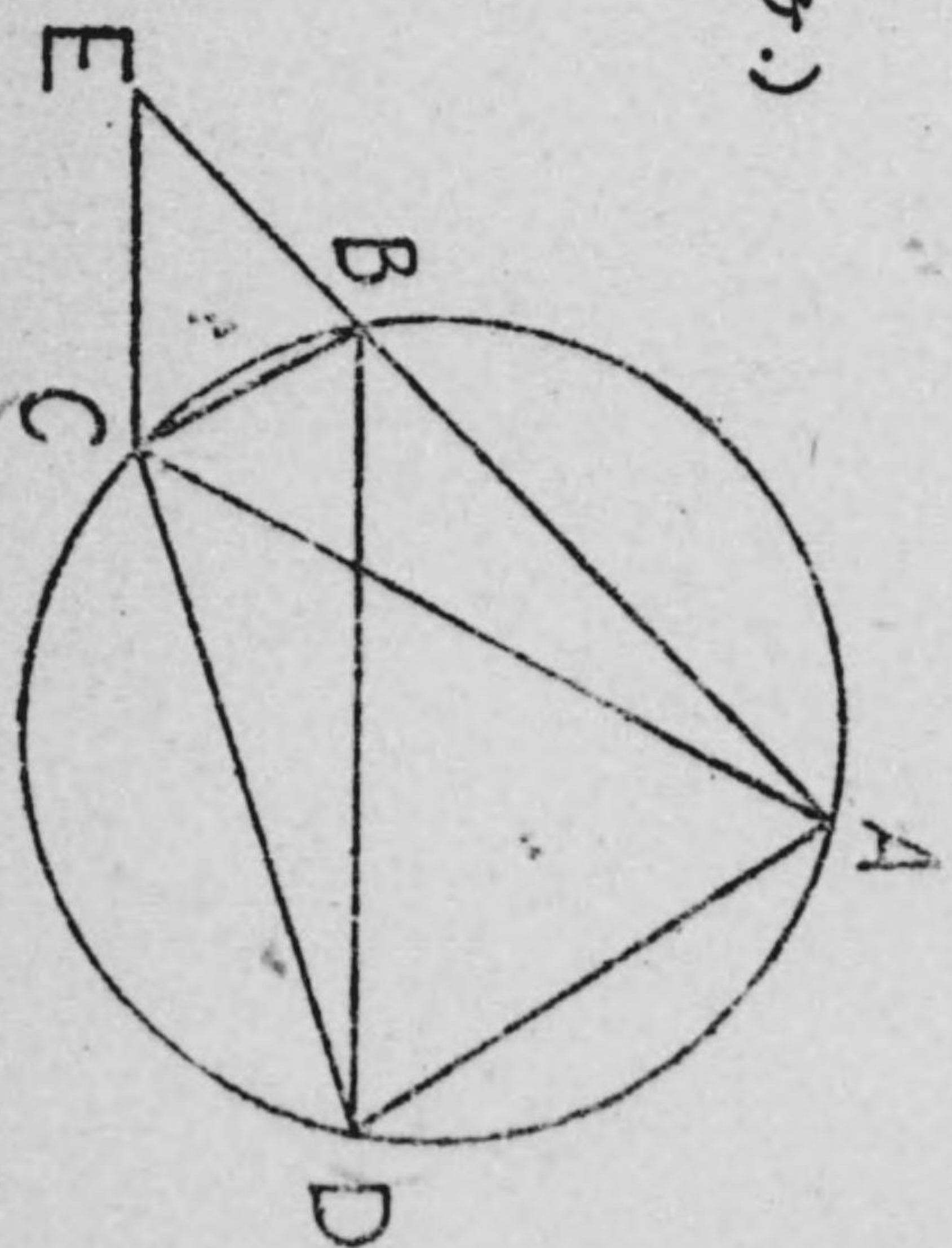
(イ) h ヲ a, b ニテ表ス公式ヲ作ル.

(ロ) $a = 7, b = 9$ ナルトキ h ヲ求メヨ.

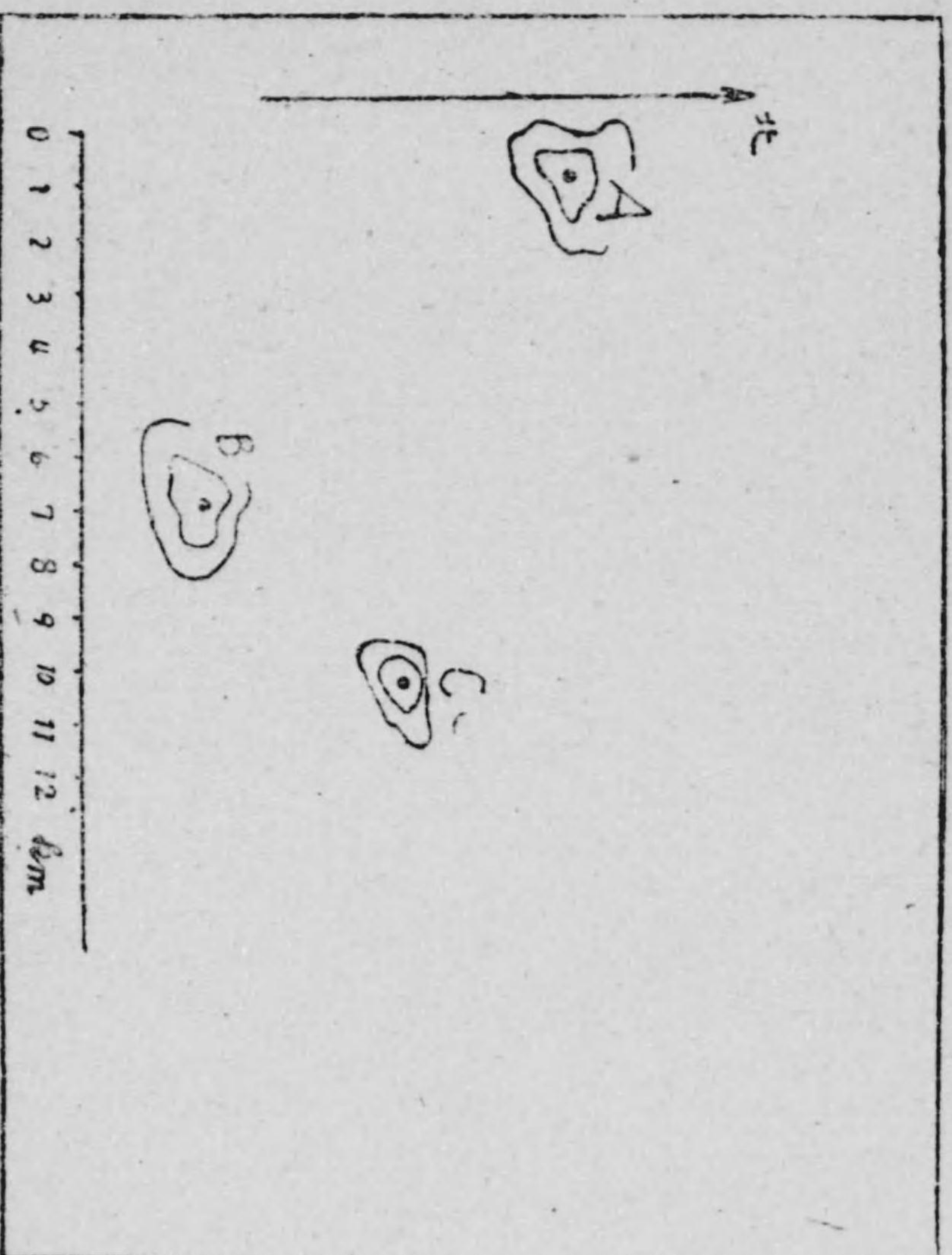
(小數第一位未滿四捨五入. 所要ノ運算ヲモ書ケ.)



4. 圓ニ内接スル四邊形 ABCD ノ頂點 C ヲリ對角線 DB ニ平行ニ CE ヲ引キ, AB ノ延長トノ交點ヲ E トスルトキ $\triangle CEB$ ト $\triangle ACD$ トハ相似ナルコトヲ證明セヨ.



5. 毎分 4 km ノ速サニテ北ニ向ヒ直進スル飛行機アリ. 下圖ニ於テ A, C ヲ一直線上ニ見テヨリ B, O ヲ一直線上ニ見ル迄ニ 2 分ヲ要セリトイフ. 飛行機ノ航路ヲ下圖ニ描ケ. (作圖ニ要シタル補助線ハ殘シ置ケ.)



1. 下記左側ノ物質名ニ關係アル右側ノ事項ニ左側ト同番號ヲ〔 〕内ニ記入セヨ。

例	(1)	犬	〔2〕	植物ナリ
	(2)	櫻	〔3〕	鑛物ナリ
	(3)	水晶	〔1〕	動物ナリ

- (1) 水素 [] 常溫ニテハ黄色ノ固体ナリ。
- (2) 硝酸 [] 空氣ノ主成分ヲナス。
- (3) 亞硫酸「ガス」 [] 中和實驗ノ際、指示薬トシテ用キラル。
- (4) 生石灰 [] 窒素肥料ニ用キラル。
- (5) 硫酸「アンモン」 [] 強烈ナル酸化劑ナリ。
- (6) 水銀 [] 漂白劑ニ用キラル。
- (7) 「フェノール」タレイソ [] 水ヲ電氣分解シタル時發生ス。
- (8) 食鹽 [] 常溫ニ於テ液狀ヲナス唯一ノ金屬元素ナリ。
- (9) 硫黃 [] 鹽酸、苛性「ソーダ」等ノ原料トナル。

(10) 窒素 [] 水ト反應シテ多量ノ熱ヲ發生ス。

2. 鹽化水素「ガス」ト「アンモニアガス」トニ就キ次ノ問ニ答ヘヨ。

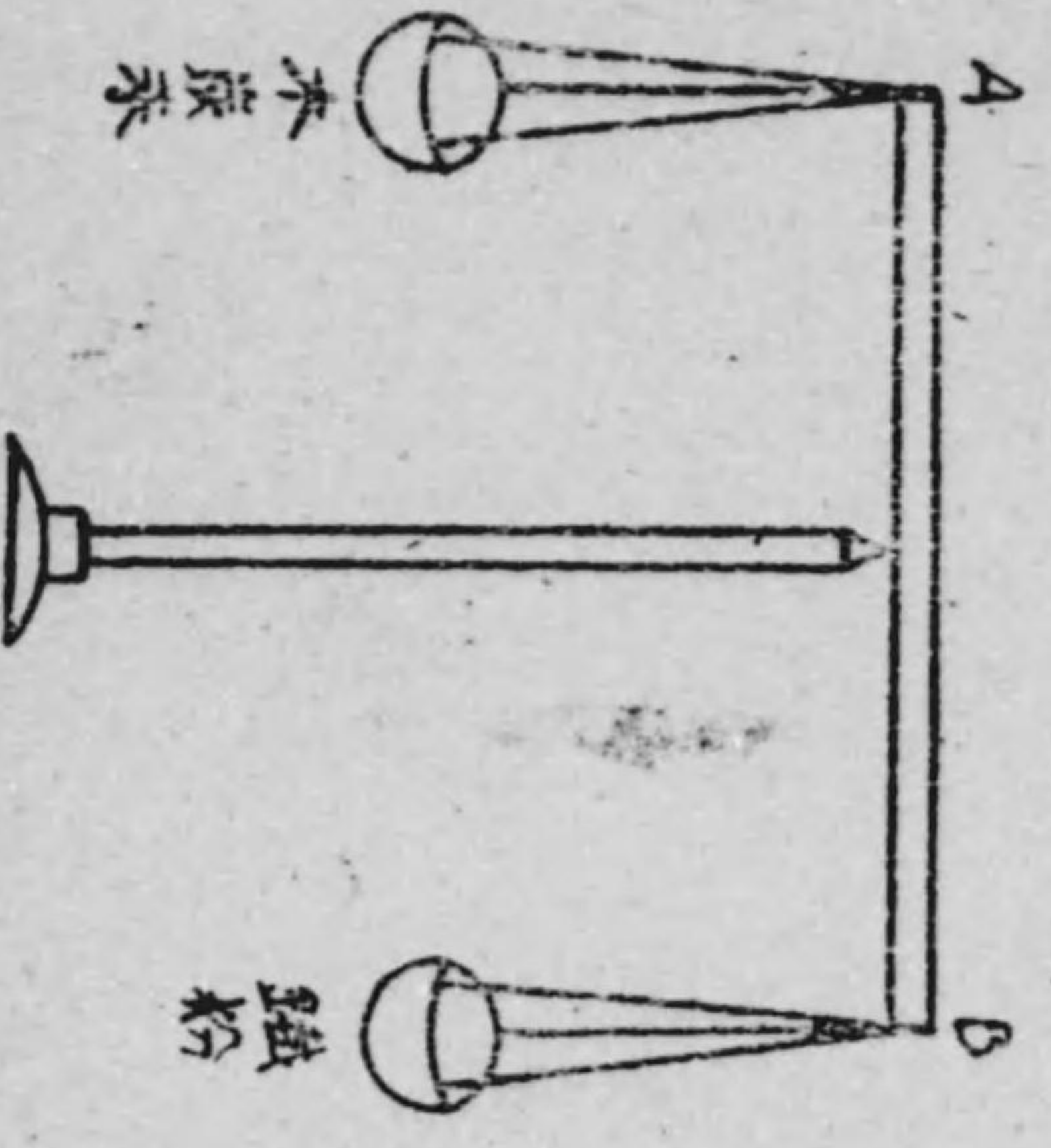
(イ) 兩氣體ヲ混合シタルトキ認メラル現象ヲ述ベヨ。

(ロ) 兩氣體ヲ別々ニ水ニ溶解シタルトキ得ラルル溶液ノ「リトマス」試験紙ニ對スル反應ヲ問フ。

(ハ) 同溫同壓ノ下ニ於テ鹽化水素「ガス」ハ「アンモニアガス」ノ約何倍ノ重サヲ有スルカ。

但シ原子量ハ H = 1, Cl = 35.5, N = 14 トシ小數第一位未滿ヲ四捨五入セヨ。

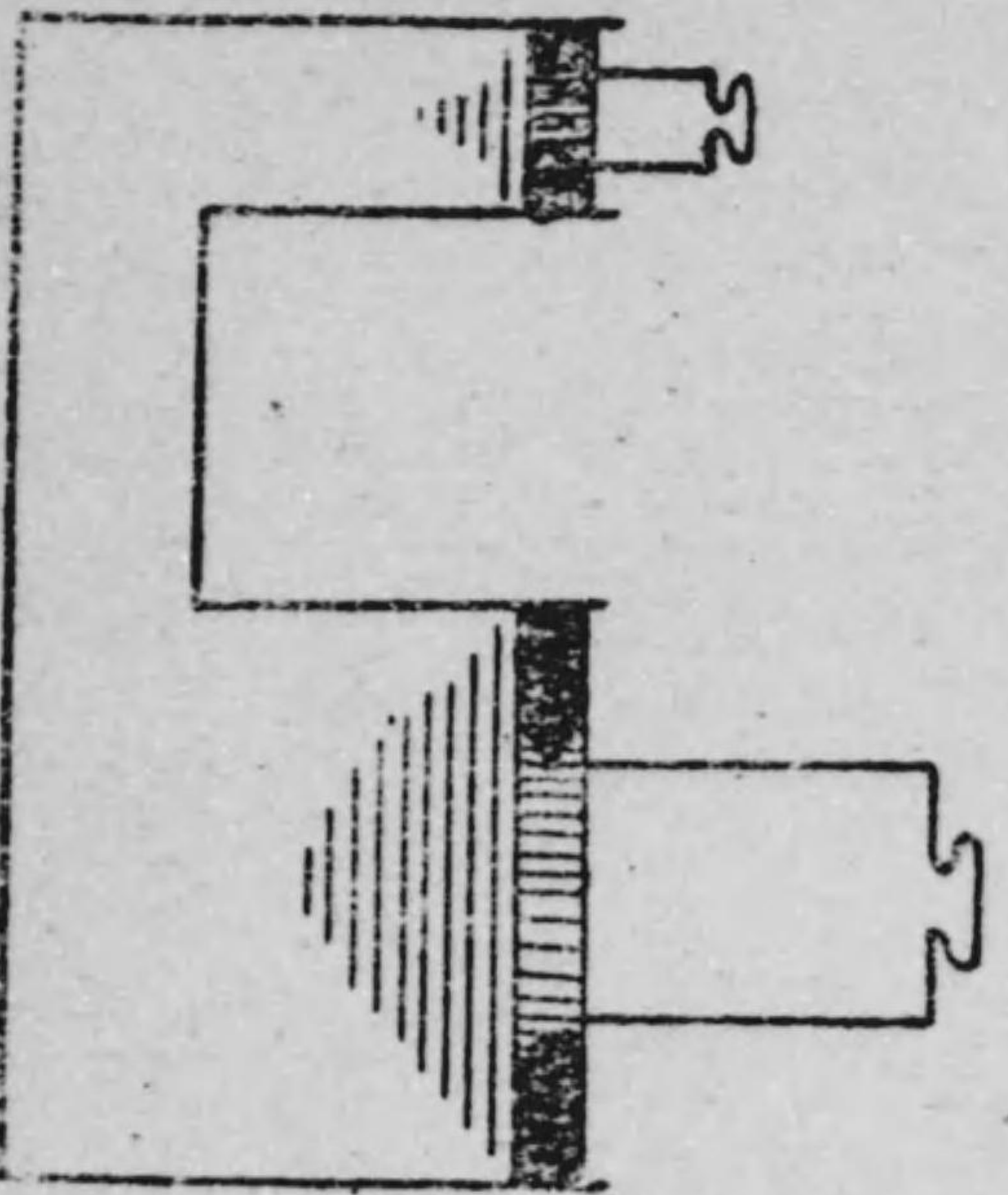
3. 天秤ニ左圖ノ如クニツノ磁製坩堝ヲ吊リ下ゲ A ニハ木炭末ヲ、B ニハ鐵粉ヲ入レテ釣合ハセタル後、兩者ヲ暫時ノ間強熱セシニ天秤ノ平衡ハ破レタリ。其ノ理由ヲ説明セヨ。



4. 次ノ問ニ答ヘヨ.

- (イ) 水ノ密度ノ最大ナルトキノ溫度ハ何度カ.
- (ロ) 比重 5 ナル物體 2.5 瓦ノ體積ハ幾立方糎カ.
- (ハ) 熱量ノ單位ハ何カ.
- (ニ) 絕對溫度 300 度ハ攝氏何度カ.
- (ホ) 2 氣壓ハ水銀柱ノ高サ幾糎ニ相當スルカ.

5. 下圖ノ如キ大小二箇ノ圓筒ヲ連ネタル器アリ. 小圓筒ノ活塞ノ面積ハ 12 平方糎, 大



圓筒ノ活塞ノ面積 588 平方糎ナリ.

コレニ水ヲ入レ, 小圓筒ノ活塞ニ 50 疋重ノ重量ヲ加ヘタルトキ, 大圓筒ノ活塞ニ幾疋重ノ重量ヲ加フレバコレト釣合フカ. 但シ活塞ノ重量ハ考ヘズ.

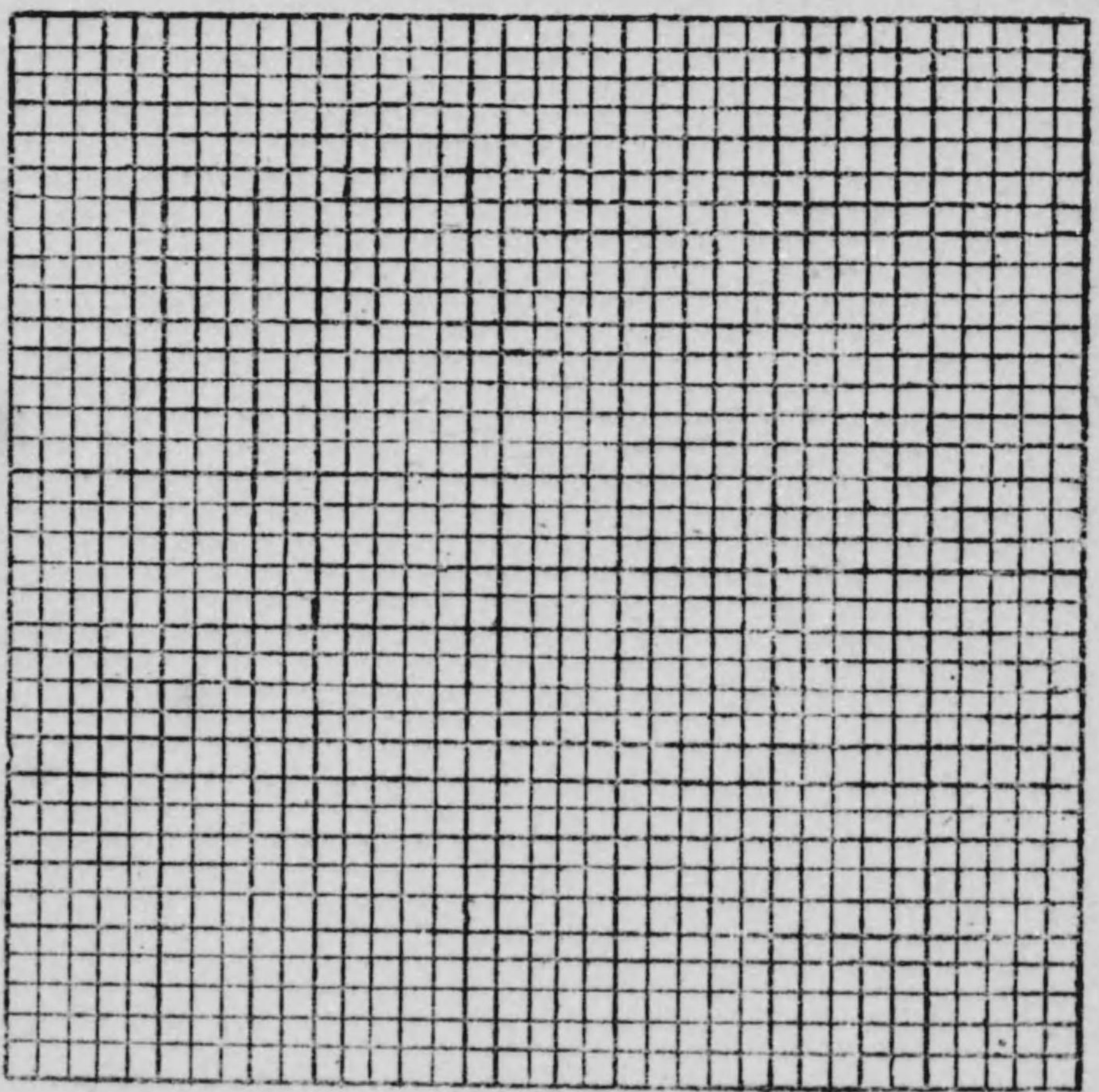
6.

溫度 (攝氏)	0°	5°	10°	15°	20°	25°	30°
飽和水蒸氣ノ壓力 (耗)	4.6	0.5	9.2	12.8	17.5	23.8	31.8

上ノ表ハ溫度ト飽和水蒸氣ノ壓力トノ關係ヲ示ス.

- (イ) コノ關係ヲ示ス曲線ヲ右ノ方眼紙上ニ描ケ.
- (ロ) 露點 12°C ノトキノ空氣中ノ水蒸氣ノ壓力ヲコノ曲線ヨリ求メ, 且ツコノ點ヲ曲線上ニ明示セヨ.

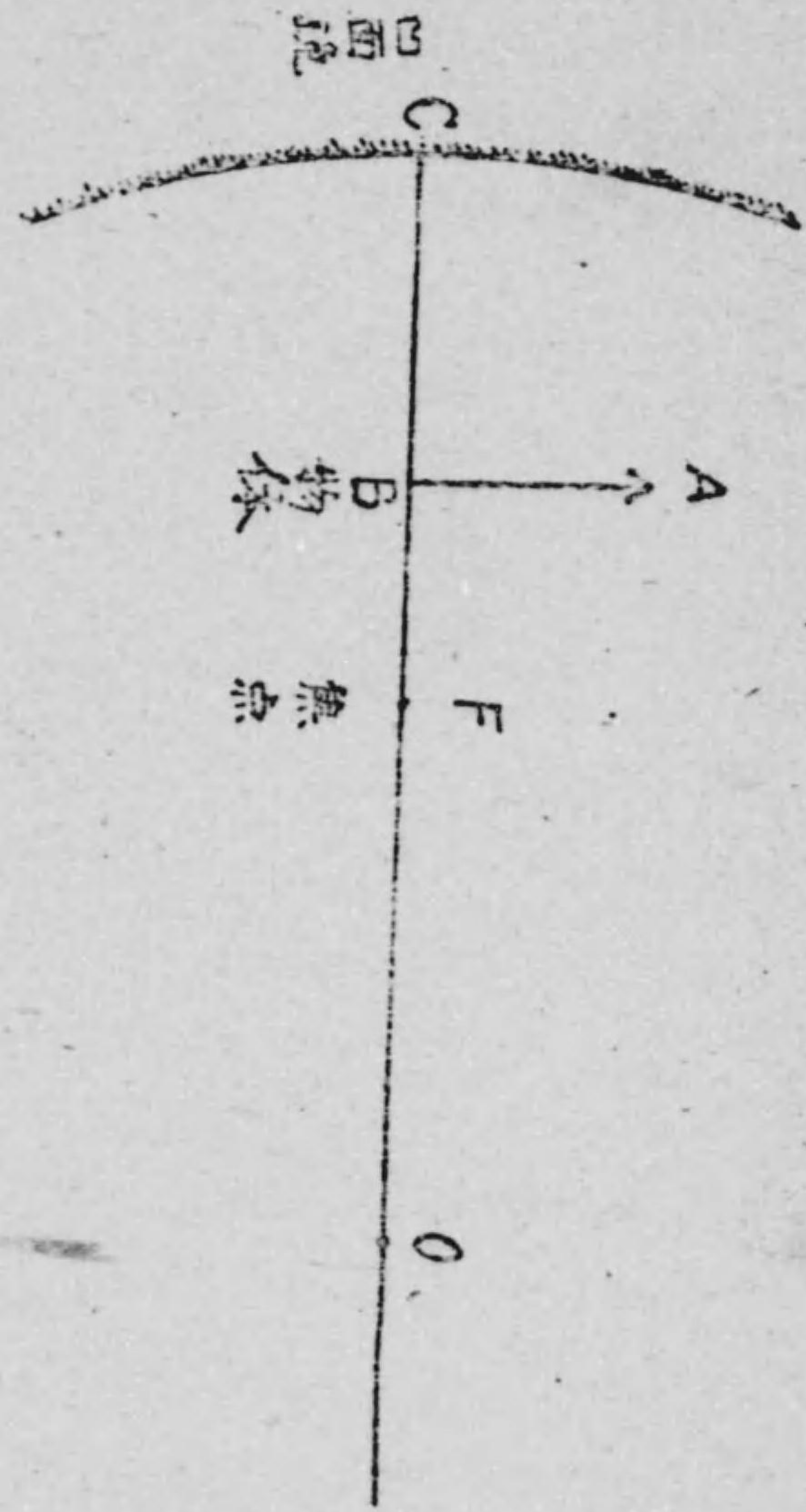
飽和水蒸氣ノ壓力(耗)



溫度 (C)

- (ハ) 氣溫 20°C, 露點 12°C ノトキ湿度ハ何程カ.

六、圖ニ於テ物體ノ像ヲ求メ、且ツソノ種類ヲ記セ。



甲種飛行豫科練習生試験問題 (昭和十八年度前期)

國語

一、次ノ文章中傍線ヲ附シタル處ニ適當ナル漢字ヲ書キ入レヨ。
 海上^{ケシリ} ^{ソシキ}といふものは、^{ヨウゴ}ある商船隊と、これを^{カクホ}しその交通を^スなる海軍によつて初めて成り立つものである。

二、次ノ語ニ讀ミ假名ヲ附ケヨ。

天 稟 磨 下 完 遂 索 敵 從 容
 俘 虜 拿 捕 出 帆 經 綸 要 衝

三、左ノ文ヲ讀ミテ諸問ニ答ヘヨ。

武力トイフハ、艦船兵器ノミニアラズシテ、^(イ)之ヲ活用スル^(ロ)無形ノ實力ニアリ。^(ハ)百發百中^(ニ)ノ一砲、能ク百發一中ノ敵砲百門ニ對抗シ得ルヲ覺ラバ、我レ等軍人ハ、主トシテ武力^(三)ヲ形而上ニ求メザルベカラズ。

(イ) 「之」トハ何ヲサスカ。

(ロ) 「無形ノ實力」トハ何カ。

(ハ) 如何ナル意味カ。

(ニ) コノ語ニ相當スル語ヲコノ文中ニ求メヨ。

四、次ノ文中傍線ヲ施シタル部分ヲ解釋セヨ。

敏捷果斷ハ軍人ノ最モ緊要トスルトコロナリ。^(イ)干戈倉卒ノ際ハ勿論、平日ト雖モ、軍務ノ遂行ニ當リテ明確ナル判断ヲ缺キ躊躇逡巡、爲ニ事ヲ誤ルガ如キハ、軍人トシテ最モ忌ムベキ所トス。平素ヨリ時機ヲ見ルコト明ラカニ、學術ノ運用ニ習熟シ、^(ニ)咄嗟ノ事變

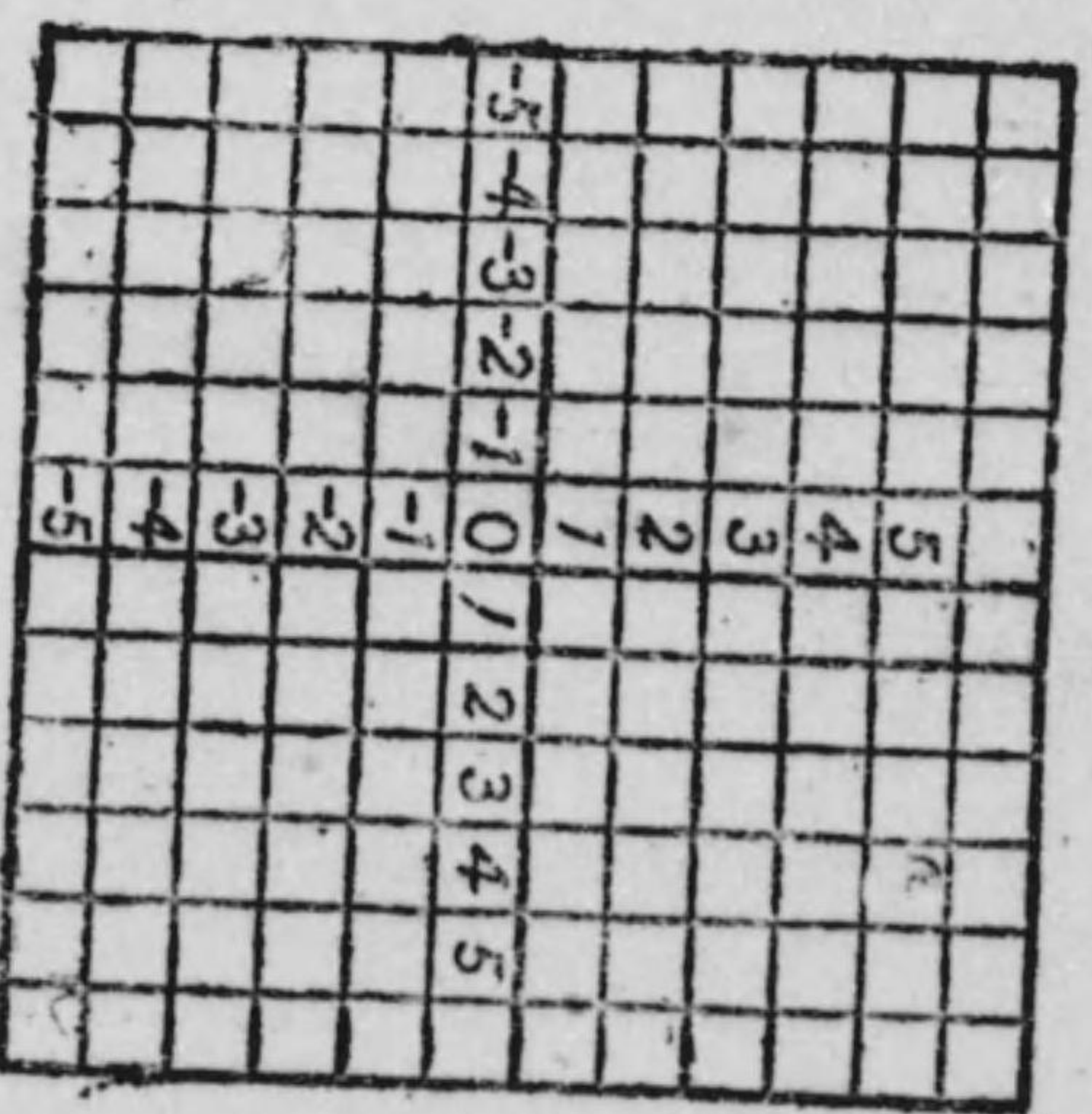
ニ方リテ即時ニ、^(*)機宜ノ處置ヲトルノ修養アルヲ要ス。

- (イ) (ニ)
- (ロ) (ホ)
- (ハ)

數 學

1. x^2+3x+2 ヲ因數ニ分解セヨ。

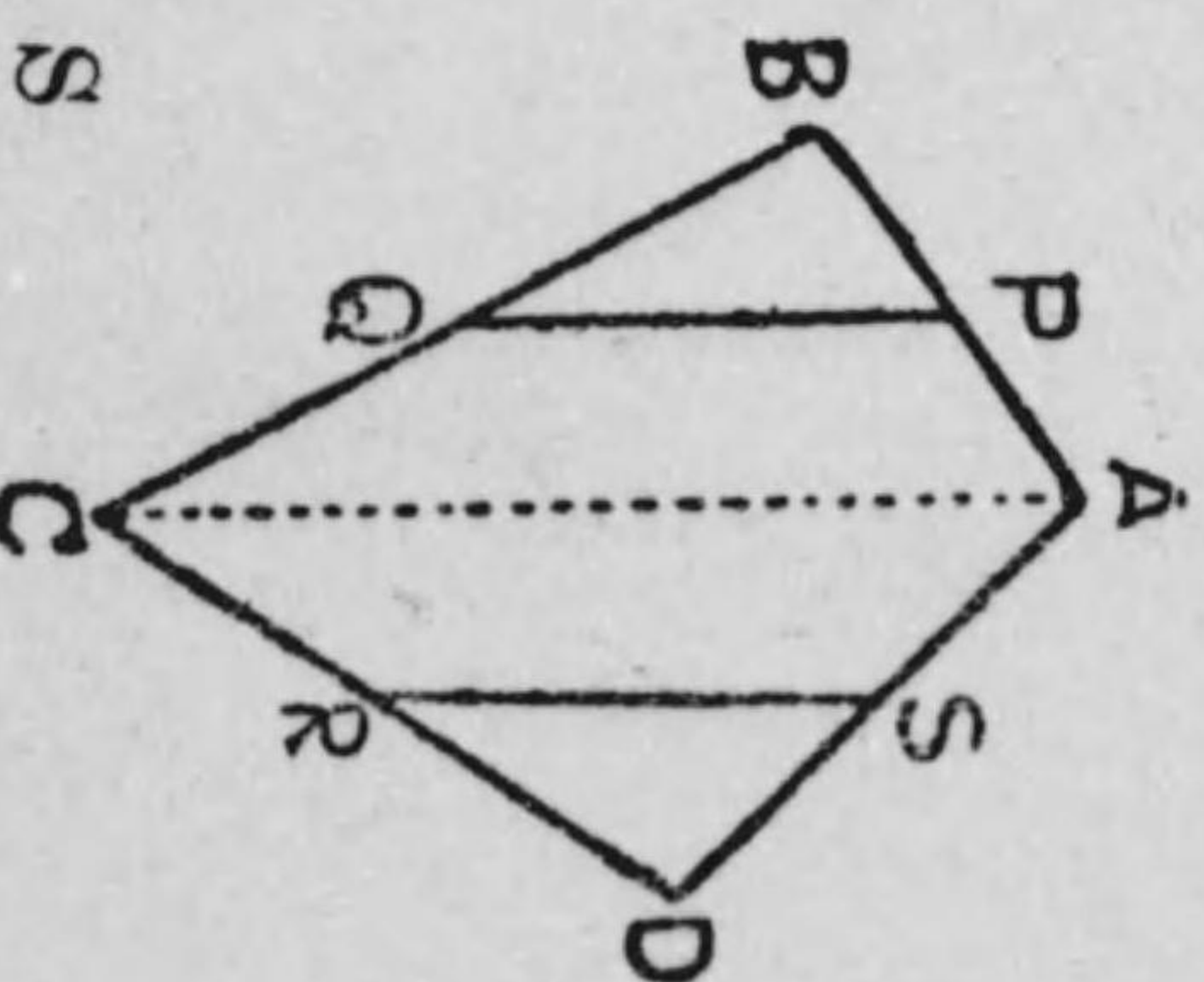
2. 三點ノ座標ガ $(+2, +3), (-3, +2), (-3, -2)$ ナルトキ、コノ三點ヲ頂點トスル三角形ヲ右ノ方眼紙上ニ畫ケ。



3. 次ノ聯立方程式ヲ解ケ。

$$\begin{cases} 2x + 3y = 17 \\ 3x - y = 9 \end{cases}$$

4. 四邊形 ABCD ノ各邊 AB, BC, CD, DA ノ中點ヲ夫々 P, Q, R, S トスレバ PQ || SR ナルコトヲ證明セヨ。

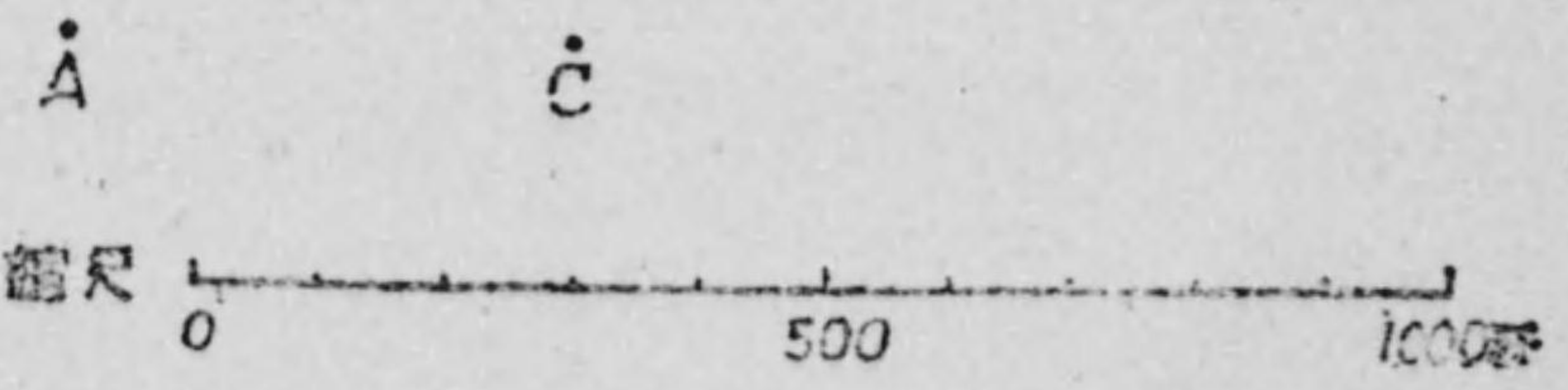


5. $\frac{1}{u} + \frac{1}{v} = \frac{1}{f}$ ヲ f ニツキテ解ケ。

6. 圖ニ於テ A, B, C ハ飛行場ノ位置ヲ示ス。 A ヲヨリ B ニ向ケ出發セル時速 300 軒ノ旅客機ハ途中豫定ヲ變更シ C ニ向ケ方向ヲ變ジ、A 出發後 2 時間ニシテ C ニ到着セリ。コノ旅客機ノ航路ヲ右ノ圖上ニ作圖シ作圖法ヲ簡單ニ述ベヨ。但シ證明ヲ要セス。

1. 次ノ () 内ニ適當ナル文字ヲ入レヨ。

- イ. 面積ノ C. G. S. 單位ハ () ナリ。
- ロ. 雨滴ノ球狀ヲナスハ水ノ () ニヨル。
- ハ. 一定質量ノ氣體ノ () ハ溫度一定ノトキ壓力ニ比例スル。
- ニ. 攝氏 0 度ハ絕對溫度ニテハ () ナリ。



ホ. 水ハ () ノトキ攝氏100度ニテ沸騰スル。

2. 1. 熱ノ移動ノ方法ヲ擧ゲヨ。

ロ. 池水ガ冬季ソノ表面ヨリ凍ル理由ヲ述ベヨ。

3. 長サ 20 糎ノ「ゼンマイ」ニ 50 瓦ノ分銅ヲ吊セバ 30 糎トナリ。次ニ鉛球ヲ吊セバ 26 糎トナレリ。コノ鉛球ノ重サヲ問フ。

4. 凸「レンズ」ニヨリテ實像及ビ虚像ヲ生ズル場合ヲ圖示セヨ。

5. 次ノ各項ヲ化學的ニ説明セヨ。

(イ) 同素體

(ロ) 潮解性

6. 空氣ノ主成分ヲナス物質ノ内三個ヲ列記セヨ。

7. 炭酸「ガス」ノ檢出法ヲ述ベヨ。

8. 水素ガ燃焼スル時ノ化學方程式ヲ示シ、且ツ之ヲ用ヒテ 50 瓦ノ水素ガ完全ニ燃焼シタル時生ズル水蒸氣ノ質量ヲ瓦ニテ表ハセ。但シ水素ノ原子量ヲ 1、酸素ノ原子量ヲ 16 トシテ計算セヨ。

乙種飛行豫科練習生試験問題 (昭和十八年)

讀書

一、次ノ語句ニ讀假名ヲ附ケヨ。

影 響
涵 養
協 贊
效 果

喊 聲
物 資
僚 機

高 度
職 域
眼 界

二、次ノ文中片假名ノ部分ヲ漢字ニ改メヨ。

露國が の勢を回 せんため、本國に於ける海軍の全勢力を げて編成せる は、 海 を て、浦鹽に向はんとする。

(1) 軍 費
(2) 注 視

(3) 路すがら
(4) 交 戰

(5) 識者の笑を免れず

數 學

(一) 次ノ式ヲ計算セヨ。

(1) $5367 - 628 + 4687$

(ロ) $\frac{1}{6} + \frac{1}{8} + \frac{1}{4}$

(二) 次ノ式ヲ計算セヨ。

(1) $5694 \div 26$

(ロ) $23.76 \times 2.5 - 2.75$

(三) 次ノ式ヲ計算セヨ。

(1) $7 \text{ 分} \div 2 \text{ 分} 20 \text{ 秒}$

(ロ) $(9\frac{3}{5} - 2.4) \div 1\frac{4}{5}$

(四) スワトラ島ト巴厘半島ノ面積ヲ合セルト 670800 平方料デ、スワトラ島ノ面積ハ巴厘半島ヨリモ 196800 平方料ダケ多ク、各ノ面積ヲ求メヨ。

(五) 砂糖ヲ或隣組ノ各戸ニ配給スルノニ 1 戸ニツキ 2 斤ヅツトスレバ 11 斤餘ルガハ 3 斤半ヅツトスレバ 7 斤不足スルトイフ、此ノ隣組ノ戸數及ビ砂糖ノ量ヲ求メヨ。

あとがき

この本は、海軍航空本部教育部のS中佐はじめ、當局のいろいろの御指導、並に三重海軍航空隊の前副長、現副長、またT少佐、T大尉、N大尉はじめ、幾多の分隊長、教官のなみなみならぬ御指導、お骨折りによつて生まれたことは、このあとがきをかりて、厚くお禮を申上げる次第であります。

また、實在の人物、佐々木豫科練習生、木田豫備學生（いづれも假名）があつたこと、さうしてまた、現下一人でも多くの飛行兵を前線に送らなければならぬといふ信念が、私をして、これを書かしたものであります。

この大東亞戦争こそ、若人の捧げる、殉國の血によつてのみ、敵米英は撃滅できるのであります。戦局はますます熾烈になつて行く今日、支那事變、大東亞戦緒戦から、よく戦ひ、醜の御楯となつて、喜んで散つて行つた豫科練習生や豫備學生の先輩のあとをついで、皆さんがたが、やがて、その屍をのり越えのり越え最後の勝利者となつて、勝利の旗標をうちたてるために、一人でも多く、一日でも早く、豫科練習生に、豫備學生に、自ら進んで行かれることを希望してやまないものであります。

その意味において、土浦よりか、あまり知られてゐない三重海軍航空隊にたまたま私の知つてゐる者が入隊したといふことから、三重に取材してこの本を編むにいたつたのであります。讀者の皆さんが、少しでも讀後お役に立つやうなところがありますならば、これにまさる幸せはありません。

昭和十九年三月

萩窪にて

西田利明

追記 Ⅱ この本が世に出るにあつて、何くれとなく手をとつて御指導頂いた、有馬正文閣下が、その後航空隊司令官の要職にあたられてゐられたが、臺灣沖海戦で壯烈な戦死をとげられた報に、この本の出版される寸前の今日接したのです。

ああ有馬閣下、閣下は、我が海軍傳統の『指揮官先頭』精神をもつて敵制式空母に、體當りを敢行なされた。これこそ、この尊い教へこそ、閣下が身をもつて示された『我に續け』の御教へでなくてはなりません。

閣下の御戦死の報は、前線の全將兵に比類のない闘魂を燃え立たせ、銃後を守り、決戦増産にはげむ一億國民を更にふるひたたせてをります。

閣下の御魂に答へ奉りますこと——それは青少年諸君としては、『閣下の後に續く』ことをおいて何があります。諸君、眼を静かにとちてみなさい。閣下の有馬閣下の、諸君を招く切々たる聲が聞

豫科練物語

(日本出版會承認)
530044號



えてきはしませんか。「決戦は天空だ、空にこい青少年よ」と。

有馬正文閣下、私もほんたうにお世話になりました。閣下の御生前、手にとつて御覽頂けるはずのこの本が、只今出来ました。どうぞ御高覽下さい。——とつしんで御靈前に捧げ奉る次第であります。(なほ、相ついで亡くなつた父、母、叔父瀬下季男の靈前にこの著書を捧げます。)

(一九・一〇・二二記)

◎ 定價金二圓五十錢

特別行爲税相當額十五錢

合計金二圓六十五錢

送料三十錢

昭和十九年十二月三月初版印刷

昭和十九年十二月十五月初版發行(2,000部)

著者 西田利明

發行者 田中貫行

印刷者 加藤保

配給元 日本出版配給統制株式會社

發行所 株式會社 鶴書房

東京都日本橋區久松町一三

(會員番號一〇二五四)
電話・浪花〇五一六番
振替・東京八二三五番







鶴

書房
刊

原價(税込) 2.65